

史跡和歌山城 第30・31次発掘調査報告書

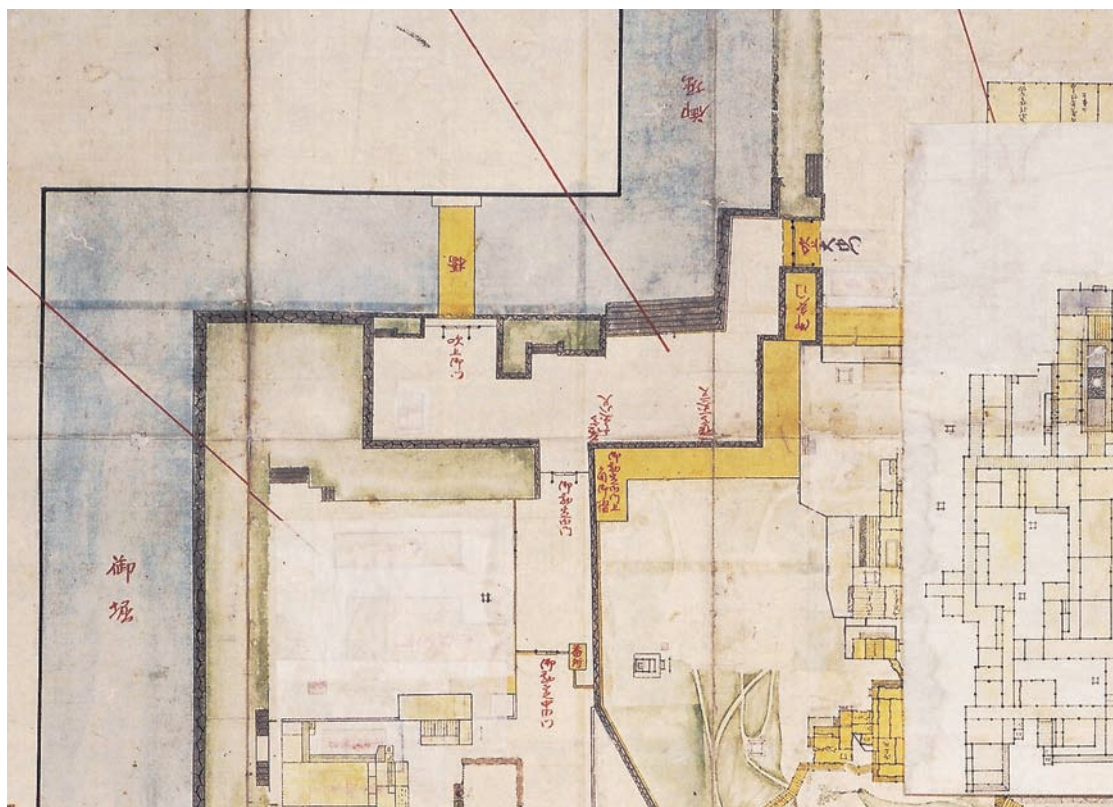
— 吹上口保存整備事業に伴う発掘調査 —

平成24年3月

和歌山市まちづくり局

まちおこし部

和歌山城管理事務所



口絵 1 「和歌山城御城内総御絵図」部分（和歌山県立図書館蔵）



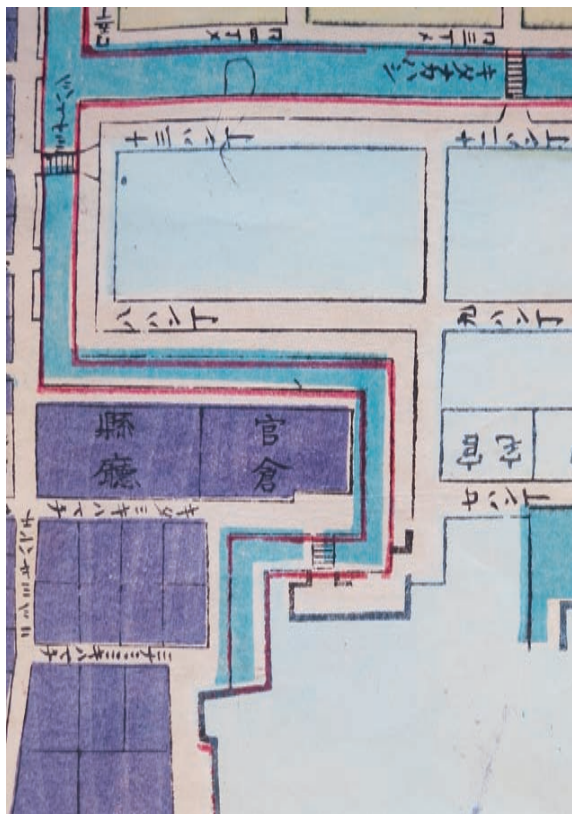
口絵 2 「和歌山城絵図」部分（個人蔵）



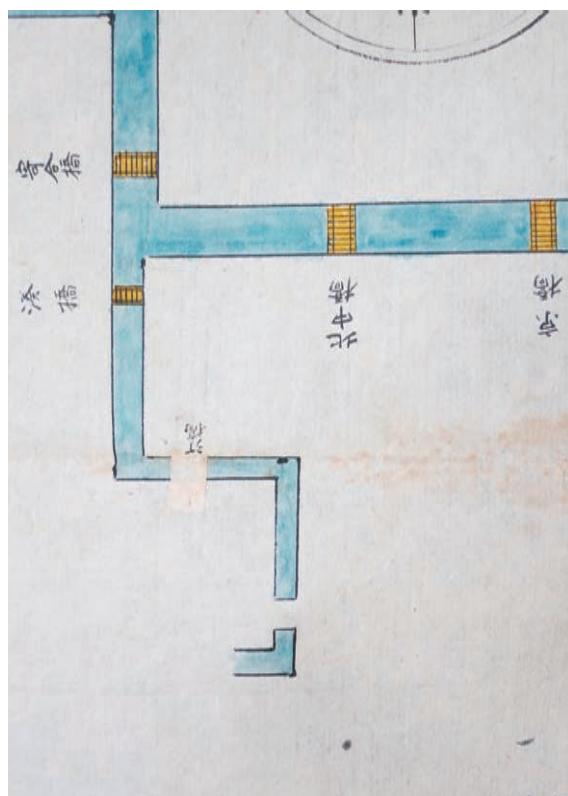
口絵 3 「道中記のうち自欠作町到御城之図(附遠望御城之図)」(和歌山県立図書館蔵) 吹上口は右端



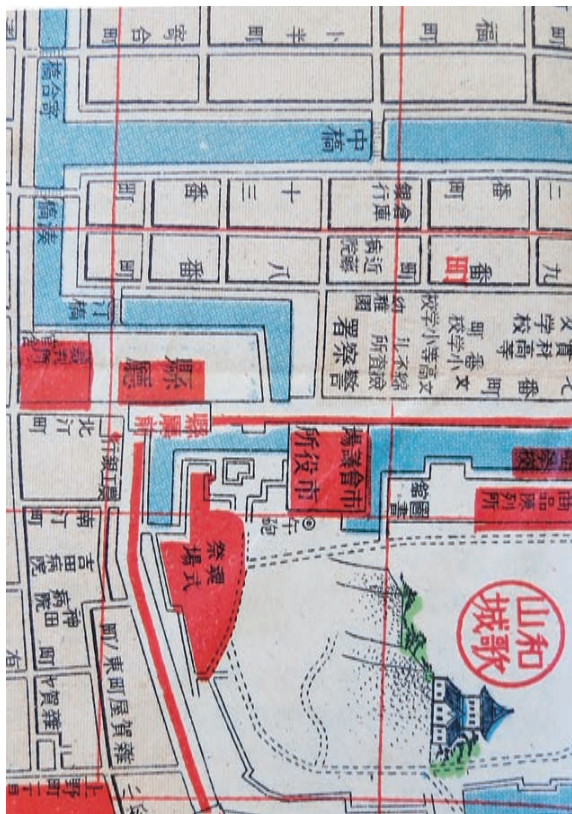
口絵 4 岩瀬広隆画「邦安社御祭礼車楽之図」(和歌山県立博物館蔵) 吹上口は中央左



口絵5 「大区小区制期の和歌山絵図」
(和歌山市立博物館蔵)



口絵6 「市中堀川筋架橋図」(個人蔵)



口絵7 「和歌山和歌浦遊覧案内地図」
(和歌山市立博物館蔵)



口絵8 「和歌山都市計画街路網図」
(和歌山市立博物館蔵)



口絵 9 第30次調査第4区全景（西から）



口絵10 滴水瓦（違鷹羽紋）



口絵11 鯨瓦

序 文

和歌山城は、天正13（1585）年に羽柴（豊臣）秀吉の命を受け、弟の秀長が築城にとりかかり、慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いの後に浅野幸長が城主となります。元和5（1619）年に徳川家康の第十男である頼宣が、55万5千石の藩主として入国して以来、約250年にわたり御三家紀州徳川家の居城として、威容を誇っていました。

昭和6（1931）年、和歌山城の城跡全体が史跡に指定されます。昭和10年には天守閣が国宝に指定されましたが、昭和20年7月9日の和歌山大空襲により焼失してしまいました。しかし、昭和33年に多くの方々の熱意により天守閣が再建され、現在では和歌山市のシンボルとなっています。また、焼け残った岡口門は重要文化財に、西之丸庭園（紅葉溪庭園）は名勝に指定され、史跡和歌山城は和歌山市の歴史・文化・観光の拠点として重要な役割を果たしています。このような和歌山城の歴史的・文化的価値に鑑み、平成5（1993）年3月に『史跡和歌山城保存管理計画書』、平成7年3月には『史跡和歌山城整備計画報告書』を作成し、計画的に保存・整備を進めてまいりました。

吹上口は和歌山城内郭の北西部にあたり、紀ノ川河口の紀伊湊に近接した地点に位置しています。それゆえ、紀伊湊に対する監視と物資の搬入口というのが、この場所の主な特徴といえましょう。吹上御門の東側には、堀から上がる階段（雁木）があり、船で運んでくる物資の陸揚げ場になっていました。また、吹上御門を入ると、典型的な枳形虎口を形成していました。

平成17（2005）年、吹上口にあった中消防署が移転し、翌年には撤去されました。この吹上口の保存整備のため、平成19年度と20年度に史跡和歌山城第30次・31次発掘調査として、同所の発掘を実施しましたが、本書はその報告書です。今後、この報告書を基礎に吹上口の保存・整備を図るとともに、史跡和歌山城の理解と研究に本書をご活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、事業全般にわたりご指導いただいた史跡和歌山城保存整備委員会の皆様をはじめ、文化庁・和歌山県教育委員会並びに関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

和歌山市長 大 橋 建 一

例 言

1. 本書は、和歌山市一番丁3番地に所在する史跡和歌山城城内において和歌山市が計画した、吹上口の整備に伴う発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、和歌山市まちづくり局まちおこし部和歌山城管理事務所の委託事業として財団法人和歌山市都市整備公社に事業委託し、和歌山市教育委員会文化振興課の指導のもと、以下のとおりに実施した。

年 度	調査名	調査面積	調査期間
平成19年度	第30次調査	232.86㎡	平成19年12月10日～平成20年3月11日
平成20年度	第31次調査 (第1区)	69.5㎡ (調査全体で526㎡)	平成20年11月27日～平成21年3月27日 (二の丸の第2区を含む調査全体の期間)

3. 発掘調査及び報告書刊行に携わった関係者は下記のとおりである。

和歌山市まちづくり局まちおこし部 和歌山城管理事務所

所長	小畑 光夫 (H19～20)	大橋 廉 (H21～22)	有本 光博 (H23)
副所長	伊東 秀樹 (H19～20)	有本 光博 (H21～22)	且来 明 (H23)
史跡整備班長	飯澤 友晴 (H19～20)	中野 忠宣 (H21～22)	鳥居 政秀 (H23)
庶務担当	木下詩奈子 (H19～21)	藪田 勝也 (H22～23)	
文化財専門員	高橋 克伸 (H19～20)	武内 善信 (H23)	
学芸員	久保 香子 (H19～23)	榎本 邦雄 (H21)	

和歌山市教育委員会 文化振興課

文化振興課長	白井 健志 (H19)	秋月 敏尚 (H20～21)	富松真矢子 (H22～23)
文化振興副課長	新家 利定 (H19)	花田 文孝 (H19)	富松真矢子 (H20～21)
	坂本 浩城 (H22)	額田 雅裕 (H23)	
文化財専門主幹	大野左千夫 (H20)		
文化財班長	山田 暢之 (H19～20)	額田 雅裕 (H21～22)	前田 敬彦 (H23)
学芸員	前田 敬彦 (H19～20)	益田 雅司 (H19～22)	大木 要 (H21～23)
	清水 梨代 (H23)		

財団法人和歌山市都市整備公社 埋蔵文化財班

埋蔵文化財班長	北野 隆亮 (第30次調査第2区・第31次調査担当)
学芸員	井馬 好英 (第30次調査第1・3・4区担当)
学芸員	奥村 薫 (庶務・遺物整理担当)

4. 本書における第1章と「おわりに」の部分は和歌山城管理事務所の武内善信が、「はじめに」は久保香子が、第2章の発掘調査部分の執筆は、和歌山市都市整備公社埋蔵文化財班の各調査担当者が執筆したほか、遺物の一部を奥村が分担し、編集は北野と武内が行なった。
5. 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
6. 吹上口の門の名称については「和歌山御城内御惣絵図」にもとづき「吹上御門」「吹上大御門」「御勘定御門」の正式な名称で統一した。また、吹上口西側の堀は元々は外堀の一部であり、現在「西堀」と称することもあるが、内堀の「西堀」と紛らわしいので、「西外堀」という名称で統一した。
7. 報告書の作成にあたり関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことを、記して感謝の意を表したい。

本文目次

はじめに　　史跡和歌山城の整備と保存整備委員会の実施	1
第1章　和歌山城吹上口の歴史と特徴	3
1．和歌山城の歴史	3
2．吹上口の歴史と特徴	4
3．御勘定御門東側石垣上の櫓について	4
4．吹上口の橋の名称と特徴	5
5．吹上御門と吹上大御門（吹上冠木門）	6
6．吹上口の近代の改変	7
第2章　発掘調査事業の概要	9
1．発掘調査の契機と経過	9
(1) 調査の目的と経過	9
(2) 吹上口周辺の既往の調査	11
2．位置と環境	11
3．調査の方法と概要	13
(1) 調査の方法	13
(2) 調査の概要	15
4．遺構	17
(1) 第30次調査	17
(2) 第31次調査	27
5．遺物	35
(1) 遺物の概要	35
(2) 土器	36
(3) 陶磁器	36
(4) 瓦	39
(5) 金属製品	46
6．まとめ	46
(1) 西外堀石垣及び吹上橋に関する調査成果	46
(2) 御勘定御門東御櫓及び石垣基底部の調査成果	47
(3) 御勘定御門に関する遺構について	47
おわりに　　史跡和歌山城吹上口の保存整備についての今後の課題	49
報告書抄録	52

挿 図 目 次

第 1 図	調査位置図
第 2 図	史跡和歌山城と周辺の遺跡分布図
第 3 図	調査地区割図
第 4 図	第30次調査第 1 ・ 4 区遺構配置図
第 5 図	第 1 区遺構実測図
第 6 図	第 4 区遺構実測図 1
第 7 図	第 4 区遺構実測図 2
第 8 図	第30次調査第 2 ・ 3 区遺構配置図
第 9 図	2 - 1 ・ 2 - 2 区遺構実測図
第10図	2 - 3 区遺構実測図
第11図	3 - 1 区遺構実測図
第12図	3 - 2 区遺構実測図
第13図	3 - 3 区遺構実測図
第14図	第30次調査第 2 ・ 3 区櫓台断面位置図
第15図	第 2 ・ 3 区櫓台石垣断面図 1
第16図	第 2 ・ 3 区櫓台石垣断面図 2
第17図	第 2 ・ 3 区櫓台石垣断面図 3
第18図	1 - 1 区遺構実測図
第19図	1 - 2 区遺構実測図
第20図	1 - 3 区遺構実測図
第21図	遺物実測図 1 土師器、瓦器
第22図	遺物実測図 2 輸入陶磁器、国産陶器
第23図	遺物実測図 3 肥前系陶磁器
第24図	遺物実測図 4 軒丸瓦
第25図	遺物実測図 5 軒丸瓦・軒平瓦・滴水瓦
第26図	遺物実測図 6 軒棧瓦
第27図	遺物実測図 7 丸瓦・平瓦
第28図	遺物実測図 8 道具瓦 1
第29図	遺物実測図 9 道具瓦 2
第30図	遺物実測図10 金属製品
第31図	御勘定御門関係の検出遺構
第 1 表	発掘調査一覧表
第 2 表	調査面積一覧表

図 版 目 次

第30次調査写真図版

- 図版 1 第 1 区 調査前の状況（南東から）、第 4 区 調査前の状況（東から）
図版 2 第 2 区 調査前の状況（南から）、第 3 区 調査前の状況（北から）
図版 3 第 1 区全景（北から）、第 1 区 SV-5（北から）
図版 4 第 1 区 SV-5 裏込状況（北西から）、第 1 区 東壁堀内部土層堆積状況（西から）
図版 5 第 4 区 全景（東から）、第 4 区 全景（西から）
図版 6 第 4 区 SV-6・7（南東から）、第 4 区 SV-8 西半部（南から）
図版 7 第 4 区 SV-8・9（南西から）、第 4 区 SA-4（南から）
図版 8 第 4 区 東壁堀内部土層堆積状況（西から）、第 4 区 北壁中央部サブトレンチ土層堆積状況（南から）
図版 9 2-1 区 第 1 面全景（南から）、2-1 区 SH-1 東辺（南から）
図版10 2-1 区 第 2 層遺物出土状況（北から）、2-1 区 第 2 面全景（南から）
図版11 2-1 区 サブトレンチ掘削状況（南から）、2-1 区 南北方向セクションベルト土層堆積状況（西から）
図版12 2-2 区 第 1 面全景（南から）、2-2 区 SH-1（北から）
図版13 2-2 区 SH-1・SA-3 接続状況（北東から）、2-2 区 SA-3（東から）
図版14 2-2 区 SA-3（北から）、2-2 区 SA-3 崩落土・瓦出土状況（東から）
図版15 2-2 区 第 2 面全景（南から）、2-2 区 第 2 面SV-1 裏込検出状況（北から）
図版16 2-3 区 第 1 面全景（北から）、2-3 区 SA-3（北東から）
図版17 2-3 区 第 2 面全景（北から）、2-3 区 第 2 面サブトレンチ掘削状況（東から）
図版18 3-1 区 全景（西から）、3-1 区 SV-1 基底部の状況（西から）
図版19 3-2 区 全景（右が北）、3-2 区 全景（西から）
図版20 3-2 区 石組溜枳（北東から）、3-2 区 南壁土層堆積状況（北から）
図版21 3-3 区 全景（西から）、3-3 区 全景（北から）
図版22 3-3 区 SV-1 石垣基底部の状況（西から）、3-3 区 南壁土層堆積状況（北から）

第31次調査写真図版

- 図版23 1-1 区 調査前の状況（北から）、1-1 区 全景（北から）
図版24 1-1 区 堀石垣（北から）、1-1 区 サブトレンチ（北から）
図版25 1-2 区 調査前の状況（南から）、1-2 区 全景（南から）
図版26 1-2 区 堀石垣（北東から）、1-2 区 堀石垣裏込状況（東から）
図版27 1-3 区 調査前の状況（南から）、1-3 区 全景（南から）
図版28 1-3 区 砂岩仕切石（北から）、1-3 区 サブトレンチ（東から）

出土遺物写真図版

図版29 土師器、瓦器、中国製磁器、瀬戸・美濃系陶器、

図版30 備前焼、丹波焼、堺焼、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、肥前系磁器

図版31 大谷焼、肥前系磁器

図版32 軒丸瓦

図版33 軒丸瓦

図版34 軒平瓦、滴水瓦

図版35 滴水瓦、軒棧瓦、丸瓦

図版36 平瓦、鯨瓦

図版37 鯨瓦、鬼瓦、鳥伏間瓦、棟込瓦、塙瓦

図版38 留蓋瓦、金属製品

はじめに 史跡和歌山城の整備と保存整備委員会の実施

1. 史跡和歌山城保存整備委員会委員

吹上口の発掘および今後の整備にあたって、史跡和歌山城保存整備委員会において、指導助言をいただいている。史跡和歌山城保存整備委員は以下の方々である。

委員長	田村 雅弘（和歌山市文化財保護委員会委員）（平成19年度）
	三尾 功（和歌山市立博物館名誉館長）（平成20～22年度）
	田中 哲雄（姫路市日本城郭センター名誉館長）（平成23年度）
副委員長	平井 聖（昭和女子大学特任教授）（平成19年度）
	田中 哲雄（平成20～22年度）
委員	北垣聡一郎（石川県金沢城調査研究所所長）（平成19～23年度）
	仲野 浩（東北芸術工科大学名誉教授）（平成19～23年度）
	八木 清勝（和歌山市文化財保護委員会委員）（平成19～23年度）
	田中 哲雄（平成19年度）
	平井 聖（平成20～23年度）
	三尾 功（平成19・23年度）

なお、和歌山市からは各回、和歌山市教育長・和歌山市まちづくり局長・和歌山市まちおこし部長（和歌山市産業部長・まちづくり推進室長）が出席している。また、文化庁文化財部記念物課、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課より、指導助言をいただいている。

2. 史跡和歌山城保存整備委員会

平成17年3月の中消防署の移転にともない、吹上口に関して議題に取り上げられた平成17年度以降の史跡和歌山城保存整備委員会の議題概要を、以下に列記する。

第18回史跡和歌山城保存整備委員会 平成17年9月5日

「今後の整備事業計画（消防署撤去に伴う発掘調査計画）について」等

第19回史跡和歌山城保存整備委員会 平成18年2月16日 「今後の整備方針について」等

第20回史跡和歌山城保存整備委員会 平成18年10月12日 「事業計画（吹上御門跡周辺整備）について」等

第21回史跡和歌山城保存整備委員会 平成19年1月12日

「今後の整備事業計画（吹上御門周辺）について」等

現地指導助言 平成19年12月3日「吹上口一帯の石垣及び保存整備」等（仲野委員）

現地指導助言 平成20年1月29日「吹上御門跡、櫓台跡石垣など発掘調査現場の視察指導」等（北垣委員）

第22回史跡和歌山城保存整備委員会 平成20年2月5日

「吹上口発掘調査について」「今後の整備計画について」等

段階整備プログラムについての指導助言 平成20年2月26日

「吹上御門跡、櫓台跡石垣等の今後の整備方針について」（三尾委員・仲野委員）

現地指導助言 平成20年4月23日「御勘定御門東側石垣」等（北垣委員）

文化庁視察 平成20年6月4日「御勘定御門東側石垣等視察」（文化庁本中調査官）

第23回史跡和歌山城保存整備委員会 平成20年7月7日

「史跡和歌山城第31次発掘調査・御勘定御門東側隅櫓台石垣修理について」等
史跡和歌山城保存整備委員会（石垣部会） 平成20年9月12日～13日

「御勘定御門東側隅櫓台石垣について」（三尾委員・田中委員・仲野委員）
第24回史跡和歌山城保存整備委員会 平成21年2月4日

「史跡和歌山城第31次発掘調査現場視察・御勘定御門東側隅櫓台石垣修理・吹上口一帯の整備について」等
史跡和歌山城保存整備委員会（石垣部会） 平成21年2月27日

「御勘定御門東側隅櫓台石垣修理について」（三尾委員・仲野委員）
史跡和歌山城保存整備委員会（部会）（三尾委員・仲野委員） 平成21年5月13日

「史跡和歌山城整備計画の見直しについて」「御勘定御門東側石垣保護計画設計について」「吹上口
一帯整備基本計画について」等
史跡和歌山城保存整備委員会（石垣部会） 平成21年7月15日

「御勘定御門東側石垣について」（北垣委員・田中委員・仲野委員）
第25回史跡和歌山城保存整備委員会 平成21年11月2日

「史跡和歌山城整備計画見直し・御勘定御門東側石垣保護設計・吹上口一帯整備基本計画について」等
第26回史跡和歌山城保存整備委員会 平成22年2月10日

「史跡和歌山城整備計画の見直しについて」「御勘定御門東側石垣保護計画設計について」等
第27回史跡和歌山城保存整備委員会 平成22年10月29日

「御勘定御門東側石垣保護工事について」「石垣基礎調査について」等
第28回史跡和歌山城保存整備委員会 平成23年8月26日

「御勘定御門東側石垣保護工事について」「吹上口の整備について」「石垣基礎調査について」等
現地指導助言 平成24年2月3日「御勘定御門東側石垣保護工事について」（田中委員）
現地指導助言 平成24年2月6日「御勘定御門東側石垣保護工事について」（北垣委員）

3、現地説明会

発掘後に和歌山管理事務所・和歌山市教育委員会文化振興課・（財）和歌山市都市整備公社が合同で、平成20年2月16日に「史跡和歌山城第30次発掘調査現地説明会」をおこない、多くの市民が見学に訪れた。



史跡和歌山城第30次発掘調査現地説明会

第1章 和歌山城吹上口の歴史と特徴

1、和歌山城の歴史

天正13(1585)年3月、羽柴(豊臣)秀吉はおよそ10万の兵を率いて雑賀衆、根来衆等を攻め、太田城を水攻めにし、4月下旬に紀州を平定する。秀吉は弟の秀長に紀伊・和泉等を所領として与え、雑賀庄岡にある独立峰の虎伏山(岡山)に築城を命じた。「小一郎殿ニ一万数ヲ被相副、岡山之普請被仰付候」(4月26日付「明算宛次右衛門尉宗俊書状」、三浦圭一1982年所収)とある。太田城水攻めの堤防造りに動員された農民も、多数徴用されたと思うが、この「一万」は兵のことであろう。

和歌山城が築城される以前、「土橋ノ構」がこの場所にあったといわれている。土橋氏は地縁的一揆集団であった雑賀衆の有力者である。ただし、土橋氏の本拠は紀ノ川北岸の粟であり、雑賀門徒衆の当時の筆頭であった岡氏の本拠(現珊瑚寺周辺といわれている)に近い虎伏山に、浄土宗徒である土橋氏が砦をかまえたというのが事実であれば、それは天正10年6月以降であろう。ライバルであった鈴木孫一が織田信長に接近し、同年1月信長の力を背景に長曾我部寄りの土橋氏を排除した。しかし、6月の本能寺の変により孫一は出奔し、土橋氏が復権して、雑賀の覇権を獲得したのである。だが、秀吉の紀州攻めで、土橋氏は四国に逃げのびた。

羽柴(豊臣)秀吉は家臣の藤堂高虎、羽田正親、横浜良慶を普請奉行に任じた。特に藤堂高虎は城造りの名人として有名であるが、本格的な近世城郭の築城に取り組んだのは、和歌山城が最初である。しかし、天正13年5月8日付秀長宛秀吉朱印状に、「四国へ出馬之事、来月三日弥相極候」とし、「半分人数召連可罷立候」とある(『和歌山市史』第4巻1211頁)。この半分とは、付けられた1万の兵の半分と考えてよい。さらに、6月上旬に四国攻めが開始されると、秀吉が病気のため秀長が総大将として出陣した。それゆえ、多人数を築城に動員できたのは、1か月余りしかなかったことになる。それ故、築城できたのは現在の天守郭と本丸跡の山頂部分ぐらいのものであろう。

四国攻めの後、大和も拝領した秀長は大和郡山を居城とした。但馬竹田城主であった桑山重晴が、秀吉より秀長の家老となるよう命じられ、和歌山城の城代となる。ただし、和歌山周辺だけでも紀伊湊には吉川平助(天正16年処刑)、粉河には藤堂高虎が配されており、桑山は単なる城代以上の存在ではなかった。また、桑山重晴はその際1万石から3万石に加増されたとよく書かれているが、2万石への加増だと考えるべきであろう(播磨良紀1987年)。

天正19(1591)年豊臣秀長が病死し、後を継いだ豊臣秀保も文禄4(1595)年(一説には文禄3年)に亡くなると、紀州の主要部分は秀吉の直轄領となる。その際、桑山重晴は泉州日根郡谷川1万石を加増され、和歌山城の城主となった。これ以後、再び大名となった桑山氏が和歌山城の修築を強化したものと判断してよい。もっとも、その範囲は虎伏山の山嶺部分と岡口方面ぐらいのものであったと思われる。なお、その後桑山重晴は隠居して孫の一晴に家督が譲られたが、それぞれ1万6千石ずつ領している。

慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いの後に和歌山城主となった浅野幸長は城下町を整備し、城の大規模な改修を行なった。それまで東の岡口門が大手であったが、徳川期に「一の橋御門」と呼ばれた北東の門を大手とし、外堀を修築して和歌山城の外郭(徳川期の三の丸)を整備し、本町通りを通して城下町を整備したのである。和歌山城内郭も砂の丸、南の丸、二の丸西側四分の一ほどを除き、

浅野時代に基本的に整備されたと考えてよい。

元和5(1619)年徳川家康の十男である頼宣が入国し、和歌山城をさらに増築・拡張し、和歌山城は將軍家の一門である御三家にふさわしい居城となった。それまで現在の東堀ほどの広さであった西内堀を埋め立て二の丸を拡張し、砂の丸と南の丸部分を内郭に取り入れ、ほぼ現状の姿になったのである。

2. 吹上口の歴史と特徴

吹上口は和歌山城内郭の北西部にあたり、紀ノ川河口の紀伊湊に近接した地点に位置している。それゆえ、紀伊湊に対する監視と物資の搬入口というのが、この場所の主な特徴といえよう。吹上御門の東側には、堀から上がる階段（雁木）があり、船で運んでくる物資の陸揚げ場の役割を果たしている。また、吹上御門を入ると、典型的な枳形虎口を形成していた。しかし明治以降、改変が加えられ、城内でもっとも原形を留めていない部分である。

桑山期に和歌山城の普請が、吹上口にまで及んだ形跡は確認できない。吹上口が整備されたのは、浅野期のことと思われる。ただし、それは御勘定御門の東側石垣までで、それより西は徳川頼宣が入国した後、砂の丸部分が拡張されたのにもない整備されたのではなかろうか。

御勘定御門の東側石垣は緑色片岩（紀州青石）を中心とした結晶片岩と砂岩（和泉砂岩）の二種類の石材で構成され、野面積みに積まれている。「特に、砂岩は海蝕の痕跡を残すものが多くみられることから海岸にあった自然石の巨礫を運んだものと考えられる。石材の規模については、幅1.0m前後を測る大きなものが主体であるが、間詰石には拳大程度の小規模なものも用いられている。隅角部は結晶片岩が多く用いられ、算木積みが見られる。石垣の構築角度は約70°を測り、天守一の門櫓台石垣などの結晶片岩を用いたものと同様の勾配であるといえる。なお、浅野期石垣の特徴といわれる刻印のある石材及び矢穴のある割石は全くみられないことから、この石垣は結晶片岩石垣から砂岩石垣への移行期のものと考えられ、友ヶ島石切場開発以前の浅野期初期のものと推定できる」（本書22頁）と指摘されている。これに対し、御勘定御門の西側石垣については、「砂岩の切石を用いた打ち込みハギの布積み石垣で84°の勾配」（同27頁）をもっているとのことだ。つまり、御勘定御門の道を境に、東側の石垣が浅野期初期の築造であるのに対し、西側は徳川期の増築と考えられるのである。

3. 御勘定御門東側石垣上の櫓について

「和歌山城御城内惣御絵図」（口絵1）等により御勘定御門の東側石垣上に「御勘定御門上角御櫓」が存在したことが確認できる。

御勘定御門の東側石垣上の櫓台部分、即ち第30次発掘調査の第2区から浅野家家紋「違鷹羽紋」の瓦当文様の滴水瓦が10点以上出土している。これは、これまで和歌山城内で発見されている「違鷹羽紋」滴水瓦の数を上回る点数であり、注目しなければならない。ということは、浅野期にもこの部分に櫓と思われる建造物が存在したと考えてよからう。

元和5(1619)年8月に浅野家から紀州徳川家へ提出した「和歌山城請取目録」が「自得公済美録」に収録されており、その「御本丸御殿主 所々矢蔵并長屋帖」に「いぬいの角矢蔵」の記述があり、

「四間ニ五間付二階有」（『和歌山市史』第5巻21頁上段）と書かれているが、これが御勘定御門の東側石垣上にあった浅野期の櫓であるとの意見がある。しかし、これは徳川期の二の丸北側櫓台にあった物見櫓に対応した浅野期の櫓と考える。なぜなら、「御本丸御殿主 所々矢蔵并長屋帖」のこの部分は、徳川期の二の丸部分について記述した箇所には書かれている。それに、この「いぬいの角矢蔵」には「式間半ニ六間」の「同所南の長屋」、「式間半ニ式拾七間」の「同所西の端の長屋」、「式間ニ六間」の「西端南のはしの長屋」が続いており、御勘定御門の東側石垣上の櫓の延長上にこうした長屋が続くことは構造上無理があるからだ。

残念ながら「自得公済美録」に御勘定御門の東側石垣上の櫓を含め、この部分の櫓や長屋についての記述がない。しかし、出土遺物から判断してこの部分に櫓が建てられていたことは間違いなからう。

4. 吹上口の橋の名称と特徴

徳川期、和歌山城内郭と外部とを結ぶために堀に架橋されているのは、一の橋とこの吹上口の橋だけである。今回の発掘でこの橋の北側の取り付け部分が出てきた。この橋について、史料上では以下の三つの名称が使用されている。

(1) 「吹上橋」

①「和歌山城絵図」（口絵2）、寛政8（1796）年6月～天保11（1840）年10月

*「大手御門」「一ノ橋」「吹上冠木御門」の記載があり、寛政8年6月から「市之橋御門」と称していたのが「大手御門」と改称され、橋は「一ノ字」に変えたとのことであり、また、天保11年10月に「吹上冠木御門」が「吹上大御門」に改称。

②『類集略記』（和歌山市立博物館蔵）五 「御城内外御普請」文政8（1825）年2月16日条

③「明治7年11月22日付大坂鎮台宛和歌山県令神山郡廉依頼書」（高橋克伸2010年）

(2) 「吹上御門橋」・「吹上御門御橋」

①『類集略記』二 「御城内外御普請」文化6（1809）年12月3日条

②『類集略記』五 「御城内外御普請」文政7（1824）年7月28日条、同年9月10日条

③『類集略記』十 「御城内外御普請」弘化3（1846）年8月8日条

(3) 「西丸橋」

①「紀州和歌山和歌浦之図」（国立公文書館蔵）、宝暦6（1756）年

②「和歌山城下町絵図」（和歌山市立博物館蔵）、安政2（1855）年

③「和歌山屋敷絵図」（和歌山市立博物館蔵）、文久3（1863）年

「西丸橋」の名称が書かれているのは城下町図だけである。しかも、この橋は外部と砂の丸を結んでおり、西の丸に入るにはさらにいくつか門を通らなければならない。それゆえ、この名称は適当ではなからう。確かに、橋の下、西外堀は明治期に「西の丸川」と呼ばれているが、はたして江戸期もそのように呼ばれていたのか疑問である。

「吹上御門橋」という記述は適切だと思うが、残念ながら『類集略記』にしか登場しない。これに対し、「吹上橋」という名称は絵図、『類集略記』、明治期の史料と幅広く採用されており、これが最も妥当だと考える。

『類集略記』十「御城内外御普請」弘化3年8月8日条に、「吹上御門御橋大破ニ付、牛馬通難相成候付、今日より牛馬留札立候」とある。つまり、吹上橋は人間だけでなく、牛馬が通行する荷物搬入用の橋でもあったのだ。橋の北詰に藩の蔵が、砂の丸側には勘定奉行所があり、二の丸や西の丸等への物資も主にはこの橋を通して運ばれたのであろう。

浅野家の史料である『諸事覚書』の「紀伊国和歌山ノ城廻間数之覚」（『和歌山市史』第5巻35～36頁）に、「小出内膳東ノ御門」が登場する。これは、小出内膳屋敷の東側の御門という意味ではなかろうか。この場所は、吹上口に位置する門であることが比定されている（三尾功1994年、94～5頁、付図1）。

ここで注目すべきは、『諸事覚書』の「紀伊国和歌山ノ城廻間数之覚」において、「大手ノ橋」、「今中将監前東ノ橋」など橋のある所にはその記載があるのに、吹上口には橋の記載がない点である。ということは、浅野期には吹上橋が存在しなかった可能性が高いということになる。そうであるなら、西外堀もせいぜい雁木部分までで、それより西の現在残っている西外堀はまだ掘られていなかったのではなかろうか。つまり、徳川頼宣入国後、砂の丸・南の丸の拡張にともない、吹上口において堀を延長し、吹上橋を架橋したと推察できるのである。それゆえ同時に、御勘定御門よりも西の砂の丸側の石垣を築造し、吹上御門を設置したものと思われる。

5. 吹上御門と吹上大御門（吹上冠木門）

吹上御門が徳川期に設置したのなら、浅野家の史料である『諸事覚書』の「紀伊国和歌山ノ城廻間数之覚」にある「小出内膳東ノ御門」とはどの門なのだろうか。これは徳川期の門でいうなら吹上御門ではなく、吹上大御門のことと推定する。吹上大御門は、天保11(1840)年以前は「吹上冠木御門」と呼ばれていた。「類聚略記 八」（和歌山市立博物館蔵）の「諸御門」の天保11年7月25日条に「吹上冠木御門を、吹上大御門与向後相唱候筈候事、極り二も留ル」とある。

この「吹上冠木御門」には不思議な点がある。「道中記」（和歌山県立図書館蔵、南葵文庫旧蔵）のうち「自欠作町迄御城之図」は、記載された重臣の名前から文化5、6(1808、9)年と推定されているが、付属の「遠望御城之図」（口絵3）で描かれている「吹上冠木御門」は、形式が冠木門ではなく楼門なのだ。これは、団扇絵の岩瀬広隆画錦絵「邦安社御祭礼車楽之図」（口絵4）でも楼門に描いている。広隆が来和したのが天保4年、車楽が城内へ入るのが差し止めになったのは天保12年なので、この間の作品と考えてよい。ちなみに、嘉永4(1851)年刊の『紀伊国名所図会』（後篇卷之一）の「吹上御門辺の図」（本書50頁参考図2）でも、広隆は吹上大御門と名称が変わったこの門を楼門に画いている。

それでは、吹上冠木御門は形式が冠木門ではなく楼門なのに、なぜ冠木門と呼ばれているのであろうか。ここで注目すべき史料に慶長19(1614)年11月付の『長晟公大阪御陣侍帳并和歌山御在城』（広島市立中央図書館蔵）がある。これは大坂冬の陣の際に和歌山城を守備した箇所と配置者が書かれている史料である。その一つに「かぶきもん」が登場するのだ。

以上から推察して、浅野期に名称として「かぶきもん」と呼ばれている門があり、それがこの「吹上冠木御門」の位置にあった門ではなかろうか。つまり、元々は冠木門形式の門がこの場所にあり、それが楼門形式で建て替えられてもそのまま「冠木門」と呼ばれていたと考えるのである。な

お、浅野期の門の名称がそのまま使用されている和歌山城内の門としては、他に裏坂の御台所奥御門の奥の水の手にあった「黒門」がある。

吹上大御門は機能的にも不思議な門である。この門は吹上口と外郭の三の丸とを結んでいるだけで、この門から西の丸には入れない。西の丸に入るには、西丸御門か西丸裏御門を再度くぐらなければならず、いわば無くてもよいようなものなのだ。これは、吹上口では浅野期は吹上大御門だけであったのが、徳川期になって吹上御門ができたので、このような不思議な役割しか果たさなくなってしまうのではなかろうか。なお、吹上大御門が楼門であるのに対し、吹上御門は大手御門（一の橋御門）や追廻門と同じ高麗門形式の門であった。

6. 吹上口の近代の改変

近世の和歌山城や城下町和歌山に関する文献で現在最良のものが、三尾功1994年の『近世都市和歌山の研究』であることは衆目の一致するところであろう。このため、検討を加えずに、そのまま引用して済ます例が多々見られる。それでは研究の進展は望めない。

この吹上口の近代の改変について同書は、「明治五（一八七二）年、和歌山県庁が砂の丸から西汀丁へ移転するに及んで、県庁正門(当時は北向き)前に汀橋が架けられた。翌六年、三の丸周辺の門・土堤を破却し、七番丁から県庁裏通りへの道路建設のため、一部西の丸川を埋め立て道路敷とした。この際、吹上口橋が撤去されたと思われる」（294頁）と記述している。

しかし、「大区小区制期の和歌山絵図」（口絵5）には吹上橋が描かれ、堀は埋められておらず、汀橋の表記はない。この絵図には「副区長」の表記がある。明治6年3月に戸長から副区長に、それが同7年11月に小区長に名称が変更されており、この期間内の作成と推定できよう。次に、「市中堀川筋架橋図」（口絵6）では吹上橋は画かれておらず、現商工会議所前の道路敷部分（けやき通り）は埋め立てられており、汀橋は後から貼紙で明示されている。

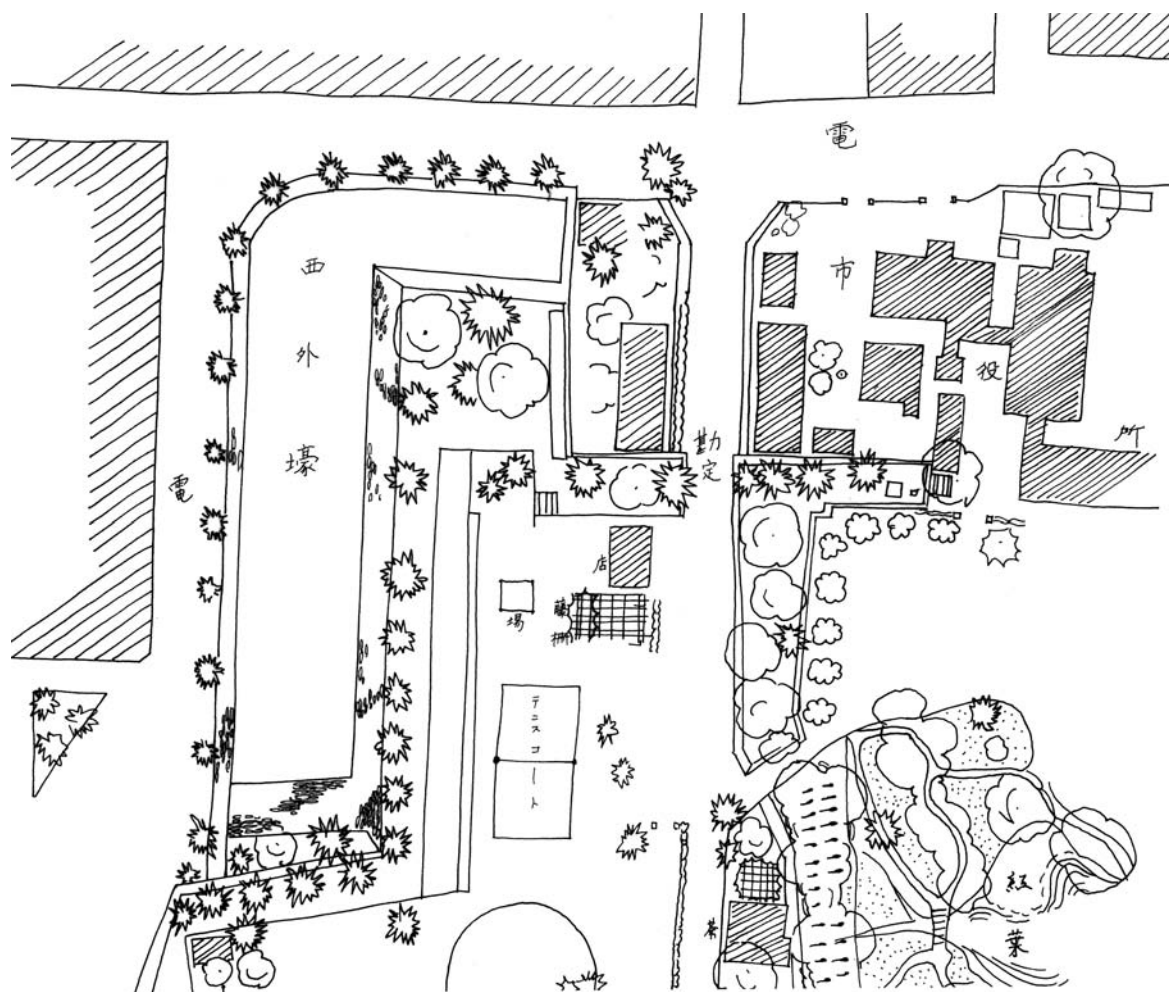
「明治七年十一月廿二日付大坂鎮台宛和歌山県令神山郡廉依頼書」（高橋克伸2010年所収）では、吹上橋の老朽化による道路敷の埋め立てを内務省から同月14日に許可を受けたので、橋の撤去を大坂鎮台に依頼している。それゆえ、吹上橋が撤去され、道路敷き部分の埋めたてが完成するのは、早くとも明治8年に入ってからと考えてよい。また、和歌山県庁が西汀丁へ移転したのは明治5年1月であるが、北向きの洋風県庁舎が落成するのは明治9年末であった。ということは、汀橋は明治9年末の県庁舎完成前に架橋されたのではなかろうか。

それでは、吹上御門や吹上大御門はいつ撤去されたのであろうか。国立公文書館アジア歴史資料センター画像閲覧史料に「大督より和歌山城内土堀取毀の件」（レファレンスコードC07050033900）がある。これは明治21年4月24日付陸軍大臣宛大阪鎮台監督部長代理による「和歌山城内門及土堀取毀之義ニ付伺」で、老朽化により「吹上門」と「吹上西門」及び土堀を取り壊す許可を求めたのに対し、承認を与えた一連の文書である。この「吹上門」と「吹上西門」とは、吹上大御門と吹上御門のことと考えてよい。つまり、吹上御門や吹上大御門は、周辺の土堀とともに明治21年に撤去されたのである。

前述したように、旧西外堀で先ず明治8年に埋められたのは、現けやき通りの道路部分だけであった。それでは、吹上口前の外堀はいつ埋めたてられたのであろうか。また、吹上御門の両側に

あった比較的背の低い石垣はいつ撤去されたのであろうか。

大正14(1925)年発行の「和歌山和歌浦遊覧案内地図」(口絵7)以前の和歌山市街図には、道路部分以外の堀は埋められておらず、まだ石垣の表示がある。しかし、「昭和四年三月現在」の「和歌山公園平面図」(参考図1)は、現西外堀の東端から旧吹上大御門前部分までの堀が埋められ、吹上御門跡両側の石垣の表示がなく、御勘定御門から北に真っ直ぐ道路が付けられている。これは昭和4(1929)年発行の「和歌山都市計画街路網図」(口絵8)や昭和6年発行の「大和歌山市街地図」(和歌山市立博物館蔵)でも、同様である。大正14年から昭和4年頃までに、現けやき通り南側の吹上口前の堀が埋められ、石垣も撤去されたと考えてよからう。



参考図1 「和歌山公園平面図」部分

1. 発掘調査の契機と経過

国の史跡である和歌山城は、紀ノ川下流域南岸の平野部に位置する独立丘陵、岡上に築かれた平山城である。和歌山城に関する調査はこれまで29回を数え、数多くの遺構・遺物を検出している（第1図・第1表）。なかでも、平成13・14年度の地方拠点史跡等総合整備事業並びに平成15～17年度の史跡等総合整備活用推進事業、平成18年度の史跡等・登録記念物保存整備事業として実施した「史跡和歌山城御橋廊下復元及び二之丸西部・西之丸第一期整備」（第25～29次調査）では御橋廊下の復元に繋がる重要な調査成果を得た（和歌山城管事2007）。

[illegible]

– 9 –

第 1 表 発掘調査一覧表

次数	期 間	面積 (㎡)	概 要	原 因	調査主体	文献
1	1981年10月～11月	72	大手門に関する 2 時期の遺構面を確認。大手門の礎石を検出。	一の橋大手門再建工事	和歌山市教育委員会	3
2	1982年 1 月～ 3 月	350	西の丸西側で 2 時期の遺構面を確認。建物の基礎石組、石組溝、土坑等を検出。	旧市庁舎跡地整備工事。現地説明会開催。	和歌山市教育委員会	3
3	1982年11月	40	一の橋が過去に 2 度の架換が行われていることを確認。	一の橋架換工事	和歌山市教育委員会	3
4	1984年 2 月～ 3 月	60	追廻門礎石の確認調査。石組暗渠排水溝等を検出。	追廻門解体修理	和歌山市教育委員会	3
5	1985年 8 月～10月	72	西の丸側廊下橋取付部分で石垣裏込を確認。内部に焼成痕のある円形土坑を検出。	西の丸側廊下橋取付部分確認調査	和歌山市教育委員会	3
6	1986年12月～1987年 3 月	55	砂の丸から西に突出する石垣底部を検出。	城北西部の地下ケーブル埋設工事	和歌山市教育委員会	3
7	1987年 1 月～ 3 月	480	西の丸東部で雨落溝・半地下通路・石組等を検出。	西の丸東部・二の丸側廊下橋取付部分確認調査	和歌山市教育委員会	3
8	1988年 1 月～ 4 月	60	城北西部の埋められた堀にかかわる石垣を検出。	城北西部のキャブシステム埋設工事	和歌山市教育委員会	3
9	1988年10月～11月	47	天守閣と本丸周辺のグリッド及びトレンチ調査で石垣裾部を 3 ヶ所検出。	天守閣と本丸周辺の電柱移設とケーブル埋設工事	和歌山市文化体育振興事業団	1
10	1990年 7 月～ 8 月	358	砂の丸南側の調査。江戸時代に遡る遺構は検出されなかった。	宗教法人和歌山護国神社社殿等の再建工事	和歌山市文化体育振興事業団	2
11	1990年12月～1991年 1 月	74	天守閣周辺でのトレンチ調査の結果、建物基壇、石組溝等を検出。	天守閣周辺の夜間照明設備改修工事	和歌山市文化体育振興事業団	2
12	1993年 5 月～10月	967	二の丸から表坂東側、中御門跡から砂の丸までトレンチ調査。石垣、石組溝、土坑等を検出。	城内における公衆トイレの水洗化に伴う工事	和歌山市文化体育振興事業団	3・4
13	1995年 1 月～ 3 月	100	表坂登り口付近の結晶片岩石垣基底部及び坂道の造成状況等を確認。	表坂入口付近の石垣改修工事	和歌山市文化体育振興事業団	5・7
14	1995年 7 月	30	勘定門に関する礎石、西外堀に関する石垣等を確認。	城北西部のキャブシステム埋設工事	和歌山市文化体育振興事業団	6
15	1996年 5 月～ 7 月	80	西の丸跡南側の調査。3 面の遺構面を確認し、石組暗渠溝等を検出。	西の丸跡内における便所棟建設工事	和歌山市文化体育振興事業団	9
16	1996年 9 月	40	西の丸北端部で石垣、石積み、石列等を検出。	防災無線ケーブル設置工事	和歌山市教育委員会	9
17	1996年11月～1997年 3 月	180	天守一の門櫓台結晶片岩石垣の構築状況、周辺坂道の造成状況などを確認。	天守一の門櫓台の石垣改修	和歌山市文化体育振興事業団	7・9
18	1998年 1 月～ 3 月	60	天守一の門櫓台結晶片岩石垣の裏込構造を確認した。	〃	和歌山市文化体育振興事業団	7・9
19	1998年 7 月～12月	1000	二の丸北縁部櫓台上で礎石、埦敷等を検出。二の丸櫓台石垣の構造等を確認。	二の丸跡整備事業	和歌山市文化体育振興事業団	8
20	1998年11月～1999年 1 月	110	裏坂登り口の結晶片岩石垣の構造等を確認。	裏坂下東石垣改修	和歌山市文化体育振興事業団	7
21	1999年 9 月～10月	20	西外堀に関する石垣を検出。	歩道拡張工事	和歌山市教育委員会	12
22	1999年12月～2000年 3 月	500	二の丸西側堀内において御橋廊下の橋脚遺構を検出。周辺の石垣構築状況を確認。	二の丸庭園西側堀の浚渫工事	和歌山市文化体育振興事業団	10
23	2001年 2 月～ 3 月	80	和歌山城南東部堀の石垣構築状況を確認。	東堀石垣改修工事	和歌山市文化体育振興事業団	11
24	2001年 7 月	10	御勘定御門に関わる礎石・石敷、石組溝を検出。	浄化ポンプ用配管設置工事	和歌山市教育委員会	14
25	2001年 9 月～2002年 1 月	390	二の丸西側櫓台において御橋廊下掘付部・多聞櫓などを 3 時期確認。櫓台内に石室を検出。	御橋廊下復元整備	和歌山市文化体育振興事業団	13・17
26	2002年 2 月～ 3 月	150	和歌山城南東部堀の石垣構築状況を確認。	東堀石垣改修工事	和歌山市文化体育振興事業団	13
27	2002年 9 月～11月	200	二の丸北西部において大奥の建物・漆喰塀・石組溝などを確認。	史跡整備	和歌山市文化体育振興事業団	15・17
28	2003年10月～12月	200	西の丸南東隅の御橋廊下掘付部周辺で砂岩礎石列などを確認。	〃	和歌山市文化体育振興事業団	15・17
29	2004年 8 月～2005年 1 月	740	二の丸西側部分において二の丸拡張以前の浅野期とみられる砂岩の埋没石垣などを検出。	〃	和歌山市文化体育振興事業団	16・17
30	2007年12月～2008年 3 月	233	西堀北側において吹上橋掘付部の張出し石垣を確認。御勘定御門東櫓台上面で隅櫓建物と土塀を検出。	〃	和歌山市都市整備公社	18
31	2008年11月～2009年 3 月	526	吹上口において西外堀石垣・御勘定御門関連遺構を確認。二の丸西部で大奥を区切る土塀・石組溝等を検出。	〃	和歌山市都市整備公社	19

【文 献】

- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』 1 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1992年
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』 2 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1994年
- 『史跡和歌山城 第12次発掘調査概要報告書』 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1994年
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』 3 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1996年
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』 4 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1997年
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』 5 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1998年
- 『史跡和歌山城 石垣保存修理報告書』和歌山市産業部・和歌山城管理事務所 1999年
- 『史跡和歌山城 第19次発掘調査概報』 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1999年
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』 6 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2000年
- 『史跡和歌山城 第22次発掘調査概報』 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2000年
- 『史跡和歌山城 第23次発掘調査概報』 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2001年
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』 7 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2002年
- 『史跡和歌山城 第25・26次発掘調査概報』 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2002年
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』 8 一平成12年度(2000年度)・13年度(2001年度)―財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2004年
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』 9 一平成14年度(2002年度)・15年度(2003年度)―財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2006年
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』 一平成16年度(2004年度)―財団法人和歌山市都市整備公社 2007年
- 『史跡和歌山城御橋廊下復元及び二之丸西部・西之丸第一期整備報告書』和歌山市まちづくり推進室和歌山城管理事務所 2007年
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』 一平成19年度(2007年度)―財団法人和歌山市都市整備公社 2010年
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』 一平成20年度(2008年度)―財団法人和歌山市都市整備公社 2011年

発掘調査は、和歌山城管理事務所が国庫補助金を得て実施したもので、和歌山城管理事務所から財団法人和歌山市都市整備公社が委託を受け、和歌山市教育委員会文化振興課の指導のもと実施した。

現地における調査は、第30次調査が対象面積232.86㎡を平成19年12月10日から3月11日まで、第31次調査は対象面積526㎡（吹上口部分69.5㎡）を平成20年11月27日から平成21年3月27日（二の丸調査部分を含む）までの期間で行ったものである。

なお、第30次調査は平成21年2月16日に現地説明会を開催し、約100名の参加者があった。

(2) 吹上口周辺の既往の調査

吹上口周辺に関する既往の調査には、第8、14、21、24次調査がある。（第1図）

第8次調査は昭和62年度に行われたキャブシステム埋設工事に伴うもので、南北方向の西側に面を持つ石垣（砂岩）を検出した。この石垣は、西外堀が北に方向を屈折した部分の東側の石垣の一部と考えられる。その他、南北方向の結晶片岩石積などが検出された（和歌山市文体事1994）。第14次調査は第8次調査と同様キャブシステム埋設工事に伴うもので、平成7年度に東西方向のトレンチ調査を2区画実施した。北側の調査区（A区）では西外堀の南側石垣の一部、南側の調査区（B区）では御勘定御門に関わる仕切石（砂岩）1条と礎石（砂岩）1基をそれぞれ検出した（和歌山市文体事1998）。第21次調査は平成11年度の歩道拡張工事立会時に検出されたもので、西外堀の北側石垣（砂岩）の一部を確認した（和歌山市文体事2002）。第24次調査は平成11年度の配管設置工事に伴う立会時に確認したもので、第14次調査で検出されていた仕切石の東側延長部を確認した他、礎石とみられる砂岩石材2基、結晶片岩礫敷など御勘定御門に関わる遺構群を検出した。また南側では石組溜枡を2基確認した（和歌山市文体事2004）。これらの調査は第8・21・24次調査が和歌山市教育委員会、第14次調査は財団法人和歌山市文化体育振興事業団が実施したものである（第1表）。

2. 位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置しており、北は和泉山脈を境として大阪府泉南郡岬町・阪南市、東は和歌山県那賀郡岩出市・紀の川市、南は海南市に隣接している。奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川は、本市のほぼ中央を西流して紀伊水道に注いでおり、その過程で運ばれた土砂によって形成された沖積平野が和歌山平野である。古代においては、磯ノ浦から海岸線に沿って大規模な砂州が形成されており、このために紀ノ川は狐島付近で大きく屈曲して和歌浦湾に注いでいたとされている。この海岸砂州に位置する独立丘陵、岡山に和歌山城は築かれている（第2図）。

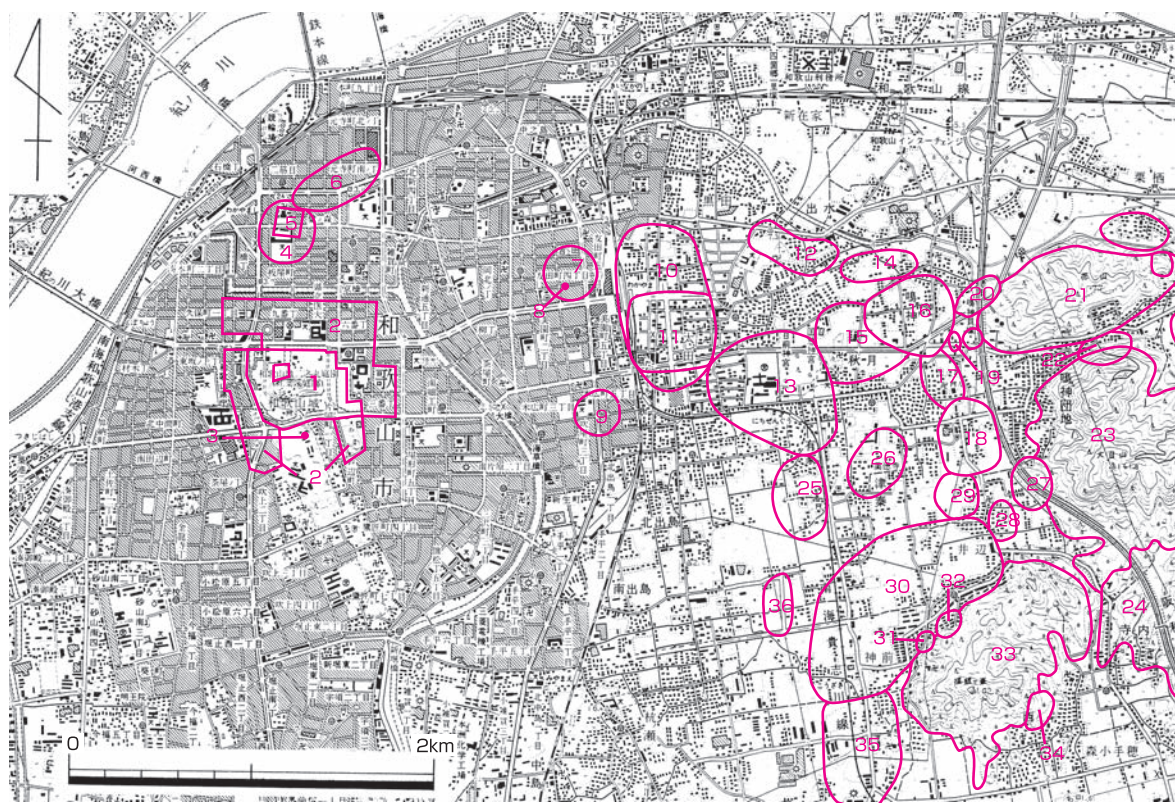
周辺の遺跡を概観すると、縄文時代の遺跡として鳴神貝塚（19）、瀬宜貝塚が知られている。鳴神貝塚からは縄文時代中期から晩期の土器が多く出土しているが、その貝層の中に海水系の貝殻が多くみられることから、当時の海岸線は同遺跡周辺の岩橋山塊西麓あたりまで及んでいたと推定されている。弥生時代になると遺跡の数は増加し、太田・黒田遺跡（10）・秋月遺跡（13）を初めとする集落が平野部に展開するようになる。古墳時代においても鳴神遺跡群や友田町遺跡（7）、田屋遺跡、西田井遺跡などの集落が平野部に営まれ、鳴神V遺跡（15）では前期の小区画水田跡や古墳時

代を通じて微高地上に営まれる方墳を中心とした古墳群が検出されている。

奈良時代になると南海道に面する形で直川廃寺跡や上野廃寺跡、山口廃寺跡等の寺院が建立される。また鳴神Ⅴ遺跡では平安時代中期を中心に多くの土器が出土しているが、その中には緑釉陶器や初期輸入陶磁器、陶硯などが出土していることから、当該期において官衙的な施設があったと考えられている。

鎌倉から室町時代にかけては、太田・黒田遺跡の南半部に重複して位置する太田城跡（11）において輸入陶磁器や備前焼などの多くの遺物が出土している。戦国期には紀ノ川下流域の土豪は雑賀衆と呼ばれる集団をつくり、本願寺の門徒組織を利用して在地支配を続け、本願寺とともに織田信長・羽柴秀吉に敵対するが、その雑賀衆の土橋氏が「土橋構」を構えた地が岡山であったと考えられ、これに関連するとみられる「天正七年三月廿五日」銘の瓦製さげ振りが、天守閣再建工事の際に出土している。また調査において室町時代の瓦や石仏等が出土していることから、一時期には寺院であった場所を当該期には城郭として利用したことが推定されている。

天正13（1585）年4月に太田城を攻め落とし、紀州を平定した羽柴（豊臣）秀吉は、異父弟である秀長に領有させて和歌山城の築城を命じる。しかし、秀長は同年6月の四国攻めの後、大和郡山



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	史跡和歌山城	近世	10	太田・黒田遺跡	弥生～近世	19	鳴神貝塚	縄文～弥生	28	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳
2	和歌山城跡	近世	11	太田城跡	安土・桃山	20	音浦遺跡	古墳	29	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳
3	岡山の時鐘堂	近世	12	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸	21	花山古墳群	古墳	30	井辺遺跡	弥生
4	鷺ノ森遺跡	弥生～近世	13	秋月遺跡	弥生～近世	22	岩橋Ⅲ遺跡		31	井辺Ⅲ遺跡	縄文
5	本願寺跡	中世～近世	14	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～近世	23	岩橋千塚古墳群	古墳	32	岡崎縄文遺跡	縄文
6	山吹丁遺跡		15	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	24	寺内古墳群	古墳	33	井辺前山古墳群	古墳
7	友田町遺跡	弥生～平安	16	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～近世	25	津秦遺跡	弥生	34	森小手穂遺跡	古墳～中世
8	吉田窯跡	奈良	17	鳴神Ⅲ遺跡		26	津秦Ⅱ遺跡	弥生～奈良	35	神前遺跡	弥生
9	木広町遺跡	弥生	18	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安	27	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良	36	神前Ⅱ遺跡	古墳～室町

第2図 史跡和歌山城と周辺の遺跡分布図

城に在城し和歌山城に戻ることはなかったため、翌年、城代として家臣の桑山重晴が3万石で入城した。『紀伊続風土記』によると、天正13年の内には本丸、二の丸（徳川期の天守台、本丸御殿）の普請が完成していたとされるが、詳細は不明である。なお結晶片岩を用いた野面積みの石垣は、その本丸、二の丸の周辺でみられることから創建期のものと考えられており、石垣改修に伴う調査（第13・17・18・20次）では、整形した岩盤の上に直接基底石を据えていることが明らかになっている。

慶長5（1600）年には桑山氏に替わり、関ヶ原の戦いで軍功のあった浅野幸長が入城した。浅野氏の時期にも城内の普請・作事は継続して行われたが、その石垣石材には創建期とは異なり砂岩を用いたとされる。その後、元和5（1619）年に浅野氏に代わって徳川頼宣が入城し、二の丸の拡張や砂の丸などを増築した。徳川期に入って2年後の元和7（1621）年に頼宣は將軍秀忠から銀2000貫を与えられ、城郭・城下町の拡張、整備に着手したとされる。その改修は二の丸西部をはじめ、砂の丸、南の丸の拡張や高石垣の構築を行う大規模なものであったといわれるが、この時期の石垣にも砂岩が用いられたようである。また、5代藩主の徳川吉宗の時代には花崗斑岩の石垣が構築されたといわれている。このように和歌山城の石垣は時期によって異なる石材を用いていたと考えられている。そうして、明治4（1871）年の廃藩置県による廃城になるまで御三家のひとつ紀州徳川家の居城として領有された。

廃城後は兵部省の管轄となり、陸軍省を経て明治45（1912）年和歌山市に払い下げられた。そして、昭和6（1931）年に内郭にあたる地域が国の史跡に指定され、また同10年には天守閣や隅櫓などが国宝に指定されたが、同20年の和歌山大空襲によって天守閣は焼失した。

吹上口の調査地周辺は城内でも極めて開発の進んだ地点のひとつで、石垣や門の撤去、堀の埋立てなど当時の面影を残さない状況にある。明治22（1889）年には和歌山中学校が西の丸に移転した他、同41年には市電の開通、また昭和9（1934）年には西外堀の一部が埋め立てられ消防屯所が設置されるなど、吹上御門や門東側の虎口を形成する石垣などが撤去され失われた。

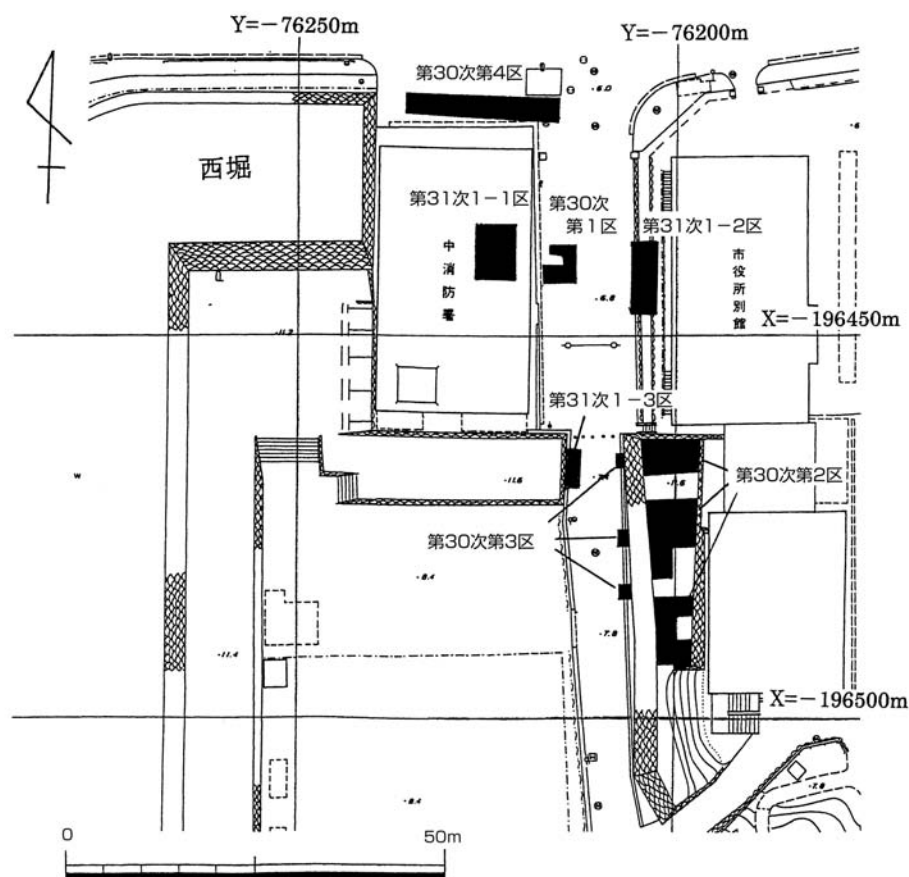
3. 調査の方法と概要

(1) 調査の方法

第30次調査

第30次調査は、中消防署移転撤去に伴い吹上御門址の整備に係る調査区（第1・4区）と御勘定御門東側の石垣整備に伴う調査区（第2・3区）の大きく二つの地区を設定した（第3図）。当初、吹上御門址関係の調査は、第1区で行うとして計画されたが、吹上橋北側の取り付け部の状況確認が追加され第4区を設定し、計画を補正しての調査となった。各調査区の調査面積は第2表に示した。

第1・4区の現況は県道及び和歌山城内へのアスファルト敷の進入路であり（図版1）、アスファルトの切断及び撤去・処分に至る工事を業者に依頼し、遺構面直上まで機械掘削作業を行い、以下人力掘削によって調査を進めた。第3区は、石垣裾部のアスファルト敷通路に当たり（図版2下）、第1・4区と同様にその撤去等を業者に依頼して行った後、一部表土から人力によって順次層位ごと掘削し、遺物の採集を行った。また櫓台上部の第2区（図版2上）は、転落防止のため転落防止柵を設置した後、表土掘削からすべて人力によって調査を進め、埋戻作業もすべて人力によって



第3図 調査地区割図

行った。

図面による記録は、第19次調査時に設置していた国土座標点から基準点測量を行い旧国土座標（日本測地系）の数値を用いて遺構平面図（縮尺 1/20）等の作成を行った。壁面土層断面図や石垣立面図・石垣断面図等は国家水準点（T.P.値）の値を基準として 1/20 の縮尺で作成した。

各調査区の土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

第31次調査

第31次調査は吹上口整備のための追加調査部分を第1区と呼称した。第1区は3ヵ所の調査区を設けたことから枝番を付して1-1区～1-3区と細分を行い、中消防署跡地における吹上御門址の整備に係る調査区（1-1区）、市役所南別館西側隣接地での堀石垣状況確認のための調査区（1-2区）、御勘定御門西側整備に伴う調査区（1-3区）の3地区を設定した（第3図）。

第31次調査第1区の調査規模について、1-1区は東西幅5m、南北長7mの面積35㎡、1-2区は東西幅3m、南北長9mの面積27㎡、1-3区は東西幅1.67m、南北長4.5mの面積7.5㎡の規模をそれぞれ測

第2表 調査面積一覧表

調査区		面積(㎡)
第30次	1区	17.12
	2-1区	41.92
	2-2区	59.99
	2-3区	45.19
	3-1区	2.19
	3-2区	2.96
	3-3区	3.50
	4区	59.99
第31次 (第1区)	合 計	232.86
	1-1区	35
	1-2区	27
	1-3区	7.5
合 計		69.5
総 合 計		302.36

り、合計面積69.5㎡である。なお、第30次調査を合わせた吹上口部分の総調査面積は302.36㎡となった（第2表）。

1－1区の調査は、まず、機械掘削を行ったが、現在の整地土が約1.7mの深さまで堆積しており、その層までを掘削したところ堀石垣の一部が露出した。その後、堀内部を人力で掘削したが、深さ約60cmで堀内部を埋め戻したとみられる粗砂層に達したことから、堀部分は現地表面から深さ約2.2mまで攪乱された状況が判明した。石垣の堀側面はコンクリートで固定されており、旧中消防署建物のコンクリート基礎に連結されていた。石垣調査のためコンクリートを破碎し、堀内部を約50cm掘り下げ、2段目石垣の途中まで露出させることができた。石垣の裏込調査のため、中央部にサブトレンチを設定して掘り下げたところ、堀石垣が露出した深さから約40cmで石垣裏込となり、堀石垣の内部は現地表面から深さ約2.4mまで攪乱された状況が判明した。遺構に伴うとみられる堆積土は堀内部を埋め戻した粗砂層のみであり、この層の色調は10YR 3/3（暗褐）であり、掘削対象が狭小であったため遺物は出土しなかった。

1－2区の調査は、まず、アスファルト及び花壇の除去を行った後、機械掘削を行った。その結果、本調査区の大部分は攪乱されていることが判明したが、調査区北側の西端部で堀石垣を検出した。堀石垣は調査区の西壁に沿って検出したが、現市役所南別館建物の建設時に大きく壊されており、約48°の角度で取り壊された状況を確認した。石垣は4段分検出したが、石垣の上面は現地表面から深さ約40cmであり、過去の調査での検出例と一致している。堀側部分を掘削したが、地表面から約2.2mの深さで堀内部を埋め戻したとみられる粗砂層に達した。遺構に伴うとみられる堆積土はこの堀内部を埋め戻した粗砂層のみであり、色調は1－1区と同様であり、掘削対象が狭小であったため遺物は出土しなかった。

1－3区の調査は、アスファルトの除去を行った後、人力により掘削を行った。平成7年度に行った第14次調査で確認された江戸時代の遺構面を検出し、御勘定御門に関する仕切石を再検出した。また、調査区の東半部では、第14次調査後に埋設された高圧線埋設管が露出した。御勘定御門西側石垣の基底部を確認するため、調査区北側の攪乱坑を利用しサブトレンチを設定、掘削した結果、遺構面下の堆積は整地土のみであり、標高6.4m付近から石垣石材を積んでいるものと考えられた。

図面による記録は、第30次調査時に設置した国土座標点から基準点測量を行ない、第30次調査に準じた調査方法を用いた。

（2）調査の概要

第30次調査

第30次調査の基本層序は、立地的な条件が異なるため各調査区によって特徴的な状況を確認している。このような特徴は、各調査区の遺構説明で土層堆積状況等を示し、具体的な内容についてふれているので、ここでは概要を述べる。

まず第1・4区は西外堀及び堀を構成する石垣、橋架かりの調査区であるためその堆積状況は酷似する。特に石垣及びその裏込石はほぼ同規模であり、ともに後世の削平によって上位部分の状況確認には至っていない。しかし、第4区の中央部では吹上橋が架かっていた時期の地表面と考えら

れる粘土層（第2b層）を検出し、その基盤層を境として上位は近代以降の堆積層、下位は基盤層を形成するための整地層であることを確認した。なお、第2a層は橋架かりの裾部にのみ堆積する粗砂層で包含する遺物から17世紀前半の堆積と位置づけられる。また、堀内部の堆積は第1・4区とも北から南に向け下降する粗砂層が褐色系のシルト層を間層として数単位以上確認でき、堀の埋め立てが北側から行われたものと考えられる。

次に第2区の状況は、表土（第1層）が20～30cmの厚さで全面に堆積している。第2a層は土堀（SA-3）の崩落土であり、最大厚40cmを測り、土堀の東側にみられる。第2b層は徳川期の整地土であり、厚さ10～20cmの規模でほぼ全面にみられる。この層の上面が第1遺構面を構成し、礎石建物1棟（SH-1）と土堀1条（SA-3）を検出した。第3a層は浅野期の整地層と考えられ、厚さ10～20cmで部分的に堆積している。第3b層は櫓台構築時の整地層であり、櫓台の中心部にみられる。この層の周囲は裏込石で囲まれ、その外周は石垣が構築されている。第3a層上面が遺構面と考えられたが、遺構の残存はみられず、そのため第3b層上面及び石垣裏込石上面を第2遺構面として調査を行った。

第3区の状況は、3-1区で検出した石組溝（SD-1）の天端石及び3-2区で検出した石組溜枡（SX-1）の天端石から石垣西側の徳川期における通路面の高さが現地表面より70cm程度低かったことが確認できた。これら徳川期の遺構直上の堆積は、石垣上部の櫓台から転落した建物に伴う瓦や土堀に伴うと考えられる漆喰などを多量に含む土層で、それ以降現代の地表面に至る数単位の堆積層を確認した。また石垣の基底部確認を目的としてサブトレンチを設定し掘削を行ったものの、石垣の基底部が予想以上に深く、唯一3-3区の攪乱を利用したサブトレンチによって石垣基底部の検出に至った。しかし、石垣前面の堆積が粗砂層の単一層であったことと翌日の降雨によって壁面が崩落し正確な記録保存には至っていない。ただし、石垣の基底部が現地表面から約2.0m下部にまで及ぶことが明らかとなった。なお、3-1～3-3区を通して石垣前面の堆積が粗砂層の単一層であり、徳川期以前の面的な確認には至っていない。

以上、各調査区において石垣を中心とした良好な遺構を多数検出した。西外堀周辺の調査区においては、第1区で西外堀の南側石垣、第4区で北側石垣と吹上橋の北側橋架かりの張り出し部石垣を検出した。また御勘定御門東御櫓の櫓台上面を調査した第2区では礎石建物1棟と土堀を確認し、同櫓台西側石垣の基底部を調査した第3区で石垣裾部に構築された石組溝及び石組溜枡を検出した。

第31次調査

第31次調査・第1区の層序について、1-1区と1-2区は大規模に攪乱を受けていることが判明した。

1-1区の現地表面標高は6.3～6.4mを測る。現在の整地土が約2.3～2.4mの深さまで堆積しており、堀石垣が露出した。堀石垣の周囲にはコンクリート基礎が残存しており、整地土の上部深さ70～90cmまでは中消防署撤去時の攪乱、その下部深さ150cmまでは中消防署建設時の攪乱とみられた。石垣面前の堀内部は地表面からの深さ2.2mで堀内部を埋め戻した10YR 3/3（暗褐）粗砂層になり、約40cm以上堆積している。この粗砂層の上面標高は4.1mを測る。

1 - 2 区の現地表面標高は6.3～6.5mを測る。現地表面から深さ約40cmで調査区北側の西端部で西壁に沿って堀石垣を検出した。この石垣遺構以外の部分は全て現市役所南別館建物の建設時に大きく壊されており、攪乱された現在の整地土が堆積している。堀石垣前面の堀内部では、地表面から約2.2mの深さで堀内部を埋め戻したとみられる粗砂層に達した。この粗砂層の色調は1 - 1 区と同様であり、上面標高は4.1mを測るもので、約30cm以上堆積している。

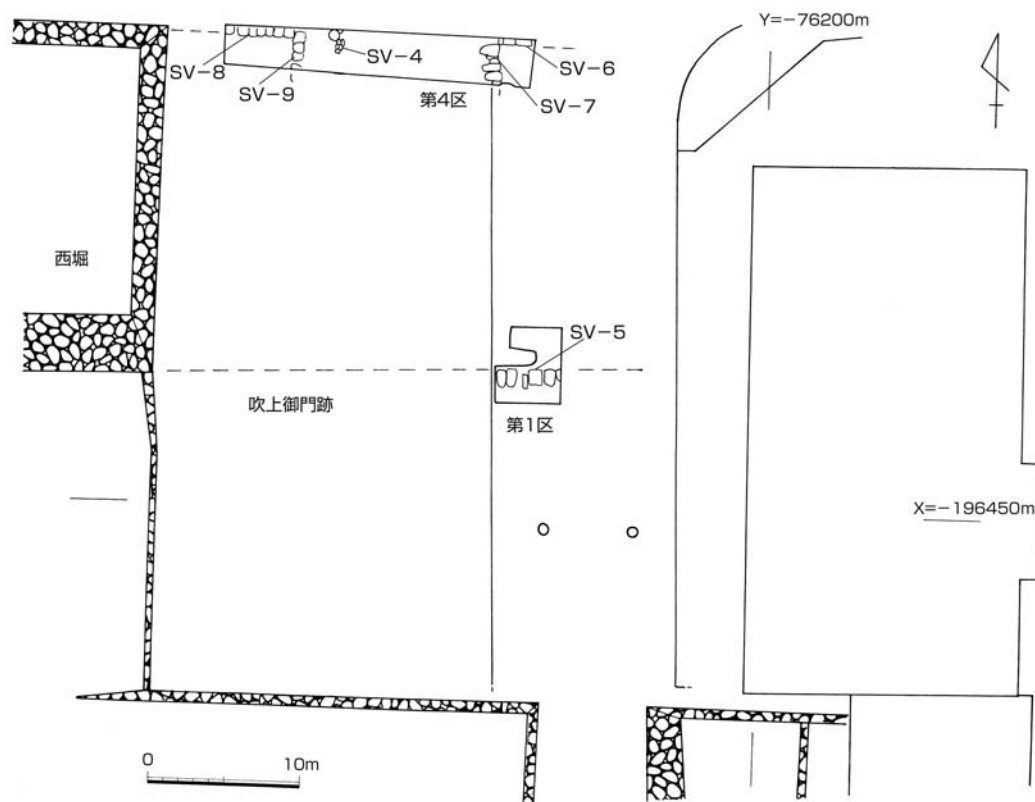
1 - 3 区の現地表面標高は約7.3mを測り、北に緩やかに傾斜している。御勘定御門西側石垣面に接した部分に設置された現在の石組溝等により、上位約70cmは攪乱されており（第1～3層）、その下面で江戸時代の道路面を形成するとみられる第4層（10YR 4 / 3（にぶい黄褐）粗砂混シルト）が約5cmの厚さで堆積する。この第4層上面の標高は6.5mを測る。その下層は10YR 4 / 2（灰黄褐）粗砂（第5層）が約15cm、径5～15cmの礫層（第6層）が約20cm、10YR 4 / 3（にぶい黄褐）粗砂（第7層）が35cm以上の厚さで堆積している。第7層は無遺物層、第6層は御勘定御門西側石垣構築時の整地層、第5層は石垣前面を整地した土層と考えられる。

以上、1 - 1 区と1 - 2 区は大規模な攪乱を受けており遺構面を検出することはできなかったが、深掘の結果、西外堀の南側石垣の一部を検出した。1 - 3 区では、第4層上面で江戸時代の遺構面を検出し、御勘定御門に関する仕切石と仕切石を挟み南と北で江戸時代の道路面を検出した。

4. 遺構

(1) 第30次調査

各調査区において石垣を中心とした良好な遺構を多数検出した。特に、西外堀周辺の調査区（第1・4区）では西外堀を構成していた石垣と吹上橋の北側橋架かりの張り出し部を検出し、『和歌山



第4図 第30次調査 第1・4区遺構配置図

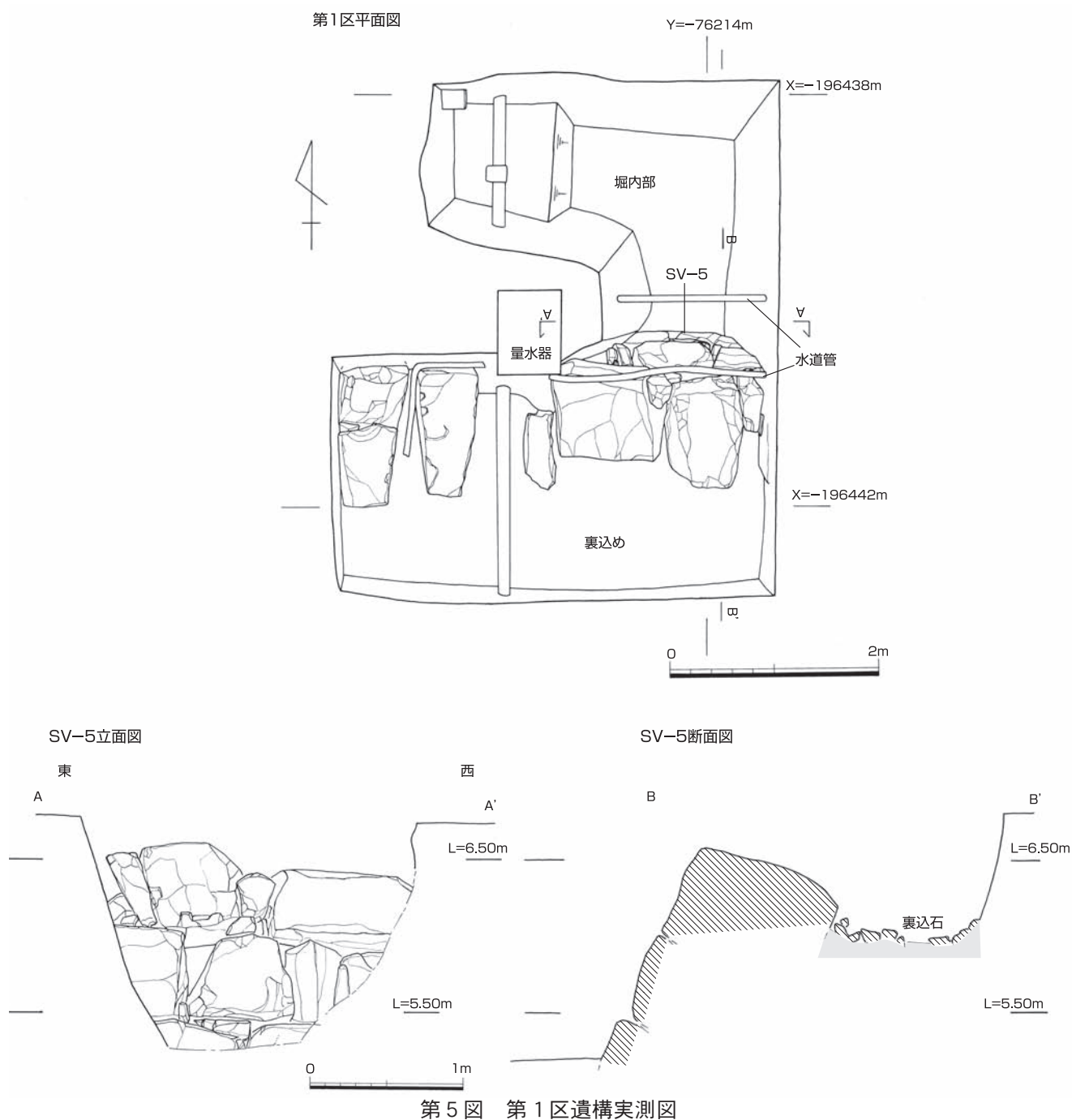
御城内惣御絵図』と符合する成果を得た。また御勘定御門東御櫓及び石垣基底部確認の調査区（第2・3区）では櫓台上部に存在した礎石建物と土塀を確認した他、石垣裾部に構築された石組溝及び石組溜枳を検出し、徳川期の櫓台に付随する構造物を明らかにした。

以下、調査目的毎に遺構の概略を説明する。

西外堀石垣及び吹上橋の取り付け部分確認のための調査区（第1・4区）（第4図）

〔第1区〕（第5図、図版3・4）

第1区は現況の旧中消防署跡地の東側、御勘定御門跡に通じる通路部分に位置し、西外堀南側の石垣を確認するために設定した調査区である。西外堀南側の石垣は、キャブシステム埋設工事に伴



う第14次調査において一部を確認していたものの、その残存状態など不明な点が多く今回の調査においてその一端を明らかにすることができた。

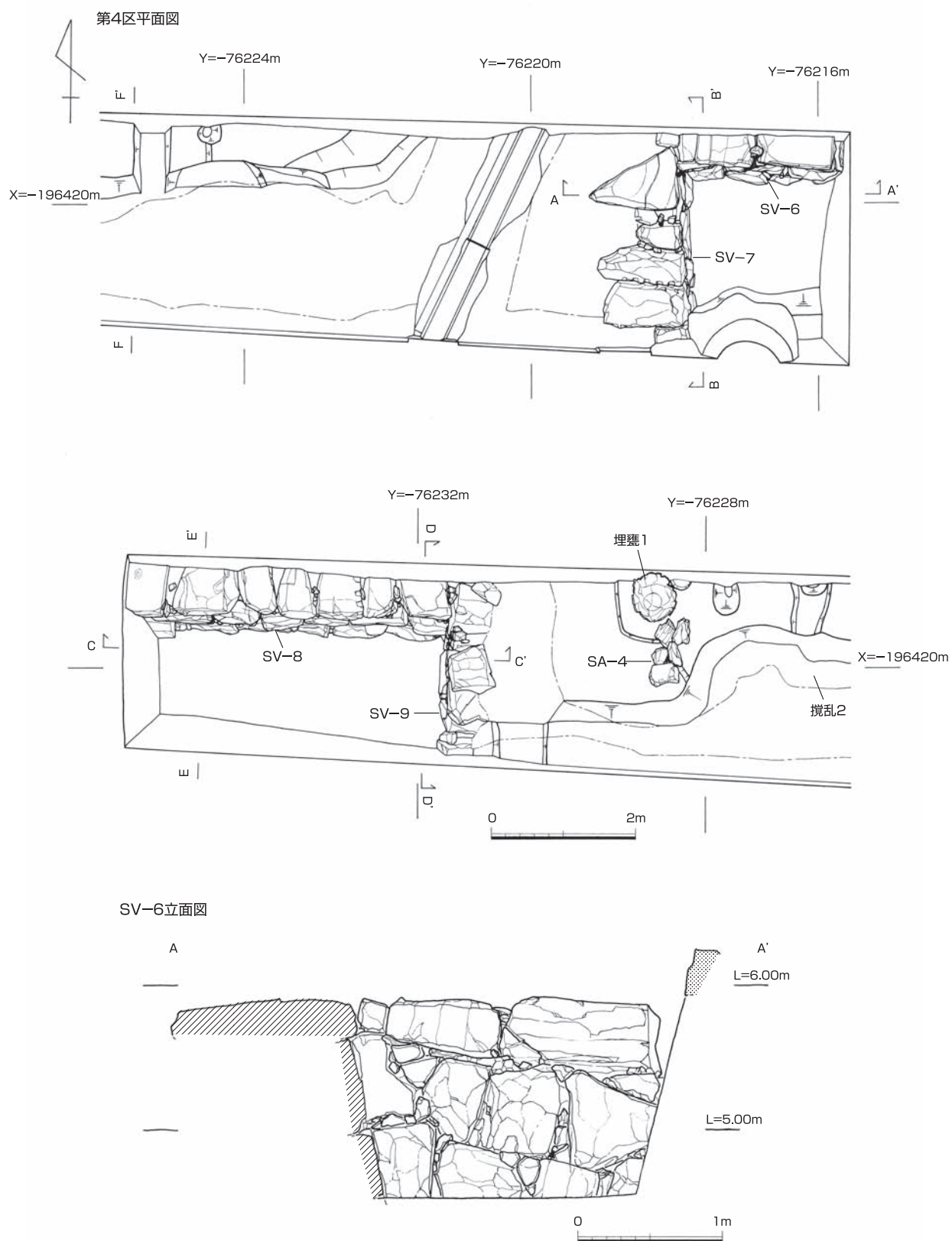
SV-5は第1区の中央やや南よりを東西に貫く形で検出した石垣で、現存する西外堀南側石垣の延長上に位置し、比較的遺存状況の良好な石垣である(第5図、図版3・4)。石垣は、奥行き1.0m程度の砂岩を使用し、打ち込みハギの布積みしたもので、東西長4.2m、堀底に向けた高さ1.4m分を検出した。この石垣の傾斜角度は 67° で、石材には幅10cm程度の矢穴を顕著に確認できた。この石垣の裏込めは、直径10~30cmの砂岩円礫を用いている(図版4上)。また堀内部の状況は、北から南に向け下降する粗砂層が褐色系のシルト層を間層として5単位以上確認できた(図版4下)。

〔第4区〕(第6図、図版5~8)

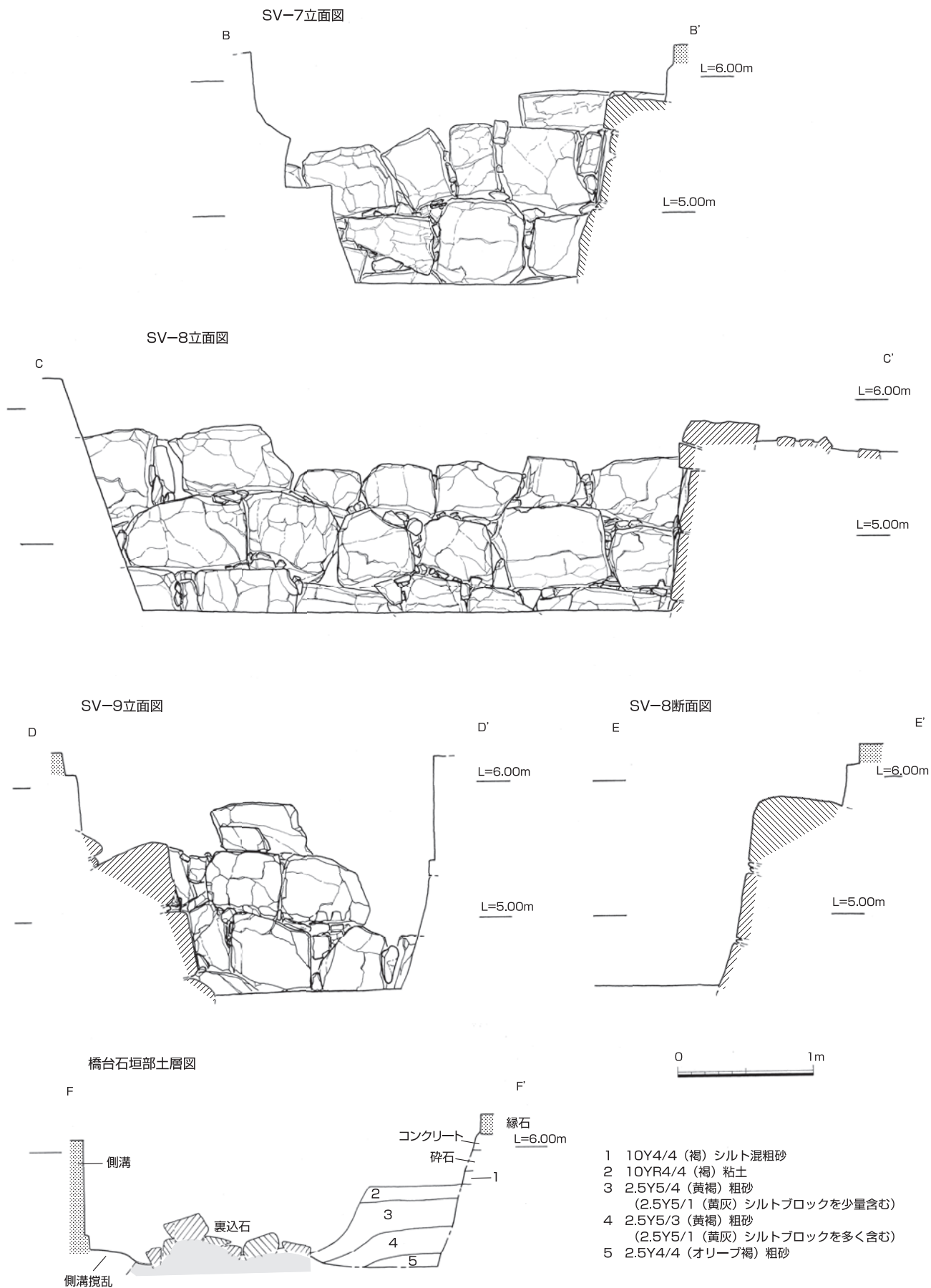
第4区は現況の県道和歌山停車場の歩道部分に位置する調査区で、西外堀北側の石垣延長部であるとともに吹上橋の北側橋架かり部に相当する地点である。西外堀北側の石垣は、歩道拡張工事に伴う第21次調査において一部を確認していたものの、今回の調査によって『和歌山御城内惣御絵図』によって描かれている橋架かりの張り出し部などを明確にした。

SV-6・8は、現存する西外堀北側石垣の延長上に合致する地点において検出できた石垣で、SV-6・8とも一部は普請時の天端石まで残存しており極めて遺存状況の良いことが確認できた(第7・8図、図版6・7)。またSV-6・8間の約14.0m(七間)は、SV-7・9の石垣によって南側に張り出していることが確認できた(第7図、図版6・7)。これらの西外堀北側及び張り出し部に伴う石垣は、奥行き0.6~1.2m程度の砂岩を南側石垣と同様の打ち込みハギの布積みしたもので、両者とも堀底に向けた高さ1.4m分を検出した。また石垣の組み合わせ部が算木積みによって構築されていることから、石垣普請時に張り出し部を築造していたことが確認できた(図版7上)。これら石垣の傾斜角度は、SV-6が 77° 、SV-7が 78° 、SV-8が 74° 、SV-9が 83° である。張り出し部の石積み状況は、SV-7・9とも天端石の大半が失われているものの、やや堀内部に向かって下降する状況が窺われる。また張り出し部の長さは、SV-7の裏込石の範囲から復原すると約4.0m前後(二間)の可能性が考えられる。これら石垣の裏込めは、石垣前面から3.0mの範囲まで直径10~30cm程度の砂岩円礫が密に入り、その背部に粗砂を数単位に突き固め、江戸時代と考えられる最上層に厚さ10cmの褐色系粘土を用い面を仕上げている状況が攪乱2の壁面及びサブトレンチによって確認できた(図版8下)。堀内部の状況は、張り出し部の東西とも第1区と同様北から南に向け下降する粗砂層が褐色系のシルト層を間層として3単位以上確認できた(図版8上)。

この他、橋架かりに関係する遺構として考えられるものに石列(SA-4)がある(第6図、図版7下)。SA-4はSV-9前面から3.0m(一間半)の間隔をもってSV-9に平行してのびる石列で、石材は長さ30~40cmの砂岩と結晶片岩が混在するものであり、北壁直下には礎石とも考えられる直径30cmの砂岩円礫も含まれている。また一部は近代のものと考えられる埋甕1によって石材が抜き取られている。そして、先述した江戸時代の最終整地である粘土がこの石列によって止められている状況も確認できた。さらに、SV-7と平行する石列は確認できなかったものの、粘土層がY-76222m付近で東側に落ち込む状況を確認し、この両者の間(約6.0m=三間)が橋幅である可能性が考えられる。



第6図 第4区遺構実測図1



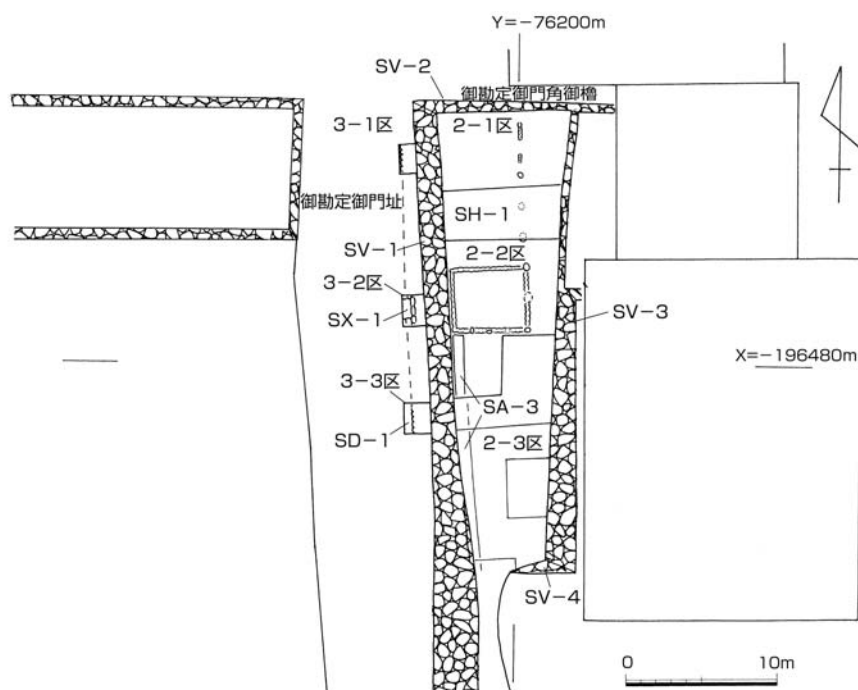
第7図 第4区遺構実測図2

石垣全体の観察からは、石垣面がすべて被熱を受け剥落しやすい状態であることを確認し、石列（SA-4）を含めすべて被熱による赤変あるいは煤の付着が観察できた。また、北壁面の観察からは明らかに異なる深さで第二次大戦時と考えられる焼土層を検出していることや遅くとも昭和9年に調査区周辺の西外堀が埋められたとされることから先述の被熱は、明暦元（1655）年に起こったいわゆる明暦の大火による被熱である可能性が考えられる。

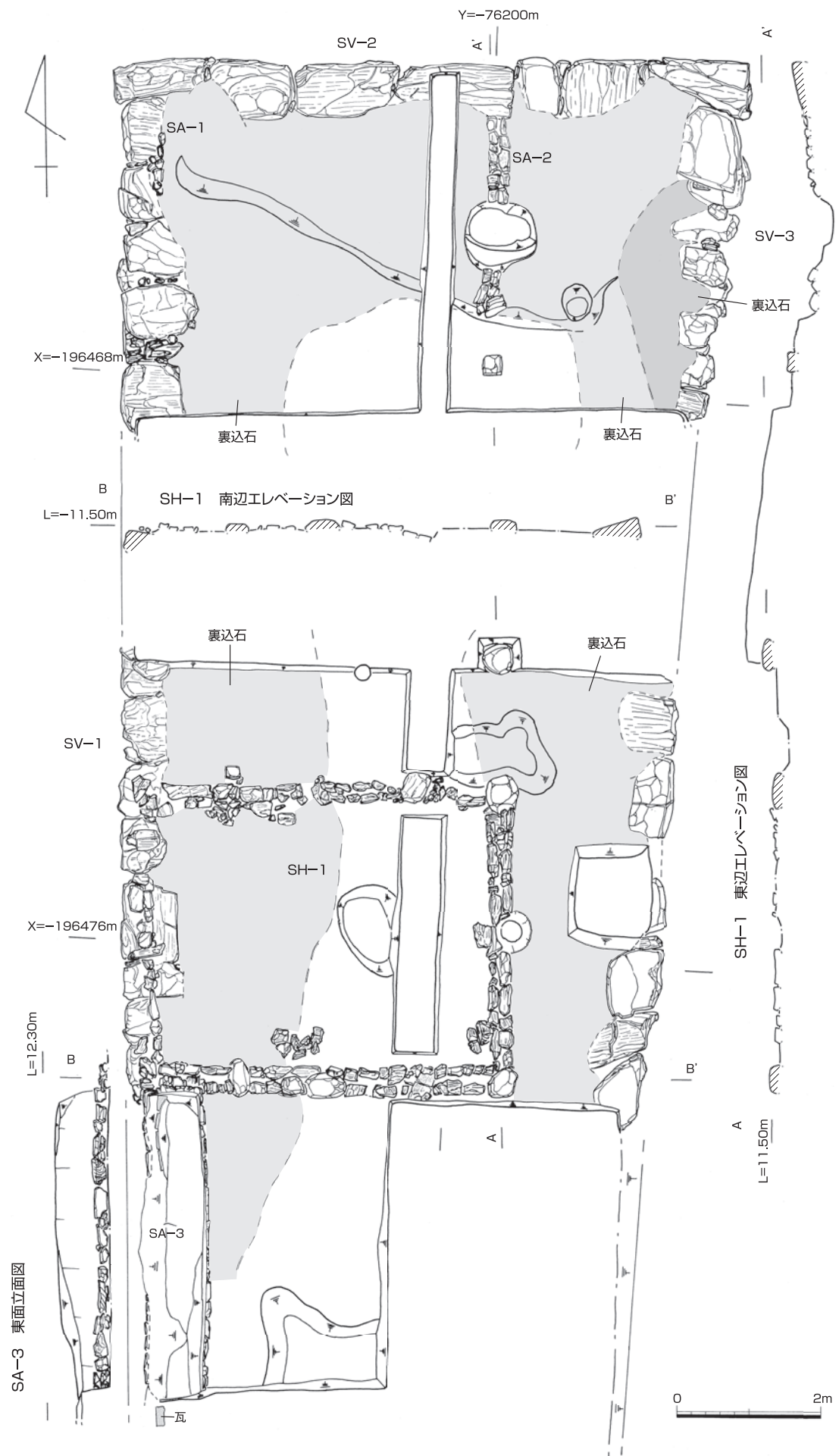
御勘定御門東御櫓及び石垣基底部確認の調査区（第2・3区）（第8図）

第2区は、御勘定御門東側櫓台上面の調査で、『御城内惣御絵図』に「御勘定御門角御櫓」と記されているところである。櫓台上面北端部は東西幅8.8mの規模を測るが、南に行くほど数値を減じ、 $X = -196476\text{m}$ 付近では幅7.5mとなっている。櫓台上面は標高11.5mを測り、石垣下の西側道路面からは約4.0mの比高差がある。

この櫓台を構成する石垣であるが、野面積みのもので、結晶片岩と砂岩の2種類の石材がみられる。特に、砂岩は海蝕の痕跡を残すものが多くみられることから海岸にあった自然石の巨礫を運んできたものと考えられる。石材の規模について、幅1.0m前後を測る大きなものが主体であるが、間詰石には拳大程度の小規模なものも用いられている。隅角部は結晶片岩が多く用いられ、算木積みがみられる。石垣の構築角度は約 70° を測り、天守一の門櫓台石垣などの結晶片岩を用いたものと同様の勾配であるといえる。なお、浅野期石垣の特徴といわれる刻印のある石材及び矢穴のある割石は全くみられないことから、この石垣は結晶片岩石垣から砂岩石垣への移行期のものと考えられ、友ヶ島石切場開発以前の浅野期初期のものと推定できる。また石垣基底部確認の調査区である第3区では既存石垣（SV-1）の裾部に石垣と平行して構築された石組溝（SD-1）を検出し、3-2区地点で石組溜枳（SX-1）を確認した。



第8図 第30次調査 第2・3区遺構配置図



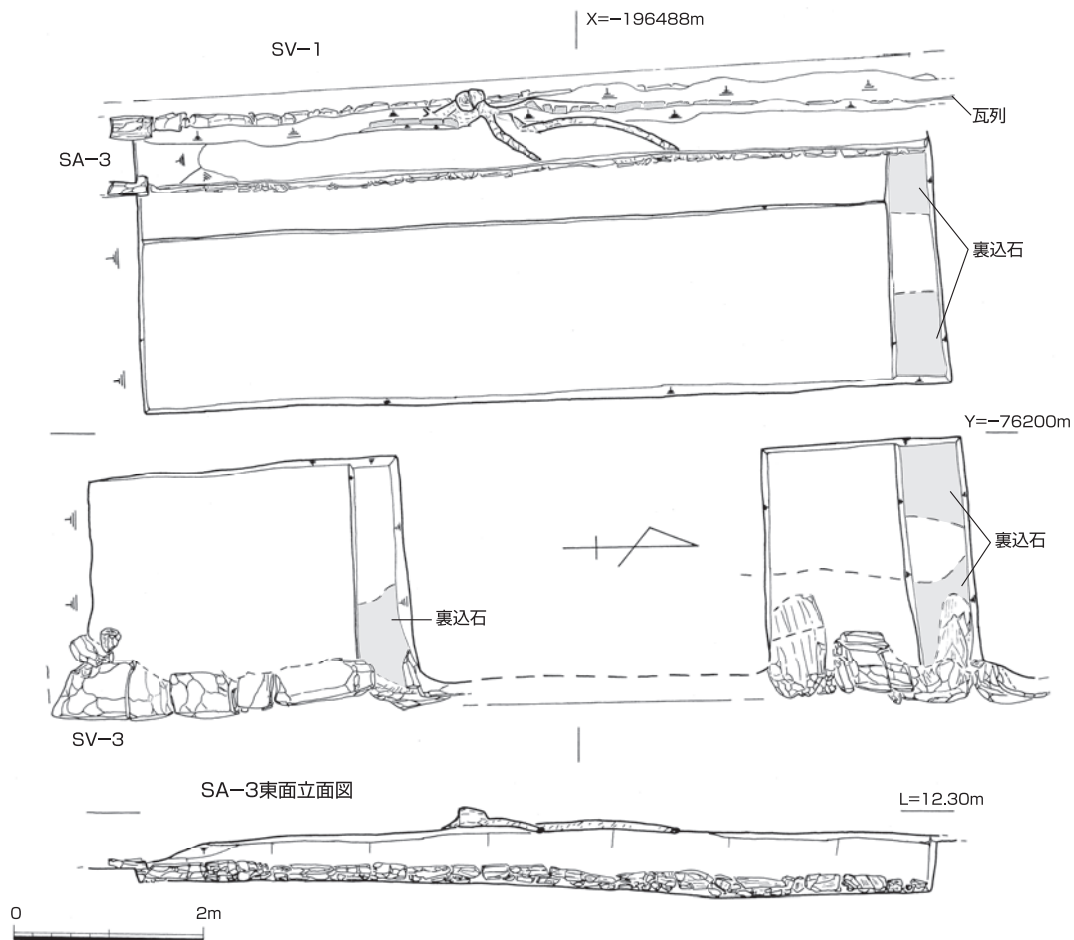
第9図 2-1・2-2区遺構実測図

〔第2区〕（第9・10図、図版9～17）

調査の結果、遺構面は2面存在することを確認した。第1面では、櫓台の北側で礎石建物（SH-1）を検出し、その建物南側に接続する土堀（SA-3）を確認した。

礎石建物（SH-1）は櫓台石垣の北面と西面に沿ったかたちで建てられており、南北約14.3m、東西5.4mの規模をもつ南北方向に長い建物である（図版12）。礎石は南辺と東辺にみられ、直径40～50cmの平坦な砂岩円礫（自然石）を用いたもので、礎石間を結晶片岩の割石を用いた石列で繋いだ構造になっている。結晶片岩の石列は西辺の一部にも残存しており、北辺にはみられないが本来は北辺にも結晶片岩石列は存在したものと考えられる。

建物は礎石の配置から桁行き七間、梁行き四間の側柱建物を復元することができ、礎石芯々間の距離は桁行き方向が約2mを測ることから、一間＝六尺五寸（1.97m）の京間を使用したとみられ、和歌山城下町で徳川期に用いられた用尺が使用された建物であるといえる。また、梁行きの礎石間は4尺を用いたものと考えられる。なお、原位置を保つと考えられる礎石は、桁行方向は南から順に1・3・4・6番目が残存しており、2・7番目の礎石は欠失、5番目は調査範囲外のため不明であった。6番目から北側部分であるが、全体的に約50cm以上の沈下がみられた。梁行方向の原位置を保つと考えられる礎石は、東側から順に1（桁行方向と共有）・3・4番目が残存していた。なお、南側から桁行き二間目にも結晶片岩を用いた石列がみられるが、他の部分に比べ石材が小規模なことや砂岩の礎石を用いていないことなどから建物内部の間仕切基礎と考えられ、梁行きの礎石



第10図 2-3区遺構実測図

位置に対応する場所には砂岩礎石よりも小規模な結晶片岩の板状礎石や集石がみられた。また、南辺礎石列の東から三間目の石列北側に隣接して集石がみられるが、この部分が入口であった可能性がある。

土塀（SA-3）は、礎石建物南西角に接続するものであり、櫓台石垣の西面に沿って築かれており、基礎石組上に土で構築したものである（図版13・14）。2-2区で延長4.3m、2-3区では延長8.4m分を調査したが、櫓台石垣西面に沿って南端まで築かれている。土塀の基礎石組は結晶片岩の割石を1～2段に組み合わせたもので、幅約80cm、高さ約20cmの規模を測る。その上部の土壁部分であるが、基底幅約70cm、最大残存高約60cmの規模を測る。西面側は、高さ約30cmの位置に半裁した平瓦を長軸方向で一列に高さを合わせて埋め込んでおり、西面側の土壁面はこの瓦列西端面まで傾斜をもっていたと考えられる。また、土壁の土色・土質は2.5Y 5/4（黄褐）シルトであり、細かく分層はできないことから一体成形で積み上げられたものと考えられ、中には瓦片が少量含まれていた。なお、土塀の崩落土から大量の棧瓦が出土しており（図版14下）、土塀は棧瓦を用いていたものと考えられる。少量であるが漆喰も出土しており、現状ではみられないが、土壁面に漆喰を施していた可能性がある。また、土塀基礎石組が礎石建物（SH-1）の石列と組み合っていることから（図版13）、これらの建造物は徳川期の同一時期に構築されたものと推定することができる。

なお、2-1区の東面石垣部分であるが、徳川期の整地層（第2層）を切り込んだ裏込石が一部にみられ、この部分の石垣石材は砂岩だけで構成されることから積み替えが行われた部分と考えられる。積み替え時期について、建物廃絶後に地震等で石垣北端部が沈下し、その際にこの部分が崩壊し、その後修理を行ったものとみられ、近代以降の時期を推定できる。

第2面では、櫓台石垣の裏込石と櫓台を盛り上げた整地土の上面での状況を検出したが、礎石建物の部分と土塀部分では大きく様相が異なる結果となった。

北側の礎石建物部分は、石垣北側の裏込石の範囲が最も厚く、石垣面から約3.4mまでである。石垣東西側では、石垣面から1.8～3.0mの範囲までに裏込石が施されており、それらの裏込石に囲まれた櫓台中央部は粗砂の整地土（第3層）が盛り上げられている（図版11・15）。

土塀部分では、裏込石の範囲は石垣面から1.2～1.6mの範囲までであるが、櫓台中央部の幅2.5mの範囲にも裏込石同様の礫群がみられた（図版17）。しかし、この状況が土塀部分の櫓台全体まで及ぶのかどうかは不明である。

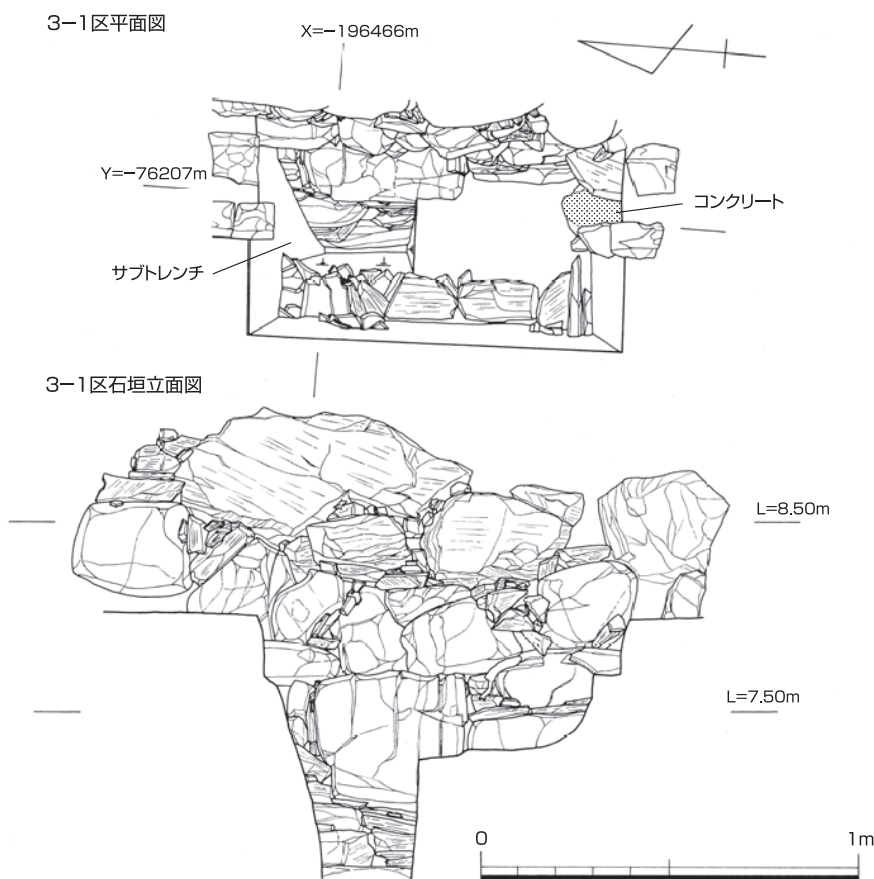
〔第3区〕

3-1区（第11図、図版18）

まず最も北側に位置する3-1区では、地表下0.8m（標高6.4m）の深さで結晶片岩を使用した石列を検出し、他の調査区との検討からこの石列が石組溝（SD-1）の東側石であることが確認できた。この石組溝と石垣との間にサブトレンチを設定し、石垣基底部の状況確認を行ったものの、標高5.6mの深さまで掘削を試みたが範囲狭少のため石垣基底部の検出には至っていない。

3-2区（第12図、図版19・20）

3-2区では、調査区のほぼ内部に石組みの溜樹（SX-1）東半部がおさまる状態で検出した。



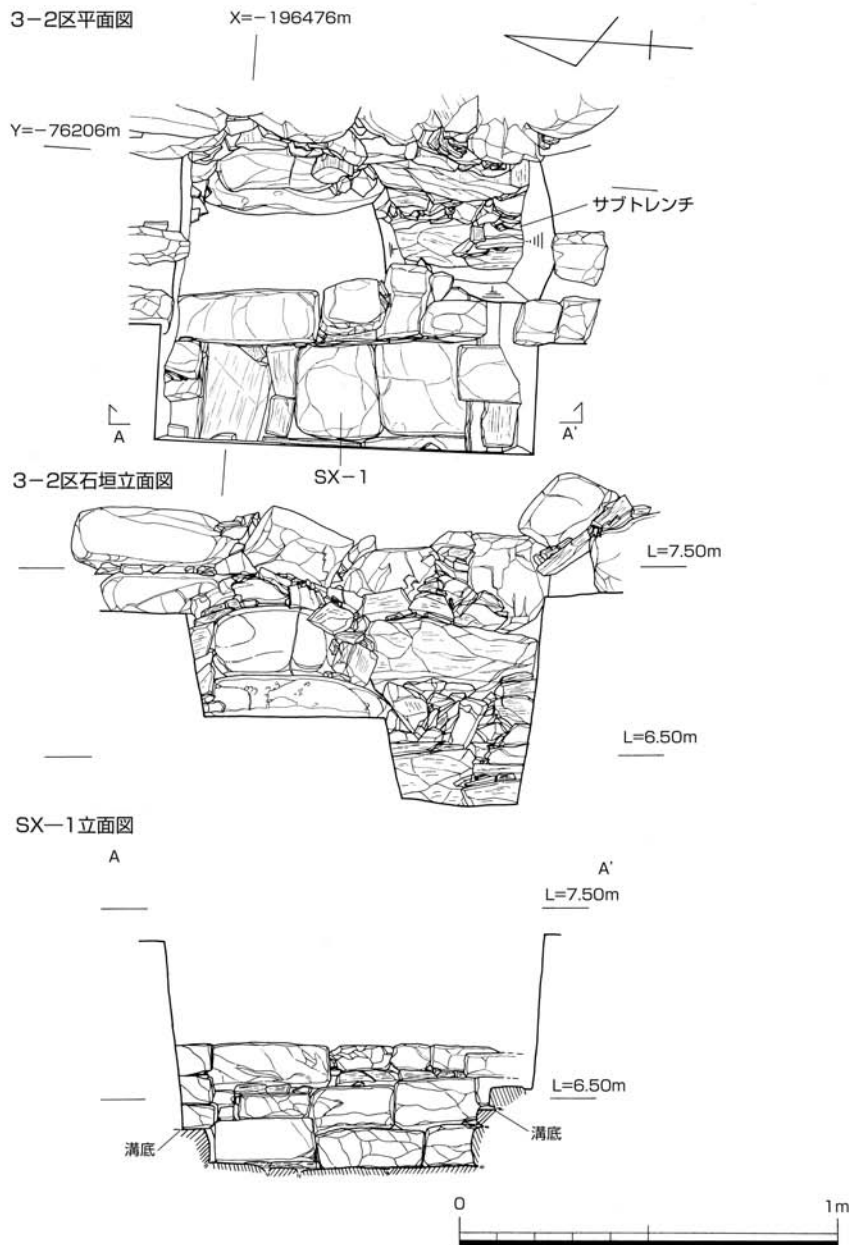
第11図 3-1区遺構実測図

石組溜枡は砂岩の加工石材を使用し、一部に結晶片岩を用いるものである。底石には規模の大きい石材を上面が平坦になるように設置し、その上に側石を約3段分平積みして構築している。規模は東西0.6m以上、南北1.4mで深さは60cmである。底面の標高は、6.1mで、最上部の石材が平坦面を形成し、なおかつ石垣との間に面をもつことから、徳川期の通路面がこの高さ（標高6.8m）であったものと考えられる。また石組溜枡の南北両端には石組溝（SD-1）との連結部分が確認できた。この石組溜枡と石垣との間にサブトレンチを設定し、石垣基底部の状況確認を行ったものの、標高6.2mの深さまで掘削を行ったがこの調査区でも石垣基底部の検出には至っていない。

3-3区（第13図、図版21・22）

3-3区では、調査区の南半部において石組溝（SD-1）を検出した。石組溝の北半部は過去に立てられていたとみられる電信柱の掘削孔により攪乱されていた。石組溝は底石に結晶片岩の加工石材を組み合わせ、側石には比較的厚みのある結晶片岩を3段以上平積みして構築している。石組溝の幅は西壁面に確認できる石材が現存するとすれば40cmとなる。また溝底の標高は6.7mである。また石組溝について第3区を通して考察した結果、その勾配は2.5°であることがわかる。

この調査区は攪乱孔を利用してサブトレンチを設定し、石垣基底部の状況確認を行った。その結果、地表面から2.0m（標高5.4m）の深さで石垣基底部を検出した。しかし、石垣前面の堆積が粗砂層の単一層であったことと翌日の降雨によって壁面が崩落し標高5.9mの深さまでの記録となった。



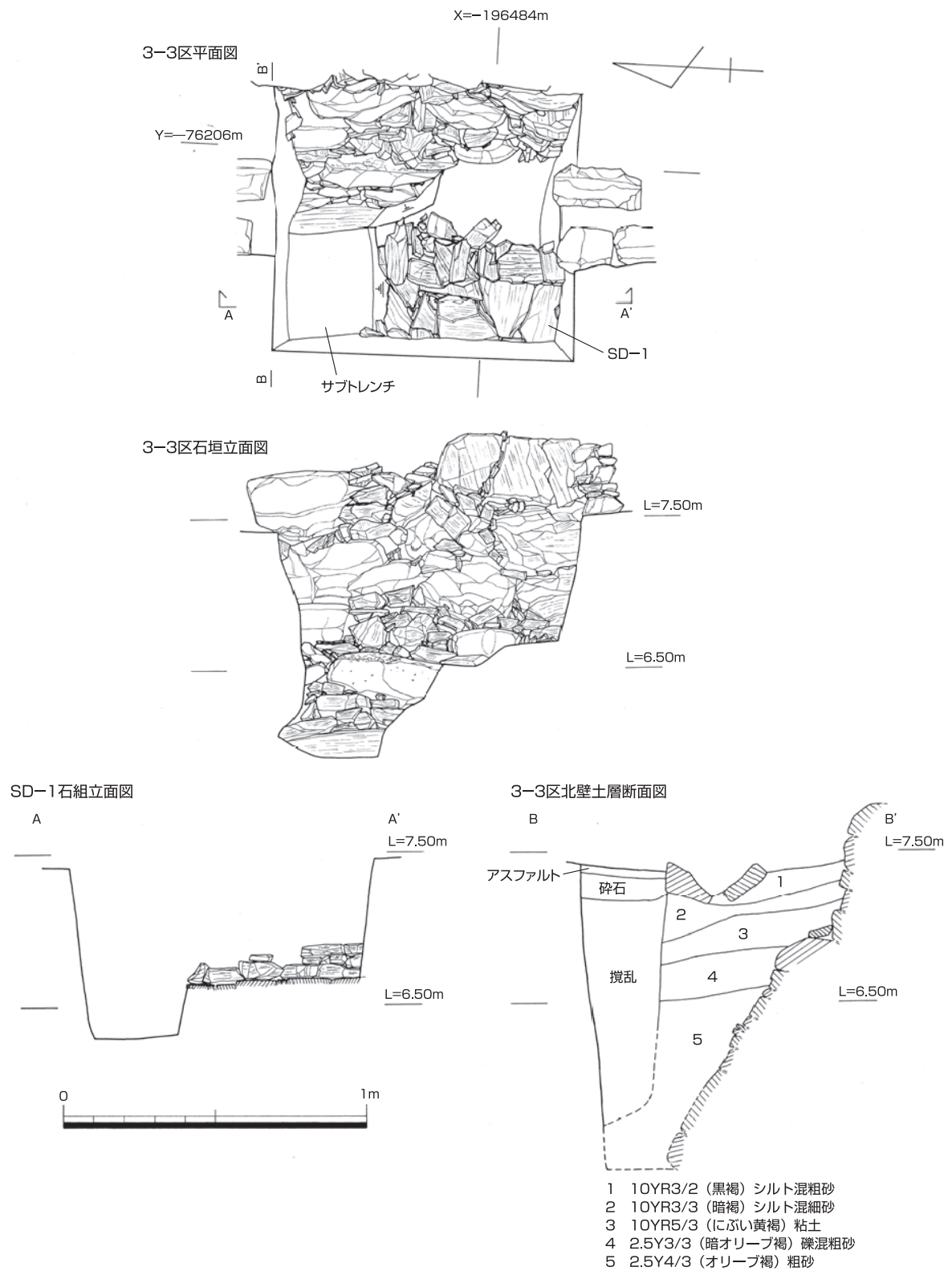
第12図 3-2区遺構実測図

この他、第2・3区を通した櫓台の横断面及び縦断面の作成を行った（第14～17図）。その結果、SV-1・3の横断面による石垣の傾斜角度は $69\sim 70^\circ$ の角度におさまリ、極めて緻密な勾配を持たせていることが判明した。また、櫓台北面のSV-2は中位が張り出した状態に陥っているものの、 73° の勾配で保っているものと考えられる。さらに、第16図B-B'断面図に示した御勘定御門西側東面石垣は、砂岩の切石を用いた打ち込みハギの布積み石垣で 84° の勾配をもち、角度的にも第1・4区で検出した西外堀の石垣勾配に類似する。

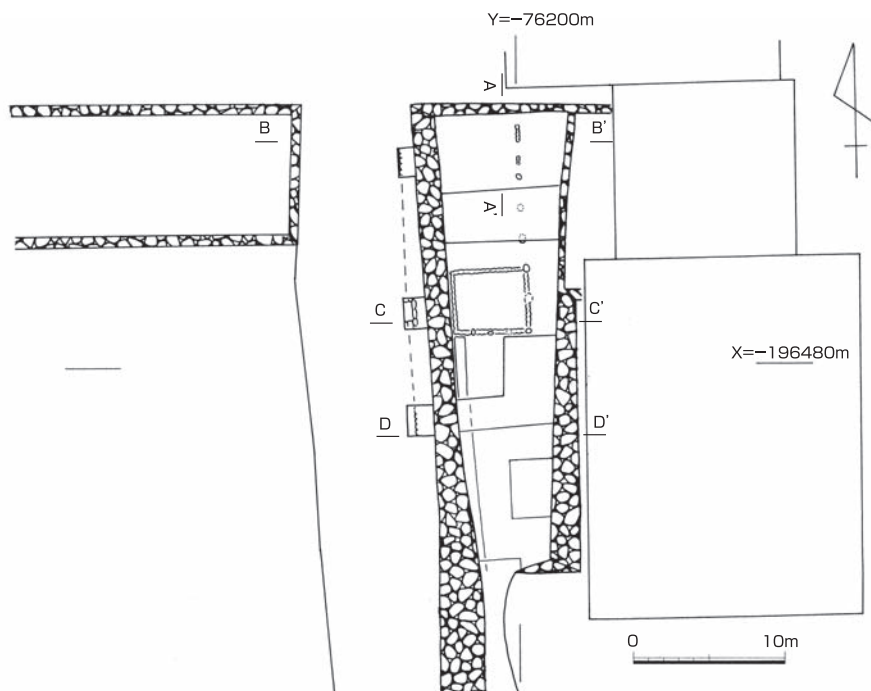
(2) 第31次調査

各調査区において遺構を多数検出した。以下、調査区毎に遺構の概略を説明する。

1-1区と1-2区では、大規模な攪乱を受けており遺構面を検出することはできなかったが、



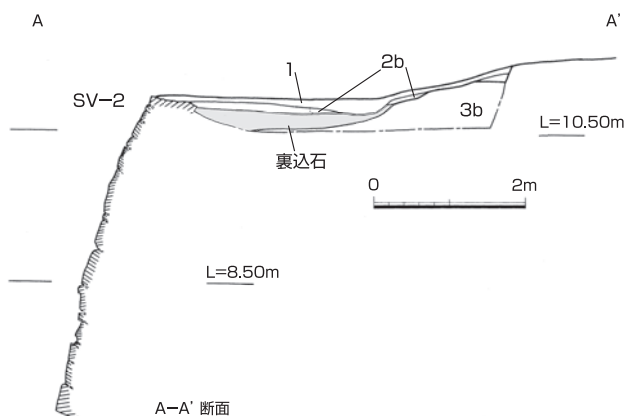
第13図 3-3区遺構実測図



第14図 第30次調査 第2・3区櫓台断面位置図

深掘の結果、西外堀の南側石垣の一部を検出した。

1-1区の花垣は、東西幅3.2mの範囲で2段分を検出したが、標高4.4mより上部を取り外されており、上部堆積の整地土中に取り外されたとみられる花垣石材が散乱していた。花垣面は幅60～70cm、高さ40～50cmの石材を横方向に並べて積んだもので、いわゆる「打ち込みハギ布積み」と呼ばれる花垣の積み方である。石材の奥行きは70～80cmを測り、花垣面に用いた石材は砂岩割石に限られ、石材側面に矢穴がみられるものもある。間詰



A-A' 断面

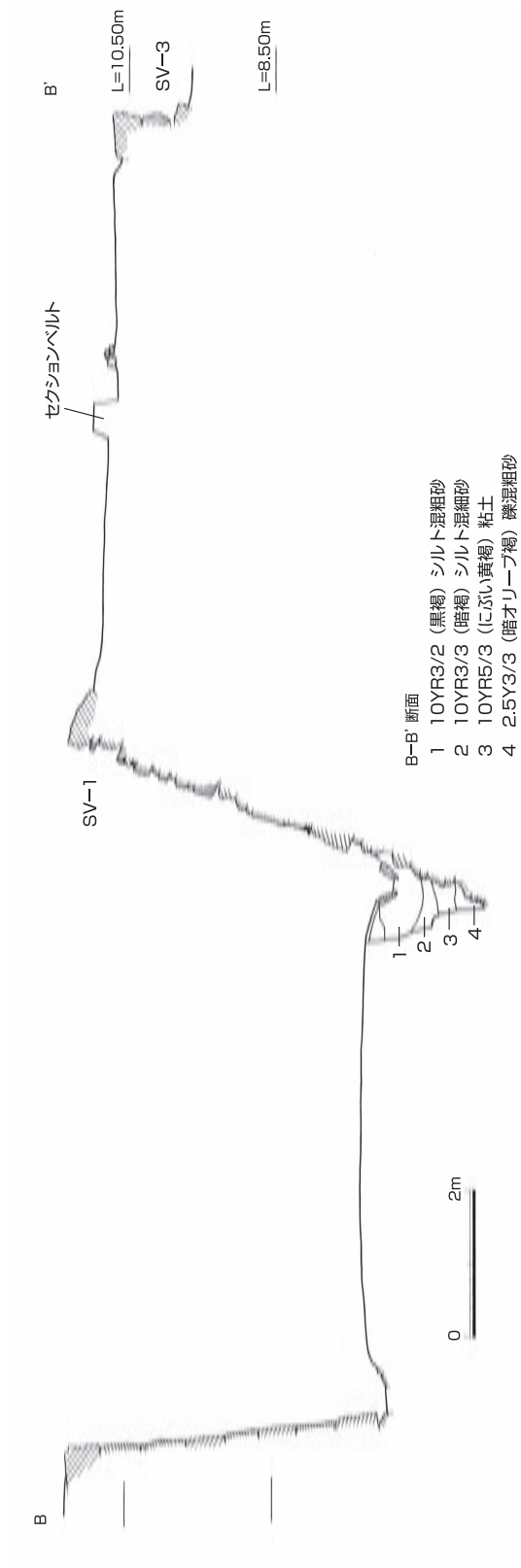
- 1 10YR2/2 (黒褐) 粗砂混シルト
(表土：木根が多い)
- 2b 10YR4/4 (褐) 粗砂混シルト
(礫・瓦を含む、部分的に多く含むところがある)
- 3b 2.5Y3/3 (暗オリーブ褐) 粗砂

第15図 第2・3区櫓台花垣断面図1

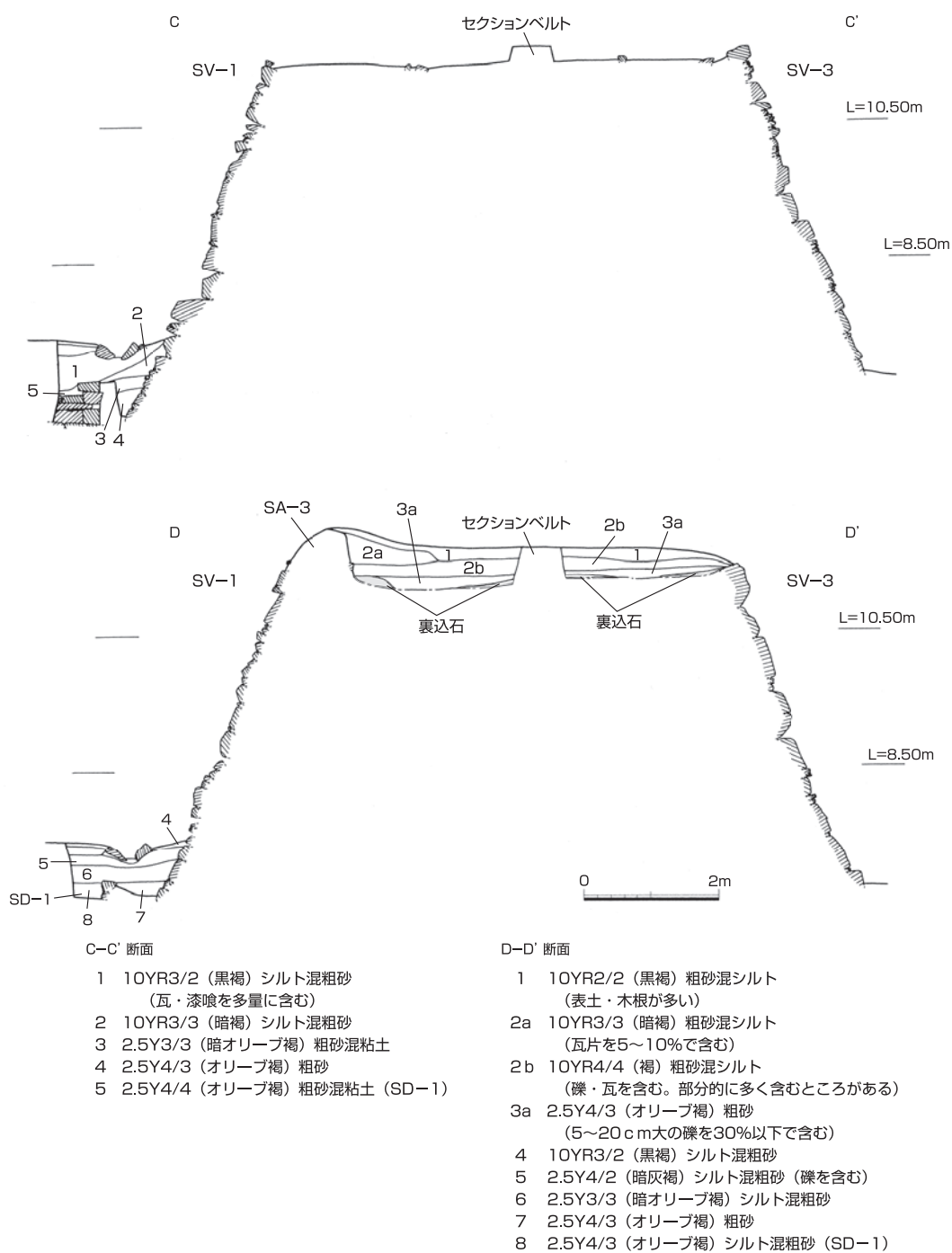
石の主体は砂岩角礫だが、わずかに結晶片岩角礫も混じる。裏込石には砂岩円礫・角礫、結晶片岩角礫がほぼ等量用いられていた (第18図、図版23・24)。

1-2区の花垣は、最上段の標高6.10mを測り、標高3.80mまでの範囲で縦に1列4段分を検出した。花垣面は幅70cm以上、高さ50～70cmで、奥行き90～120cmを測るもので、花垣面に用いた石材は砂岩割石、石材側面に矢穴がみられるものもあり、裏込石に砂岩円礫・角礫、結晶片岩角礫が用いられている点など1-1区検出の花垣と共通している (第19図、図版25・26)。

1-3区では、第4層上面で江戸時代の遺構面を検出した。遺構は、御勘定御門に関する仕切石がある。仕切石は御勘定御門西側東面花垣面に接して設置されており、花垣面に直交する東西方向

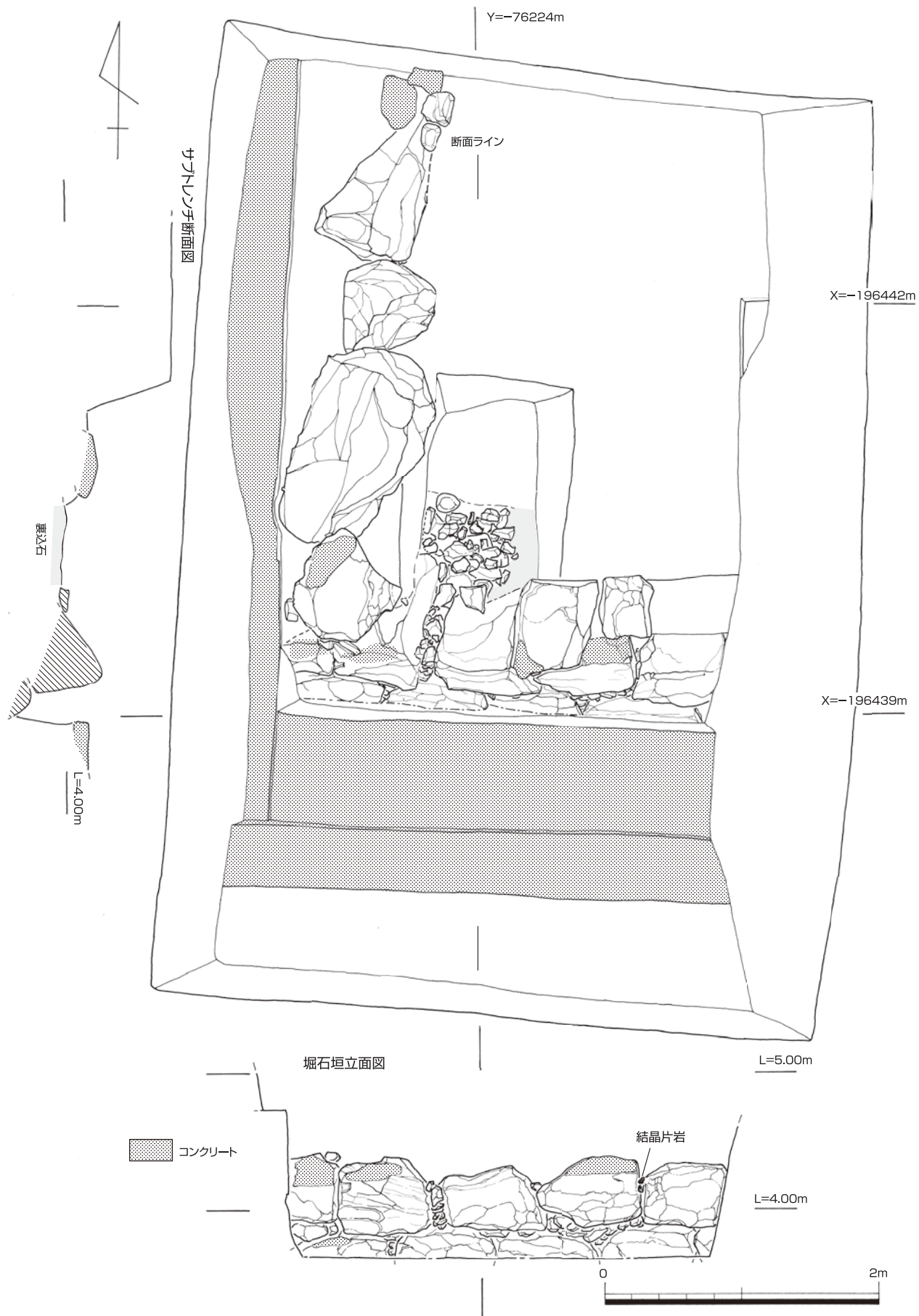


第16図 第2・3区槽台石垣断面図2

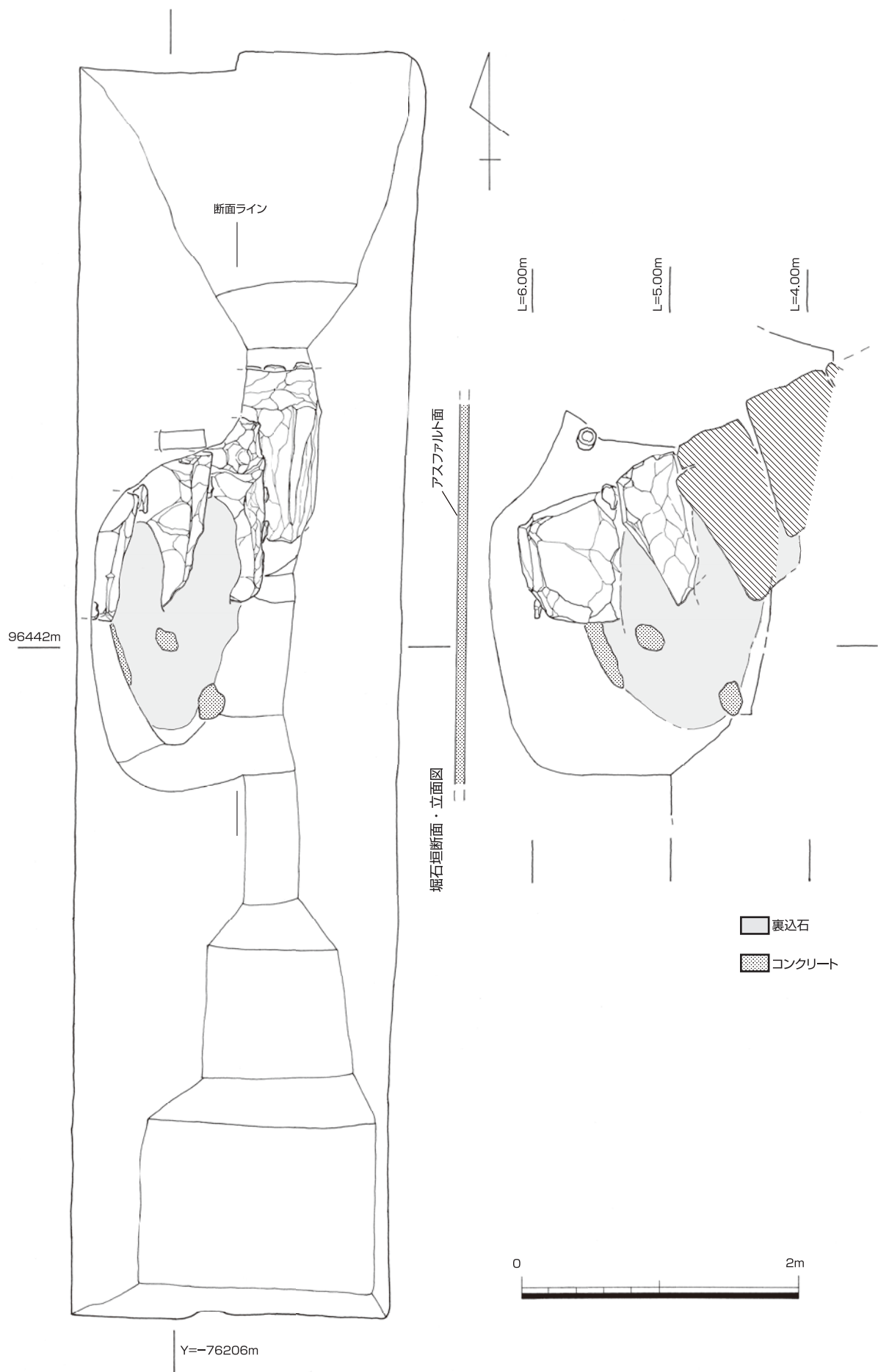


第17図 第2・3区櫓台石垣断面図3

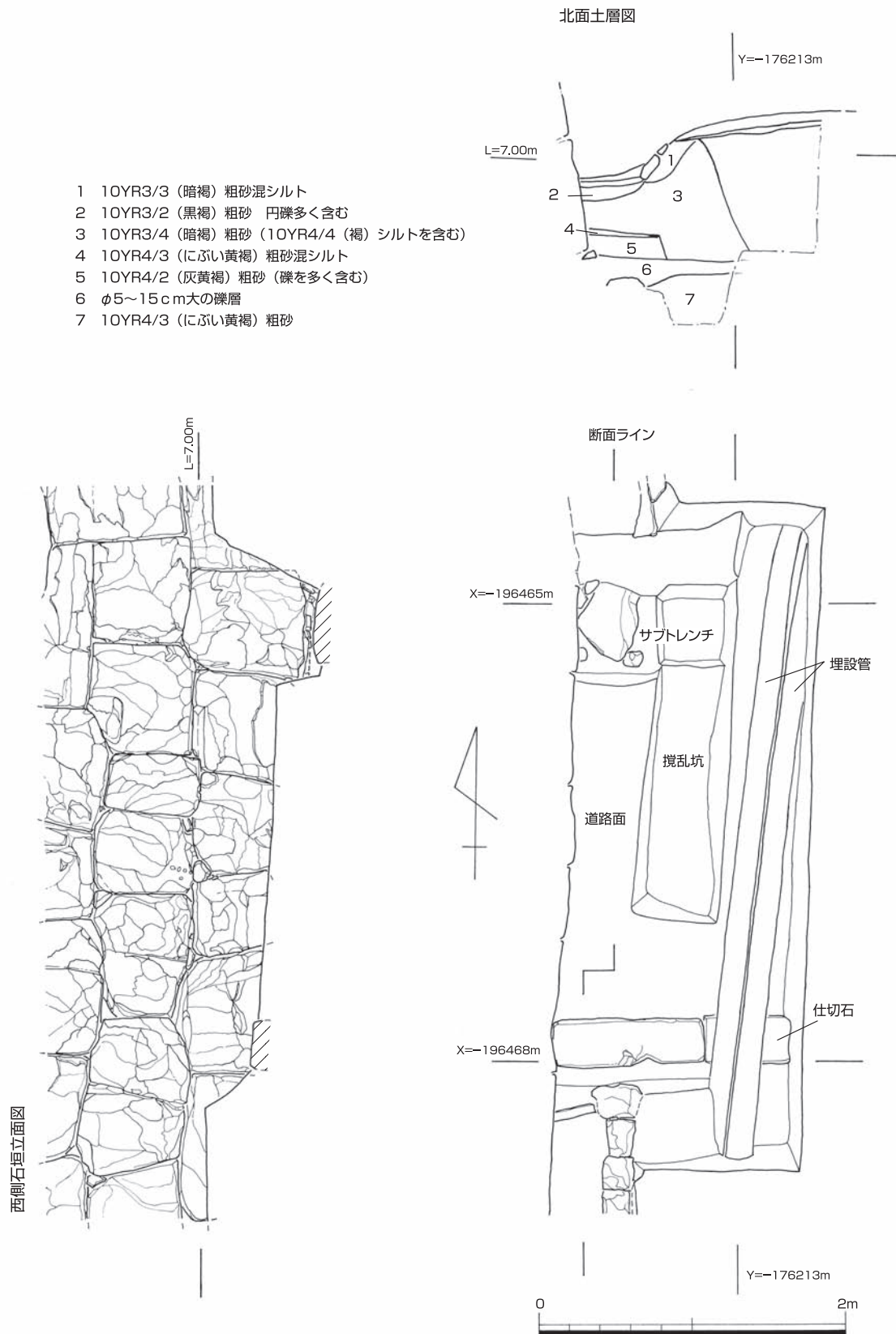
に2石分を検出した。石材には砂岩が用いられており、上面と北面は平滑に加工されたものである。仕切石を挟み南と北で江戸時代の道路面を検出したが、南側は標高6.75m、北側は6.65mを測り、道路の傾斜を緩和する機能を持ったものとみられた。また、御勘定御門西側石垣構築時の整地層などを検出しており、この石垣は標高6.40mから積み上げられたものと考えられ、詳細な時期は不明ながら仕切石や道路面と同時期に築造されたものと考えられる（第20図、図版27・28）。



第18図 1-1区遺構実測図



第19図 1-2区遺構実測図



第20図 1 - 3 区遺構実測図

5. 遺物

(1) 遺物の概要

第30次調査

第30次調査では遺物収納コンテナ約60箱が出土した。

第1区において出土した遺物は、石垣裏込上部及び堀内部とも極めて新しい時期のものが大半であり、他地区に比べ比較的少ない。遺物内容では、比較的新しい時期の瓦片が多い。

第2区の出土遺物について、江戸時代以前の遺物は、土師器、須恵器、瓦器、中世土師器、平瓦、丸瓦が数点ずつ出土しており、他は江戸時代の遺物が主体を占める。

江戸時代では、近世土師器、瀬戸・美濃系陶磁器、肥前系陶磁器、堺焼などの土器類が少量出土した他、平瓦・丸瓦・滴水瓦・棧瓦・鬼瓦・鯰瓦・軒隅瓦・面戸瓦・輪違瓦・磚瓦などの瓦類が大量に出土した。また、土人形などの土製品、碁石・面子などの石製品、鉄製鏝・角釘・刀子などの金属製品が出土している。明治時代以降のものでは、陶磁器類、銅銭、ガラス瓶・面子などが少量出土した。江戸時代以前の遺物は、整地土に混入していたものが運ばれてきたと考えられ、土師器壺・須恵器甕・瓦器碗・中世土師器皿などと器種も限定されている。

瓦については、浅野家家紋「違鷹羽紋」の瓦当文様の滴水瓦が10点以上出土しており、このタイプのものが最も集中して出土した調査地であるといえる。また、その他の滴水瓦には瓦当文様に菊や唐草を施したものも出土している。鯰瓦については、各部分が出土しており櫓台上に規模の大きい瓦葺き建物が建てられていたことを示唆するものと考えられる。

第3区では徳川期に構築された石組溝（SD-1）及び石組溜枡（SX-1）の内部から江戸時代後期の陶磁器が一定量出土した他、櫓台上部からの崩落土に多量の瓦を中心とした遺物が含まれている。特に3-2区からは、違鷹羽紋滴水瓦や飾瓦（桃）が出土した。また3-2・3-3区には崩落土に漆喰が含まれる傾向があり、石垣上部の土堀（SA-3）に使用されていた可能性を示唆するものである。

第4区では大規模に掘削された攪乱2内部に多量の瓦片が含まれていた。出土した瓦には、江戸時代でも比較的時期の古いものが含まれ、古いものの特徴として二次焼成を受けているものが多い。また、第2a層から出土したものに17世紀前半代におさまると考えられる肥前系磁器染付碗がある。

第31次調査

第31次調査の遺物は、中世土師器、輸入陶磁器、近世土師器、近世土師質・瓦質土器、近世陶磁器（備前焼、瀬戸・美濃系、肥前系、京・信楽系、堺焼、大谷焼など）、近代・現代陶磁器、瓦、石製品、金属製品など遺物収納コンテナ12箱が出土した。

遺跡は近世城郭であるが、第1区では江戸時代以前の時期の遺物として、中国製染付碗・青磁碗、朝鮮製船徳利などの輸入陶磁器や土師器皿など室町時代のものが少量ながら出土している。これらの遺物の出土は現和歌山城吹上口周辺に室町時代の遺構が存在していた可能性を示唆するものと考えられる。

以下、江戸時代の出土遺物の概要を述べる。

近世土師器は、釜と焙烙がある。近世の瓦質土器は、瓦質火鉢がある。

近世陶磁器については、瀬戸・美濃系では褐釉天目茶碗、灰釉植木鉢、肥前系では唐津碗・鉢・染付丸碗などの他、備前焼灯明皿、堺焼播鉢、大谷焼褐釉大甕・徳利、丹波焼褐釉壺などが出土している。

瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、滴水瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦などの他、道具瓦として塙瓦、鬼瓦などがあり、出土量の主体を占める。

石製品は、砂岩砥石など、金属製品は鉄製の鍔・角釘・鑿・刀子などがあり、その他の遺物として、漆喰、壁土などが出土している。

(2) 土器 (第21図、図版29)

土器は、土師器壺 (1)、瓦器碗 (2・3)、土師器皿 (4・5)・塙 (6) がある。

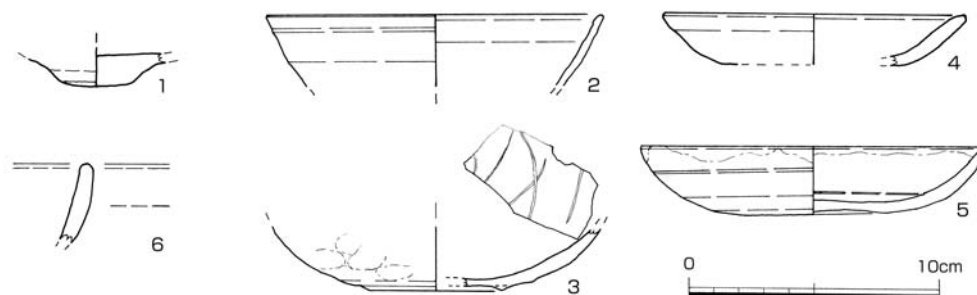
1は古墳時代の土師器壺の底部である。黄褐色のもので底径2.8cmを測る。2・3は瓦器碗の口縁部と底部である。2は口径13.3cmを測るもので、口縁部外面にナデによる段が2単位みられる。3は外底面に退化して紐状になった貼付高台をもつもので、高台径5.2cmを測る。内底面には連結輪状文とみられる暗文が施されている。これら2・3は鎌倉時代のもと考えられる。4・5は土師器皿である。4は明黄褐色のもので、口径12.0cm、器高2.0cmを測る。室町時代のものである。5は暗褐色で完形のものである。口径13.6cm、器高2.7cmを測る。口縁端部に炭化物が付着していることから灯明皿に使用されたものとみられる。江戸時代のものである。6は土師器塙で体部外面に平行叩き痕がみられる。江戸時代初頭のものである。

以上の土器は全て第30次調査の出土で、1・4は2-3区第1層、2は2-2区第2'層、3は2-2区第1層、5は2-3区第2層、6は2-1区第2層から出土した。

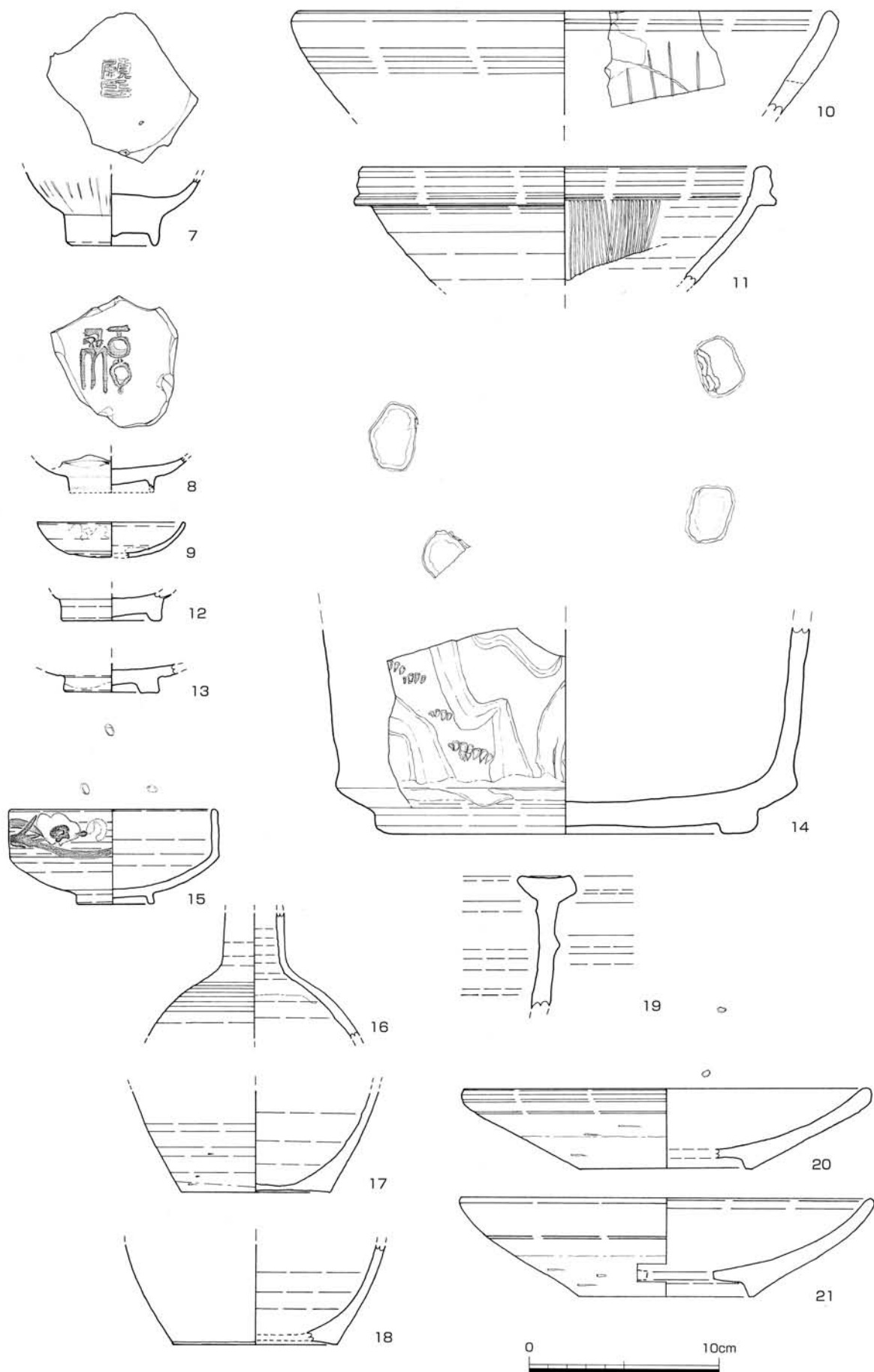
(3) 陶磁器 (第22・23図、図版29~31)

陶磁器には輸入陶磁器と国産陶磁器がある。輸入陶磁器は中国製の青磁 (7) と染付 (8) がある。国産陶磁器は、陶器では備前焼 (9)、丹波焼 (10)、堺焼 (11)、瀬戸・美濃系 (12~14)、京・信楽系 (15)、大谷焼 (16~19)、産地不明品 (20・21)、磁器は肥前系 (22~27) のものがある。

7は中国製青磁碗である。龍泉窯系のもので、外面体部に線描蓮弁文、内底面に「顧氏」銘のスタンプを施している。施釉部分は緑灰色で、高台内は露胎となっており、高台径4.7cmを測る。室町



第21図 遺物実測図 1



第22図 遺物実測図 2

時代のものである。8は中国製染付碗で、高台径4.4cmを測る。内底面に呉須で「福」を、外面体部には花文を描く。室町時代末期から江戸時代初頭のものである。

9は備前焼の灯明皿である。口径7.8cm。器高1.8cmを測る。黒褐色のもので、口縁部に炭化物が付着している。江戸時代のものであるが、和歌山城下町では出土例が少ない。10は丹波焼播鉢である。赤褐色のもので、播り目は1本単位で施されている。江戸時代初頭のものである。11は堺焼播鉢である。暗赤褐色のもので、播り目は1単位11条線の櫛状原体で密に施されている。口径22.2cm、残存器高6.2cmを測る。江戸時代後期のものである。

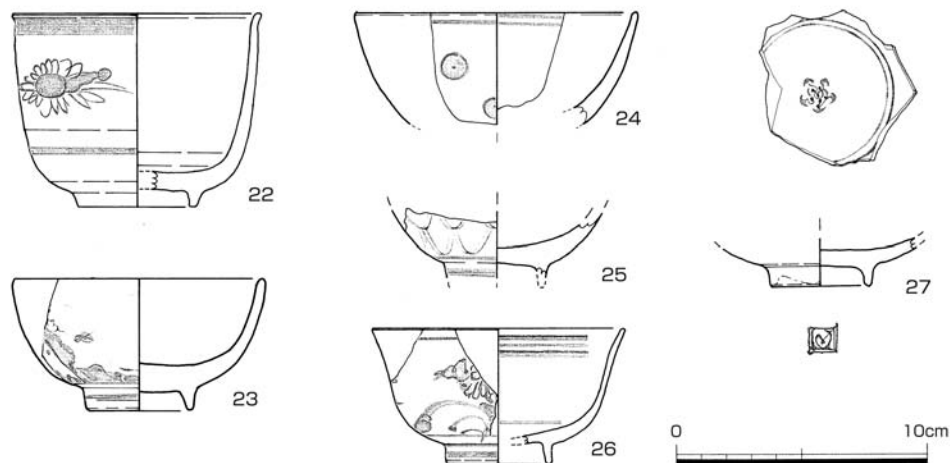
12～14は瀬戸・美濃系陶器である。12は天目茶碗で、高台径5.2cmを測る。内面には黒褐色の釉が掛かり、高台部は露胎である。13は黒褐釉碗で、高台径5.0cmを測る。全面施釉した後に高台接地面の釉を削り取っている。14は灰釉大鉢である。高台を含む底部を除き施釉しており、外面体部には鑿と櫛状工具による文様を施している。施釉部は緑黄色で、高台径20.0cm、残存高10.7cmを測る。内面底部に目跡があり、8単位に復元できる。目跡は高台接地面にも同様の痕跡が残る。

15は京・信楽系陶器の半筒形碗である。口径10.5cm、器高5.0cm、高台径4.0cmを測るもので、高台の周囲を除き施釉しており、外面体部には花文を描く。内底面には目跡が3カ所みられる。

16～19は大谷焼である。16～18は褐釉徳利で、内面肩部から外面体部下端まで鉄釉を施している。施釉部は暗茶褐色、露胎部は明赤褐色で、内面は轆轤巻上げ痕、外底面は篋削り痕がみられる。17は底径7.8cm、18は底径8.7cmを測る。19は大型甕の口縁部である。全面に施釉するもので、施釉部は暗茶褐色、胎土は明赤褐色で、口縁端部を肥厚させ上端部に幅3.1cmの面を施している。

20・21は産地不明の施釉陶器皿である。内面から外面体部下半まで透明釉を施したもので、20の内底面には目跡が残る。20は口径21.6cm、器高4.2cm、高台径9.0cm、21は口径21.8cm、器高5.2cm、高台径9.2cmを測る。21の底部中央には二次的な円形打ち欠きがみられることから、植木鉢に転用されたものと考えられる。

22～27は肥前系磁器である。22～26は染付で、22が筒形碗、23～25は丸碗、26は端反碗である。外面に呉須で主文様を描くもので、22は花文、23・26は草花文、24は円形文、25は二重網目文が描かれる。22は口径9.8cm、器高7.6cm、高台径5.2cm、23は口径10.0cm、器高5.2cm、高台径4.3cm、24は口径11.2cm、26は口径10.0cm、器高5.4cm、高台径4.0cmを測る。



第23図 遺物実測図 3

27は青磁染付椀である。内底面には五弁花文、外底面高台内には退化した渦「福」が呉須で描かれ、外面体部に青磁釉を施している。高台径4.0cm、残存高1.9cmを測る。

以上の陶磁器のうち、第31次調査のものは7・9で、1－2区近代以降の整地土からの出土である。その他は第30次調査から出土したもので、8は4区第2層、10・24は3－2区第1層、11は2－2区第2'層、12・19・23は2－3区第1層、13・17・18は3－1区第1層、14は3－2区第3層、15は2－3区第2層、16・25・26は3－3区第3層、20・21は3－2区石組溜枡内、22は4区SV－9裏込上部、27は近代以降の整地土からの出土である。

(4) 瓦

瓦は遺物のなかでも最も多量に出土した。第30次調査においては軒丸瓦、軒平瓦、滴水瓦、軒棧瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、道具瓦では鯨瓦・鬼瓦・棟込瓦（輪違瓦・面戸瓦）・熨斗瓦・海鼠塀瓦・塀瓦・板塀瓦などが出土し、第31次調査では軒丸瓦、軒平瓦、滴水瓦、軒棧瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、道具瓦としては鬼瓦・雁振瓦・棟込瓦（輪違瓦・面戸瓦）・塀瓦などが出土した。

軒丸瓦（第24・25図、図版32・33）

28～43は軒丸瓦である。出土した軒丸瓦の文様は全て三つ巴文である。

28は巴の尾が接しないが、巴の頭から尾が細く伸びるものである。直径14.9cm、厚さ2.1cm、珠文は径が0.6cmと小さく18個である。

29～32は巴の尾が接し、圏線状を呈する。直径は16.0～17.5cm、厚さ2.0～2.5cmを測り、珠文は16個で、直径0.75～1.1cmを測る。30・32の瓦当部には離れ砂がみられる。

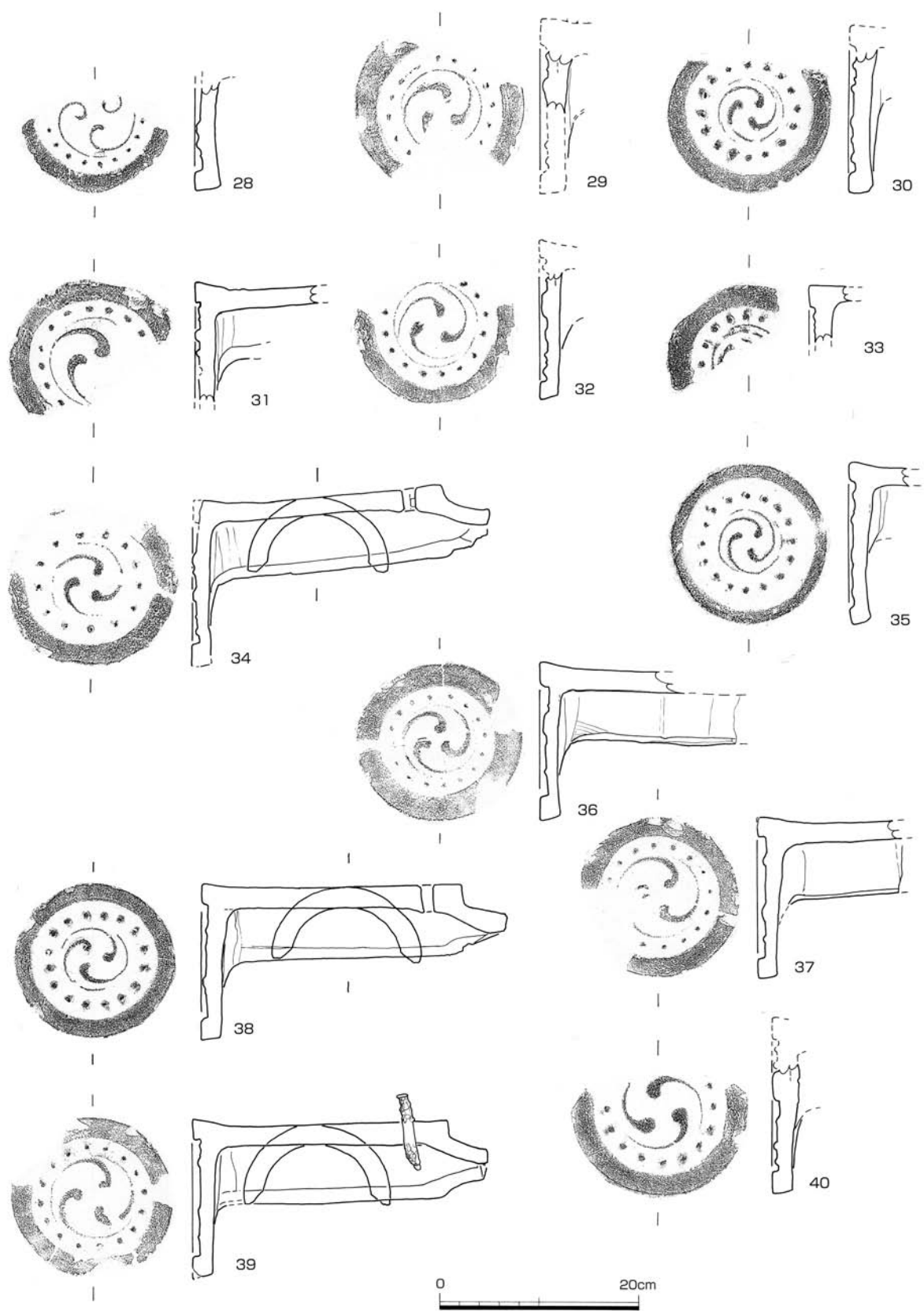
33～36は巴の尾が接しないが長く伸び、巴頭が尖り気味で、くびれがないタイプである。直径は15.8～16.6cm、厚さ2.0～2.5cmを測り、珠文は13個と16個のものがあ、直径0.9～1.2cmを測る。33・35の瓦当部には離れ砂がみられ、34の丸瓦部凹面は吊紐痕、36にはコビキB技法を観察することができる。

37～40は巴の尾が接しない、巴頭が丸く、明瞭にくびれがあるタイプである。直径は15.7～17.6cm、厚さ2.0～2.5cmを測り、珠文は16個で直径0.9～1.1cmを測る。37は瓦当部に離れ砂、丸瓦部凹面にはコビキB技法・吊紐痕がみられる。39は釘穴に釘が配された状態である。40は右巻の巴文を配する。

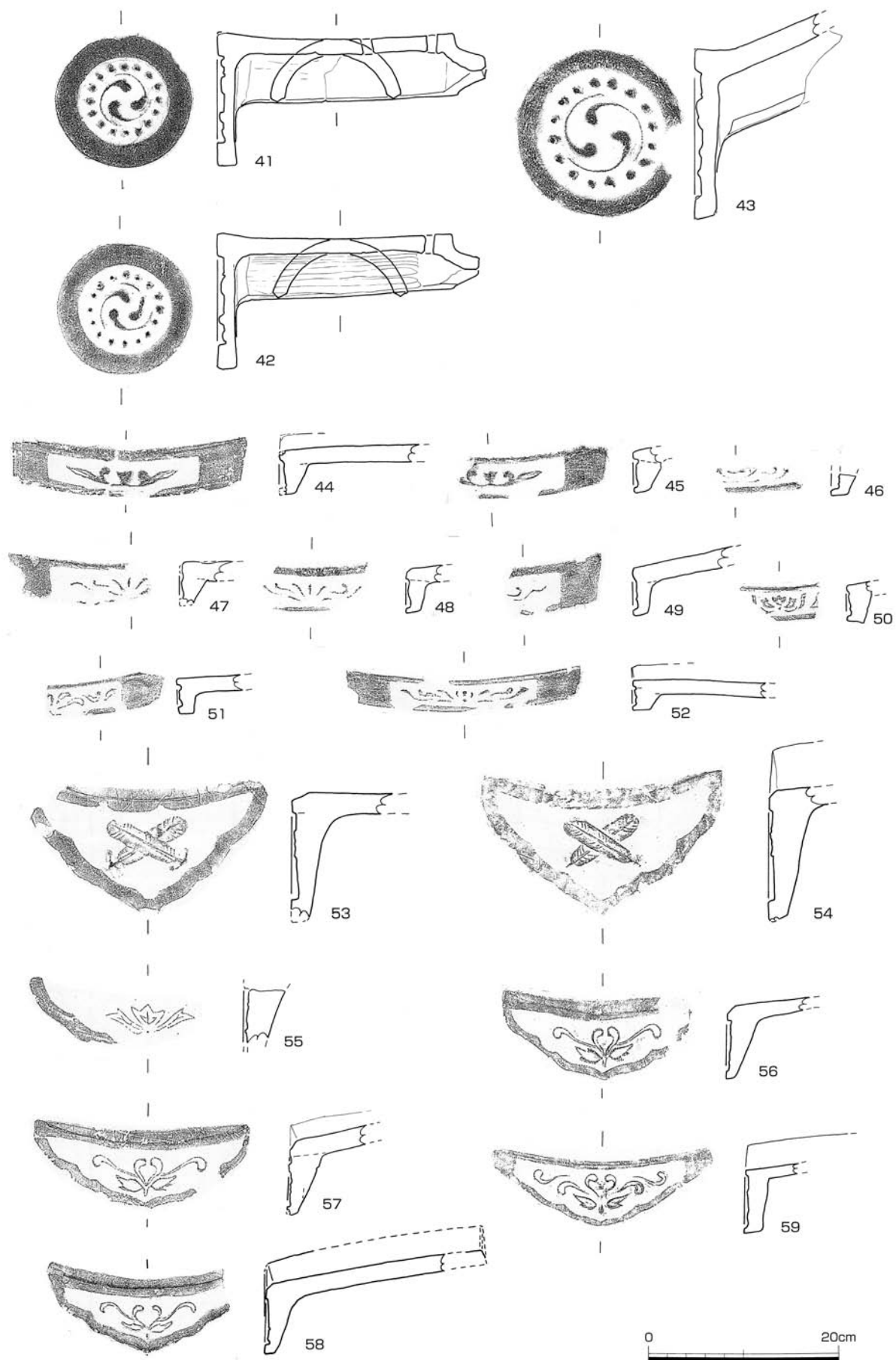
41・42は巴の尾が互いに接しないもので、器壁にキラコがみられ、丸瓦凹面に叩き痕がみられる。41は直径14.0×14.5cmとやや歪である。厚さ1.8cm、全長28.1cm、珠文は16個で直径1.1cmを測る。42は直径14.1cmとやや歪である。厚さ1.9cm、全長27.5cm、珠文16個で直径1.0cmを測る。

43は右巻の巴文を配する。滴水瓦と組み合わせるもので、取り付け角度は115°である。直径17.7cm、厚さ2.5cm、残存長13.5cm、珠文は16個で直径1.1cmを測る。丸瓦凹面にはコビキBが残る。

28～32は江戸時代初頭、33～40・43は前期、41・42は中期以降のものとみられる。28・32・33は2－3区第2層、29は3－2区第1層、30は2－1区第2層、31・34～39は2－2区第1層、40は3－1区第3層、41～43は2－2区第2'層からの出土である。



第24図 遺物実測図 4



第25図 遺物実測図 5

軒平瓦・滴水瓦（第25図、図版34・35）

44～52は軒平瓦である。文様は数種類みられる。破片が多く、全体に規格の分かるものは少ない。44～51は保存状態がやや不良であるが、瓦当上部にヘラによる面取りが施され、周縁上部厚0.5～1.1cm、脇区が4.5～4.8cmを測る。規格や文様などから江戸時代初期のものとみられる。52の中心飾りは花卉で、唐草や子葉の端部は肉厚で丸くおさめる。規格や文様などから江戸時代中期以降のものとみられる。出土数に多く見られるのはこの文様をもつものである。44は2－2区第1層、45は第4区第1層、46は3区表採、47～49は2－3区第2層、50は3－2区第1層、51は3－1区第1層、52は3－2区第3層からの出土である。

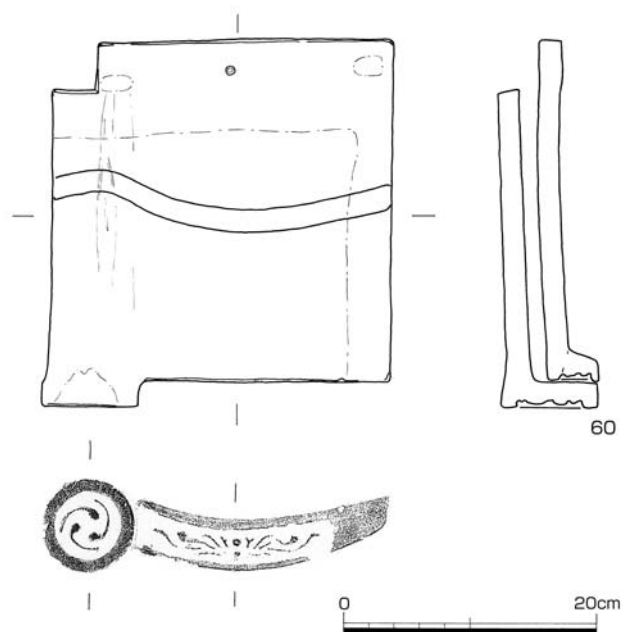
53～59は滴水瓦である。瓦当文様は3種類あり、53・54が浅野氏の家紋である「違鷹羽紋」、55が蓮華文、56～59が唐草文である。取り付け角度は100～110°である。出土の内訳は第30次調査において、第2区で「違鷹羽紋」8点、蓮華文1点、唐草文2点、不明2点、第3区で「違鷹羽紋」1点、唐草文2点、不明3点、第4区で「違鷹羽紋」1点である。また、御勘定御門西櫓上において唐草文1点（56）を表採している。第31次調査においては、第1区で唐草文2点がある。残念ながら遺構出土のものは無く大半が包含層や攪乱からのものである。53は3－2区第1層、54・59は2－2区第2層、55は2－2区第1層、57・58は第31次調査1－3区第1層からの出土である。

軒棧瓦（第26図、図版35）

60は全長28.9cm、厚さ1.7cmを測り、瓦当面にキラコを観察することができる。第2－2区第2層出土である。

丸瓦・平瓦（第27図、図版35・36）

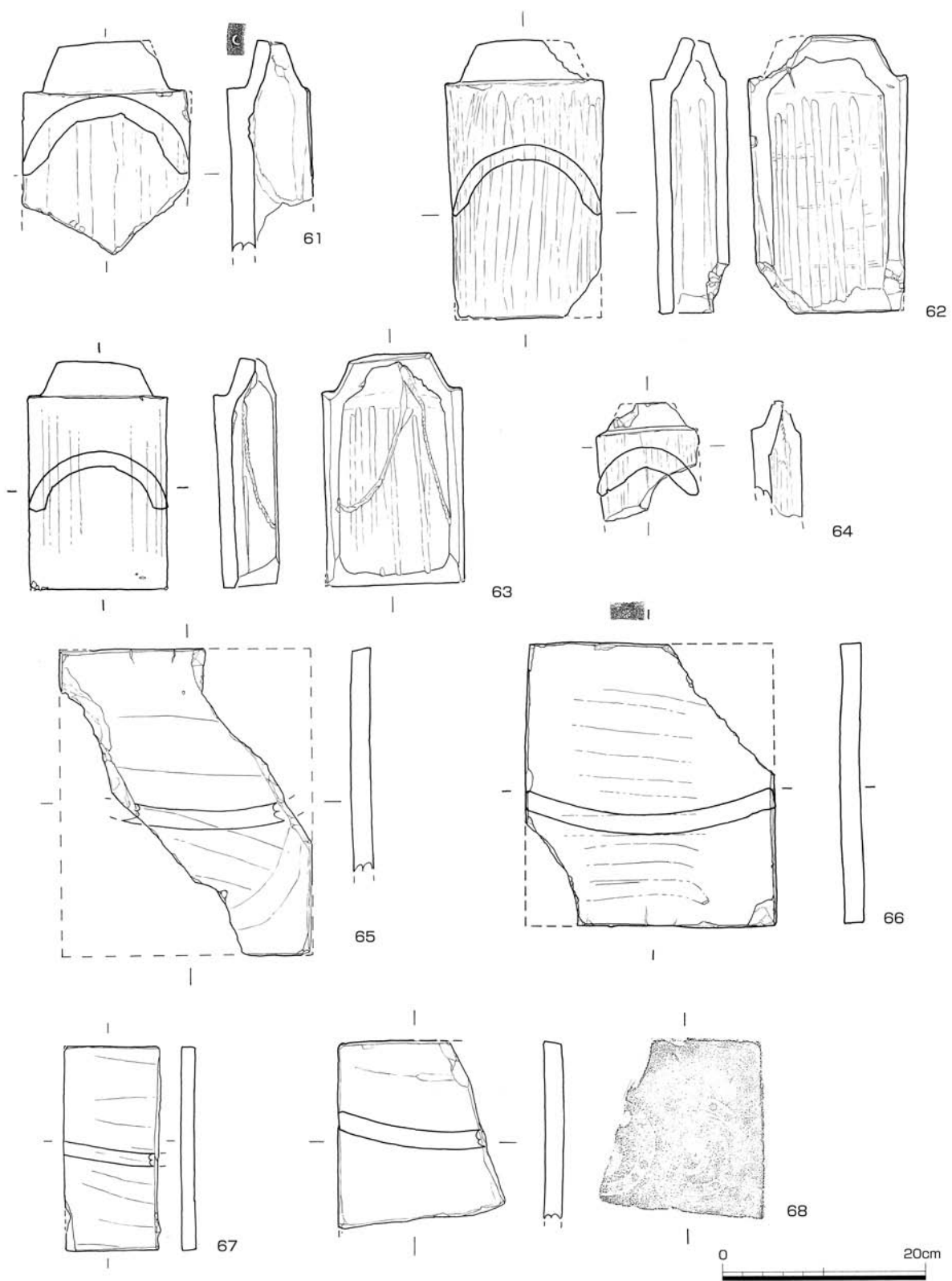
61～64は丸瓦である。61は幅16.4cm、高さ8.0cm、厚さ2.2cmを測る。凹面には吊紐痕が残る。玉縁部に「三日月」状の刻印が施されている。62は幅14.5cm、高さ15.6cm、厚さ1.4cm、全長27.2cmを測る。凹面には吊紐痕と叩き痕が残る。63は広端幅14.0cm、狭端幅13.6cm、高さ6.3cm、厚さ1.5cm、全長22.7cmを測る。64は幅9.9cm、高さ4.8cm、厚さ1.5cm、残存長11.5cmを測る。61は2－3区第



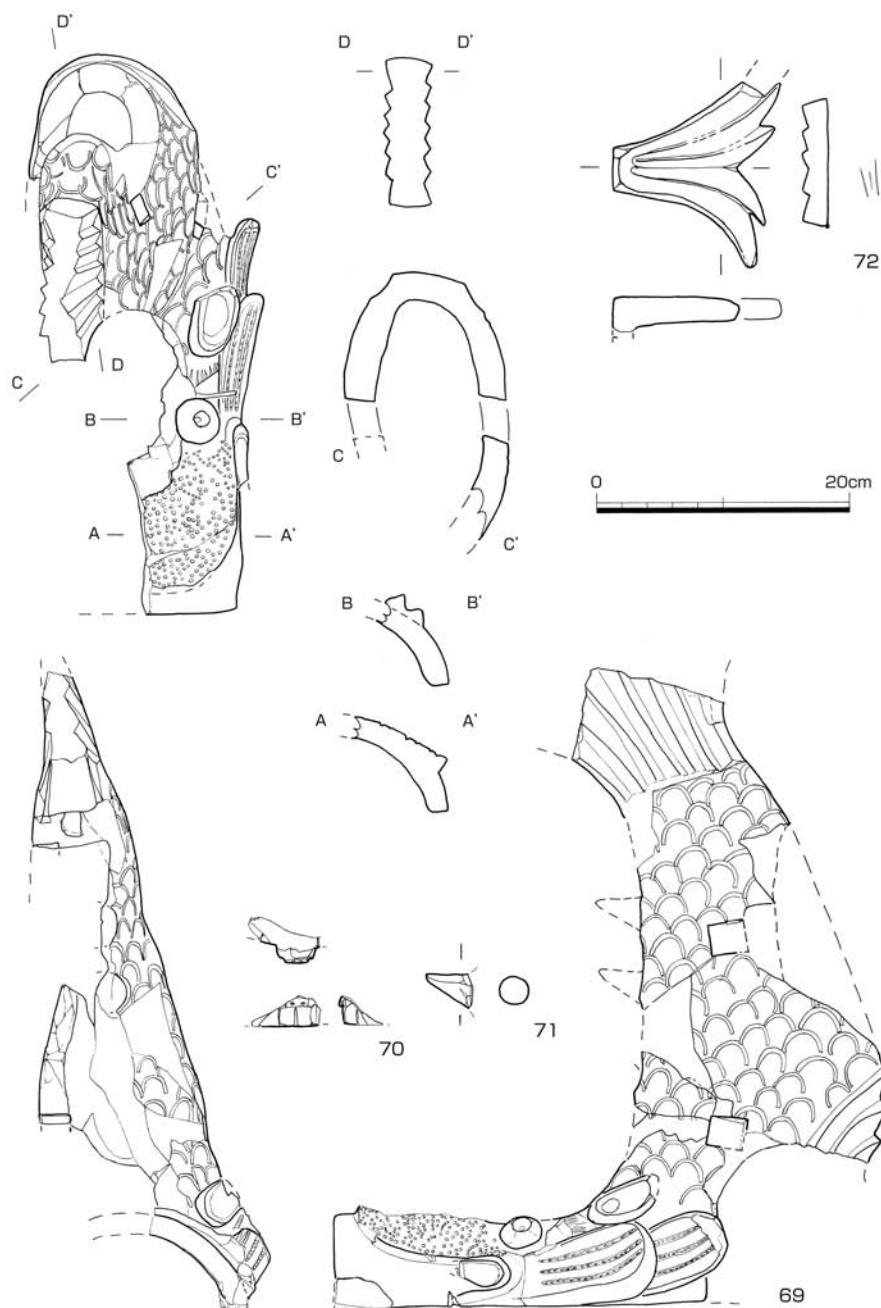
第26図 遺物実測図 6

2層、62は2－2区第1層、63は2－2区第2層、64は3－3区第2層出土である。

65～68は平瓦である。65は厚さ1.9cm、復元長30.0cmを測る。66は広端幅21.8cm、狭端幅23.3cm、厚さ2.0cm、全長28.7cmを測る。また「8弁菊花」の刻印が施されている。67は厚さ1.8cm、全長26.8cmを測る。68は厚さ2.0cm、残存長18.5cmを測るもので、凸面には巴文のスタンプが薄く押印されており、希有な例である。65は2－1区第1層、66は2－1区第2層、67・68は2－3区第2層からの出土である。



第27図 遺物実測図 7

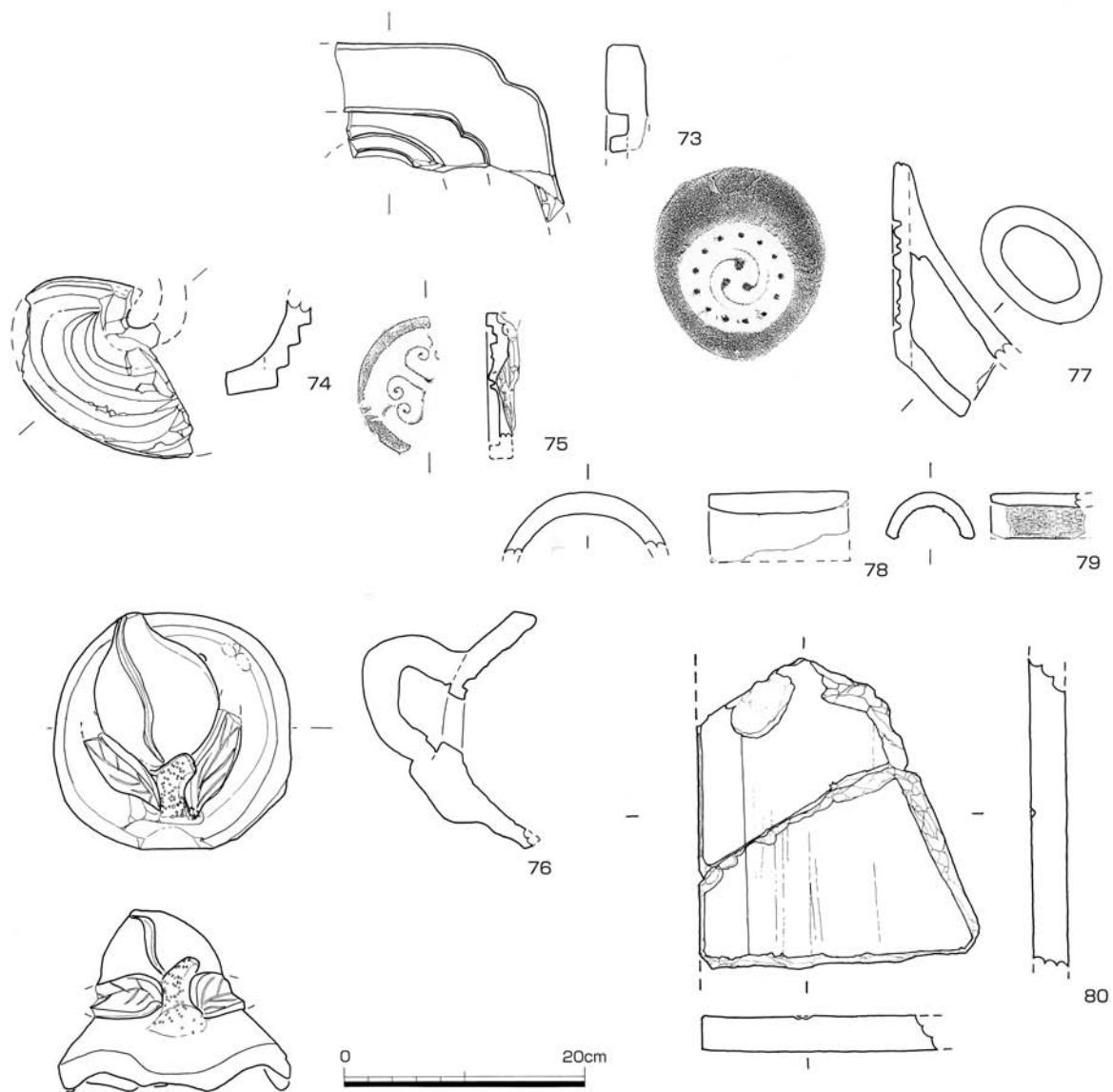


第28図 遺物実測図 8

道具瓦（第28・29図、図版36～38）

図に示した道具瓦は鯢瓦、鬼瓦、留蓋瓦、鳥伏間瓦、輪違い瓦、塼瓦がある（69～80）。

69～72は鯢瓦である。69は尾部の先端を欠損しているが、和歌山城内の発掘調査で全体像が判明した初例である。体部は中空で、断面は楕円形を呈する。体部全体は半裁竹管状工具を用いてスタンプ状に鱗を施文している。尾鰭は扇形に大きく開く形状とみられる。分割成形で、顔、目、眉、牙、顎髭、耳に接合痕がみられる。また尾鰭はソケット状に上部から挿入し、体部上部と接合するものである。体部は10カ所に輪積みの痕跡がみられる。鰭は差し込んでいたとみられ、体部片面に2カ所の長方形の透かしがある。顔には2～4 mm の円孔が不規則に数多く配されている。蛇腹は



第29図 遺物実測図 9

3段確認できる。内面はナデ調整である。残存高50.6cm、復元最大幅23cm、厚さ1.7~2.0cmを測る。70は鼻と口（前歯）の部分である。残存高2.4cm、残存幅3.4cmである。鼻の孔は3mm、歯1本は高さ0.5cm、幅1.4cmを測る。71は棘状突起部である。腹部か背部のどちらかに付くものである。残存長4.8cmを測り、断面は円形である。72は鰭部である。裏面には線刻で「三」と記されている。全長13.3cm、厚さ2.0cmを測る。身の部分と組み合う柄部分は欠損しているが、径7mmの孔が観察できることから、穴に針金状のものを通して固定したものと考えられる。第2-2区第1層からの出土である。鰭部はこの他に裏面に線刻のないもの（図版37-a）と線刻で「二」と記されているもの（図版37-b）が出土している。これらの鰭はどの箇所を組み合うのか不明であるが、裏面の線刻数字はそれを指示したものと考えられる。69~71は2-2区第1層、72は2-2区攪乱3出土である。

73~75は鬼瓦である。これらは別個体のものであるが、同型の葵紋鬼瓦のパーツとみられる。

73は頭部で、74は足部である。75は三ツ葉葵紋部分で復元径12.0cm、厚さ1.0cmを測る。裏面は欠損しているが取手があったとみられる。76は桃型の留蓋瓦である。葉の先端を欠損しているが、ほ

ほぼ完形である。葉脈は篋で丁寧に表現されている。器高15cm、幅19.3×19.6cm、厚さ2.6cmを測る。
77は鳥伏間瓦である。瓦当文様は左巻きの三つ巴文である。直径16.2×14.2cm、厚さ1.4cm、残存長10.8cm、珠文は13個で直径0.8cmを測る。

78・79は輪違い瓦である。78は全長11.6cm、厚さ1.8cm、幅13.2cmを測る。79は残存長7.8cm、厚さ1.5cm、幅8.0cmを測る

80は塼瓦である。残存長26.0、残存幅23.5cm、厚さ3.0cmを測るものである。

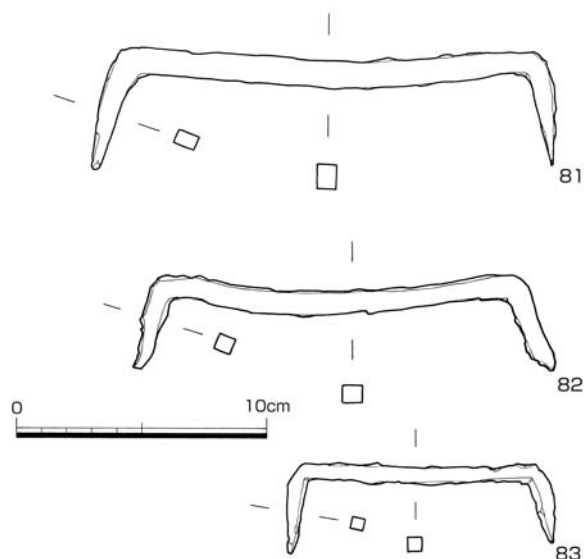
その他、丸瓦や平瓦に「月」、「菊」、「U」字状の刻印をもつ瓦がみられた。これらの刻印は浅野氏の家紋である「違鷹羽紋」の滴水瓦にもみられることから、刻印のある瓦は江戸時代初頭のものと考えられる。73は2-2区表採、74は2-2区攪乱3、75は2-3区第2層、76・78は3-2区第1層、77・78は2-2区第2'層、79は2-3区第1層出土である。

(5) 金属製品 (第30図、図版38)

鉄製の銚 (81~83) が3点と銭貨 (c) 1点がある。鉄製銚は全て暗赤褐色で断面が方形のもので、3点共完形であるがサイズを異とするものである。81は長さ18.3cm、幅4.8cm、厚さ0.8cm、重量104.1g、82は長さ16.7cm、幅3.7cm、厚さ0.8cm、重量64.0g、83は長さ10.6cm、幅3.7cm、厚さ0.7cm、重量31.1gをそれぞれ測る。

cの銭貨は寛永通寶の銅銭である。直径2.5cm、厚さ0.1cm、方孔一辺0.6cm、重量3.2gを測る。表裏面のほぼ全面が錆に覆われているが、ごく一部分ではあるが銭文等を観察することができた。黒灰色のもので、いわゆる「古寛永」銭とみられる。

以上の金属製品は全て第30次調査からの出土で、81は2-2区第1層、82は2-1区第2層、83は2-1区第1層、cは1区の近代整地土から出土した。



第30図 遺物実測図10

6. まとめ

(1) 西外堀石垣及び吹上橋に関する調査成果

第30次調査では、西外堀の北側石垣周辺に設定した第4区において『和歌山御城内惣御絵図』に描かれている橋架かりの石垣張り出し部を検出し、この幅が約14.0m (七間)、橋幅が約6.0m (三間) という具体的な数値成果が得られた。また橋架かり部分の江戸期における地表面が現地表面から約50cm下 (標高5.75m) に存在し、西外堀を構成する石垣も比較的良好な形で遺存していることを確認することができた。

西外堀石垣に関しては、第30次調査第1区及び第31次調査1-1区・1-2区の3カ所の調査区において西外堀の南側石垣の一部を検出した。このことによって、西外堀の延長ラインが明確とな

り、堀幅が21.0m（十間半）で延びていることを確認することができた。しかし、中消防署跡地に設定した第31次調査1－1区では建物建設時に南側石垣の上部が深さ約2mまで大規模に壊されており、『和歌山御城内惣御絵図』にみえる西外堀の南側石垣周辺の吹上橋関連の遺構は既に失われたものと考えられる。また、市役所南別館西側隣接地に設定した第31次調査1－2区では建物建設時に建物側が深く掘削され南側石垣が大きく断ち割られており、『和歌山御城内惣御絵図』にみえる南側石垣に付設されていたはずの雁木積み石段を検出することはできず、少なくとも石段の上部は既に失われたものと考えられる。

以上、吹上口周辺の発掘調査において、吹上口復元整備のための基本的な情報を得ることができたといえる。

（2）御勘定御門東御櫓及び石垣基底部の調査成果

御勘定御門東側櫓台上面に設定した第30次調査第2区で、遺構面を2面確認した。

第1遺構面では、『御城内惣御絵図』に「御勘定御門角御櫓」と描かれている礎石建物（南北14.3m、東西5.4m）とその南側に接続する土塀について、遺構を実際に確認し、その規模と構造を明らかにした。また、出土遺物から18世紀代を中心とした徳川期の遺構面であることを推定した。これらの遺構の残存状況は良好であり、櫓台石垣を復元整備する際の基礎資料を得られたといえる。

第2面では、櫓台石垣の裏込石の範囲を検出、櫓台上面での櫓台成立時の整地状況を確認し、櫓台の築造状況の一部を明らかにした。また、櫓台石垣の特徴と滴水瓦などの出土遺物から、櫓台成立当初は浅野期の建物が櫓台北側部分に建っていたことを推定することができた。

櫓台西面石垣基底部の状況確認を目的とした第30次調査第3区では、徳川期に築造された石組溝（SD－1）及び付随する石組溜枡（SX－1）を検出し、石垣に伴う構造物を明らかにした。また石垣基底部の状況は、先述の遺構保存のため掘削面積が限られたことと石垣下部が極めて深かったことから、第30次調査3－3区を除いて基底部の確認には至っていない。そして、石垣下部においても石材や間詰石の状況など石垣上部との差異はなく、傾斜角度まで一定（69°～73°）であることを確認した。

以上、櫓台上面及び石垣、石垣基底部周辺まで遺構の遺存状況が良好であるといえ、今後の復元整備を行う際の基礎資料を得ることができた。

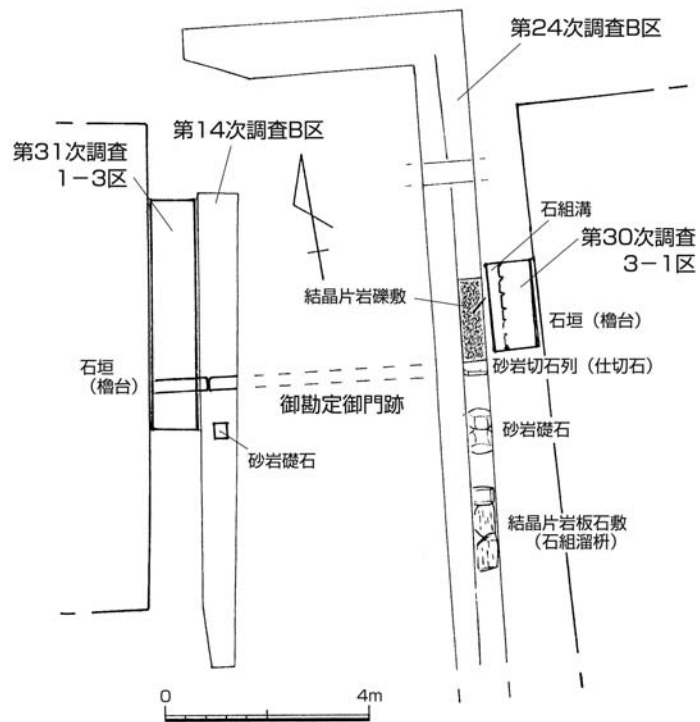
（3）御勘定御門に関する遺構について

これまでの御勘定御門周辺での発掘調査は、第14・24・30・31次調査の4次数にわたって行っている。これらの調査のうち、御勘定御門に関する遺構を検出したものは第14・24・31次調査である（第31図）。

第14次調査では、御勘定御門西側櫓台石垣の前面をトレンチ調査したB区で御勘定御門に関わる砂岩仕切石1条と砂岩礎石1基を検出した。第24次調査では、御勘定御門東側櫓台石垣の前面をトレンチ調査したB区で結晶片岩板石敷、砂岩礎石、砂岩切石列、結晶片岩礫敷を検出した。これらの遺構のうち、結晶片岩板石敷とした遺構について、この調査区と東側櫓台石垣との間を調査した第30次調査3－2区で石組溝に伴う石組溜枡を確認したことから、結晶片岩板石敷は同様の石組溜枡

であると考えられた。このことから、御勘定御門に関する遺構は砂岩礎石、砂岩切石列（仕切石）、結晶片岩礫敷である。

第31次調査の1－3区において、御勘定御門に関する遺構を検出した（第20・32図）。御勘定御門西端部に設定した当調査区では、第14次調査で確認された江戸時代の遺構面及び御勘定御門に関する仕切石を再検出した。仕切石は御勘定御門西側櫓台石垣面に接して設置されていること、仕切石を挟み南と北は比高差をもつ江戸時代の道路面であること、御勘定御門西側櫓台石垣構築時の整地層などを確認し、詳細な時期は不明ながらこれらの遺構は同時期に一連のものとして築造されたものと考えられた。



第31図 御勘定御門関係の検出遺構

以上の御勘定御門に関する遺構を整理する。まず仕切石であるが、方柱状の砂岩切石を横1列に並べて仕切石とした遺構を第31次調査1－3区、第14次調査B区、第24次調査B区の3調査区に渡って延長した位置に1条分を確認した。この仕切石は御勘定御門西側櫓台石垣東面の南北ほぼ中央部分に接して設置されており、東西の櫓台石垣間に東西方向に直線的に設置されている。なお、第30次調査3－1区において東側櫓台石垣前面に南北方向の石組溝を検出している。仕切石の延長ラインは3－1区の調査外にあたることから石組溝との関係は明確ではないが、東西の櫓台石垣間を結ぶならば約7.8mの距離を測る。

次に、砂岩礎石であるが、第14次調査B区と第24次調査B区の2ヵ所で検出した。第14次調査B区のものは一辺約30cmの方形のもので、第24次調査B区は直径約50cmの自然石を2個組み合わせた状態で検出した。これらは形状や規模が異なるが、設置された位置がそれぞれ櫓台石垣面から約1.4mの距離であり、礎石間の距離が約5.2mを測るものである。この場所での櫓台石垣間の距離は約8.0mであり、その中間地点からの距離も等しい位置にあることが重要であるといえる。

最後に、第24次調査B区で検出した結晶片岩礫敷であるが、それに対応する位置を調査した第14次調査B区と第31次調査1－3区では削平を受け検出することができなかった。しかしながら、仕切石の北側に約1.6mの範囲で人為的に敷設したものとみられることから、当遺構は御勘定御門の雨落ちとして機能したものの可能性があると考えられる。

以上、今回の調査までに検出した御勘定御門に関する遺構は、砂岩礎石2ヵ所、砂岩仕切石1条、結晶片岩礫敷1ヵ所であり、御勘定御門を復元整備するための具体的な資料を得られたといえる。

おわりに 史跡和歌山城吹上口の保存整備についての今後の課題

史跡和歌山城吹上口の保存整備にあたって、今回の発掘で判明した点及びなお不明な点について確認しておきたい。即ち、発掘の成果と今後の課題である。

第一に、吹上口部分の西外堀については、南側は石垣の一部を、また北側は石垣及び橋架かりの張り出し部分を検出した。これにより、西外堀の延長ラインが明らかとなり、堀幅が21.0m（十間半）で延びていることを確認できた。また、「和歌山御城内惣御絵図」を見ると張り出し箇所は北側にしかなく、その位置が明確になり、幅が約14.0m（七間）という具体的な数値成果が得られ、天端石も検出している。

第二に、西外堀に架かっていた吹上橋については、橋幅が約6.0m（三間）という数値成果が得られ、左右の位置が明確になった。しかし、橋が天端石の上にのっているのか、張り出しの先に桁をのせる台があったのかは確認できていない。このため、吹上橋がどこからどこまであったのか判明しておらず、長さが不明なままである。

ここで注目する必要があるのは、「和歌山御城内惣御絵図」（口絵1）には確かにこの張り出し部分や吹上橋を描いているが、張り出し箇所の位置や幅、また吹上橋の位置や幅が発掘の検出結果と一致していない点である。同絵図は貼絵図であるが、吹上橋や張り出し部分は元の原図に描いており、同絵図の原図が作成された1800年前後の姿である（武内善信 2011年）。他方、発掘で検出されたのは、撤去前の江戸時代最後の橋の遺構と考えてよい。この理由で、完全に一致しないのかもしれない。しかし、同絵図の描き方を見ると、建物部分は精密に作成しているが、吹上橋はただ「橋」と記載しているだけで、橋や張り出し部分はただ単に存在を表示しているだけのようと思われる。それゆえ、同絵図を吹上口の整備の資料として取り扱うには、この点に注意する必要があるだろう。

第三に、吹上御門については遺構が攪乱のため検出できなかった。「和歌山御城内惣御絵図」に吹上御門を平面的に描いているが、前述した同絵図の注意点や門が橋に近接しすぎているとの意見もあり、吹上御門の正確な位置についてはさらに検討を加えなければならない。

第四に、吹上御門に接する両脇の石垣は現在撤去されているが、今回の発掘で攪乱等のため検出されていない。これは吹上口の虎口の北側と東側を構成する石垣である。「和歌山御城内惣御絵図」に吹上御門の両脇の石垣が描かれている。同絵図の石垣の表示は、現在残っている石垣部分で比較しても、かなり正確に描いており、平面的な位置はこれに準拠したらよからう。

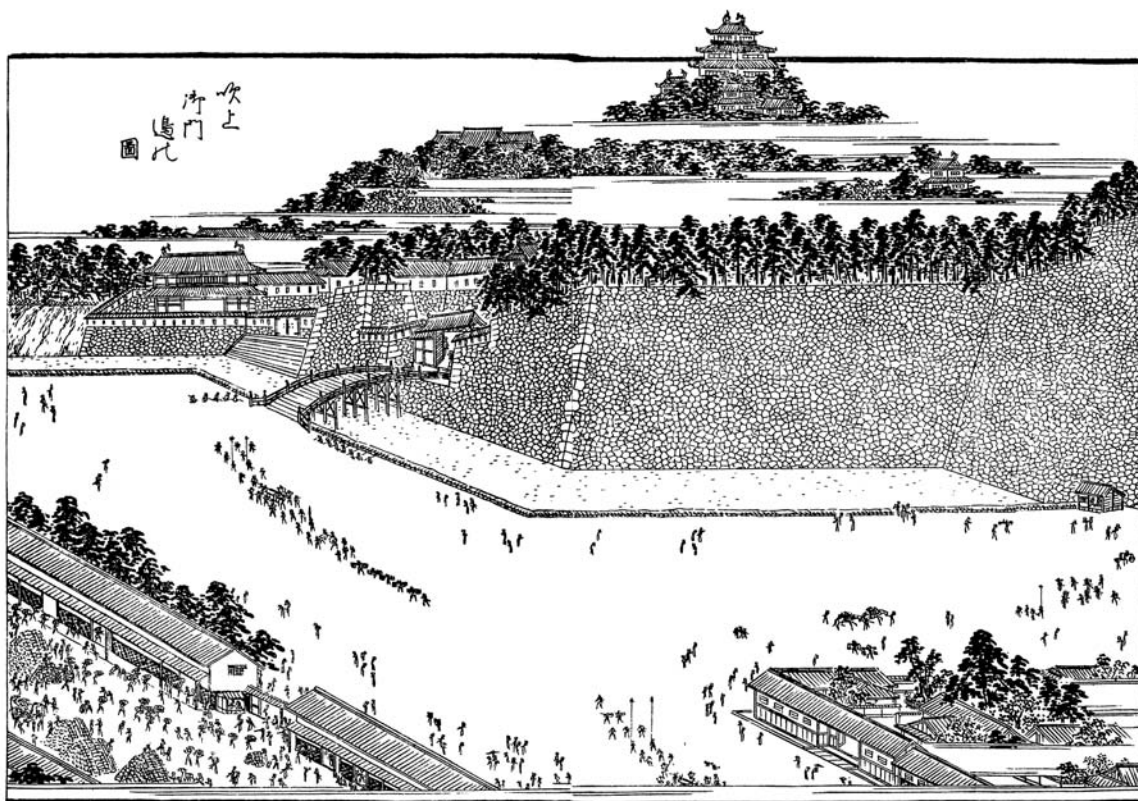
問題は高さである。もちろん、これは発掘で検出できるものではない。現在依拠できる資料は、吹上口の古写真が発見できていないため、『紀伊国名所図会』の「吹上口辺の図」（参考図2）等の絵画資料しかない。ここで、この図の問題点を指摘しておきたい。まず、吹上御門の東側の石垣を高さが異なる二段に画いているが、他の絵画資料（口絵3、4）では全て同じ高さで描いている。また、両脇の石垣上に土塀を画いているが、他の資料には描かれていない。なお、「和歌山御城内惣御絵図」には石垣に土塀の表記もなく、東の石垣が二段になっていない。さらに、この「吹上口辺の図」に前述した吹上橋北側の張り出し部分が、一切描かれていない。以上のことから、『紀伊国名所図会』に描かれている絵が、どこまで参考資料として採用できるのか、十分史料批判を加える必要があることは間違いない。

吹上口の虎口を形成する石垣のうち西側の石垣は、江戸時代の積み方ではなく、新しい方法で積み直されている。このため、この西側の石垣については今後どうするのか検討する必要がある。

第五に、御勘定御門の東側石垣は緑色片岩（紀州青石）を中心とした結晶片岩と砂岩（和泉砂岩）の二種類の石材で構成され、野面積みに積まれている。なお、浅野期石垣の特徴といわれる刻印のある石材及び矢穴のある割石は全くみられないことから、この石垣は結晶片岩石垣から砂岩石垣への移行期のものと考えられ、友ヶ島石切場開発以前の浅野期初期のものと推定でき、和歌山城内でも特徴のある貴重な石垣であることが確認できた点は第一章で述べた。

ところが、勘定御門東側石垣については、老朽化・風化が進み崩落の危険性が指摘されてきた。しかも、この石垣は城内通路に面しているため、早急に改善しなければならなかった。さらに、城内は史跡指定区域であるため、景観・遺構への配慮が必要である。特にこの石垣は、前述したように、和歌山城内の石垣の中でも特徴のある貴重な石垣であることから、積み直すのではなく、出来る限り現状を残したままで、補充石や間詰石を用いた修繕を行なう必要があったのである。このため、石垣の調査を行なった上で、今年度から二年間、勘定御門東側石垣の保存修理事業を行なっている。

最後に、今回の報告書において発掘の成果だけでなく、吹上口周辺の工事等による現状変更の立ち会いの際に、遺構等が見つかったときの調査報告も掲載している。しかしながら、遺構が発見されているにもかかわらず、図面等を作成しておらず、掲載できなかったものも存在した。これは担当者の責任もさることながら、これまで立ち会いにより遺構が発見された場合に公表するシステムとそれに対応した調査の方法が確立されていなかったことが、大きな要因であろう。今後、この点を改善しなければならない。



参考図2 『紀伊国名所図会』より「吹上御門辺の図」

【参考文献】

- 和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第5巻 1975年
和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第4巻 1977年
三浦圭一「羽柴秀吉の紀州攻撃と大坂」『大阪の歴史』6号 1982年
播磨良紀「桑山重晴について」『和歌山市史研究』12号 1984年
播磨良紀「再び桑山重晴について」『和歌山市史研究』15号 1987年
和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第2巻 1989年
和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第1巻 1991年
三尾 功『近世都市和歌山の研究』思文閣出版 1994年
財団法人和歌山市文化体育振興事業団『史跡和歌山城第12次発掘調査概要報告書－下水道管理設
工事に伴う調査報告－』1994年
財団法人和歌山市文化体育振興事業団『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報5－平成7（1995）年
度－』『史跡和歌山城第14次調査』1998年
財団法人和歌山市文化体育振興事業団『史跡和歌山城第22次発掘調査概報』2000年
九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000年
九州近世陶磁学会『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる』第1分冊 2002年
財団法人和歌山市文化体育振興事業団『史跡和歌山城第25・26次発掘調査概報』2002年
財団法人和歌山市文化体育振興事業団『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報7－平成10年度（1998
年度）・11年度（1999年度）－』『史跡和歌山城第21次調査』2002年
財団法人和歌山市文化体育振興事業団『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報8－平成12年度（2000
年度）・13年度（2001年度）－』『史跡和歌山城第24次調査』2004年
和歌山市まちづくり推進室和歌山城管理事務所『史跡和歌山城御橋廊下復元及び二之丸西部・西
之丸第一期整備報告書』2007年
高橋克伸「明治十三年の和歌山城内民有地一件について」『和歌山市立博物館研究紀要』24号
2010年
財団法人和歌山市都市整備公社『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報－平成19年度（2007年度）－』
「史跡和歌山城第30次調査」2010年
財団法人和歌山市都市整備公社『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報－平成20年度（2008年度）－』
「史跡和歌山城第31次調査」2011年
武内善信「和歌山城に関する三つの絵図の再検討」『和歌山地方史研究』61号 2011年

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきわかやまじょう だい30・31じはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	史跡和歌山城第30・31次発掘調査報告書							
副書名	吹上口保存整備事業に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	北野隆亮 井馬好英 奥村 薫 武内善信 久保香子							
編集機関	財団法人和歌山市都市整備公社							
所在地	640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁36 TEL 073-435-1129							
発行機関	和歌山市まちづくり局まちおこし部和歌山城管理事務所							
所在地	640-8146 和歌山県和歌山市七番丁23 TEL 073-435-1044							
発行年月日	西暦 2012年 3 月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
しせきわかやまじょう 史跡和歌山城	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 いちばんちょう 一番丁	3020150	指1	34° 13′ 46″	135° 10′ 11″	2007.12.10 ～2008.3.11 2008.11.27 ～2009.3.27	232.86 69.5	保存整備事業 に伴う発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
史跡和歌山城	城館跡	江戸時代	城郭石垣（堀、櫓台、橋台）、礎石建物、土堀、城門仕切石・礎石・礫敷		土師器、須恵器、瓦器、中世土師器、輸入陶磁器、近世土師器、近世土師質・瓦質土器、瀬戸・美濃系陶磁器、肥前系陶磁器、堺焼、瓦、土製品、石製品、金属製品		吹上橋の橋台石垣を検出。御勘定御門東側櫓台上で浅野家家紋「遼鷹羽紋」の瓦当文様の滴水瓦がまとまって出土。旧座標。	
要約	和歌山城の吹上口で西外堀に関わる石垣及び吹上橋の橋台石垣、御勘定御門東隅櫓台上で礎石建物と土堀を検出した他、御勘定御門に関わる仕切石・礎石などを検出し、吹上口及び御勘定御門周辺の残存遺構の状況を確認した。							

版 図



第1区 調査前の状況（南東から）



第4区 調査前の状況（東から）



第2区 調査前の状況（南から）



第3区 調査前の状況（北から）



第1区 全景（北から）



第1区 SV-5（北から）



第1区 SV-5 裏込状況（北西から）



第1区 東壁堀内部土層堆積状況（西から）



第4区 全景（東から）



第4区 全景（西から）



第4区 SV-6・7 (南東から)



第4区 SV-8 西半部 (南から)



第4区 SV-8・9 (南西から)



第4区 SA-4 (南から)



第4区 東壁堀内部土層堆積状況（西から）



第4区 北壁中央部サブトレンチ土層堆積状況（南から）



2-1区 第1面全景（南から）



2-1区 SH-1 東辺（南から）



2-1区 第2層遺物出土状況（北から）



2-1区 第2面全景（南から）



2-1区 サブトレンチ掘削状況（南から）



2-1区 南北方向セクションベルト土層堆積状況（西から）



2-2区 第1面全景（南から）



2-2区 SH-1（北から）



2-2区 SH-1・SA-3 接続状況（北東から）



2-2区 SA-3（東から）



2-2区 SA-3 (北から)



2-2区 SA-3 崩落土・瓦出土状況 (東から)



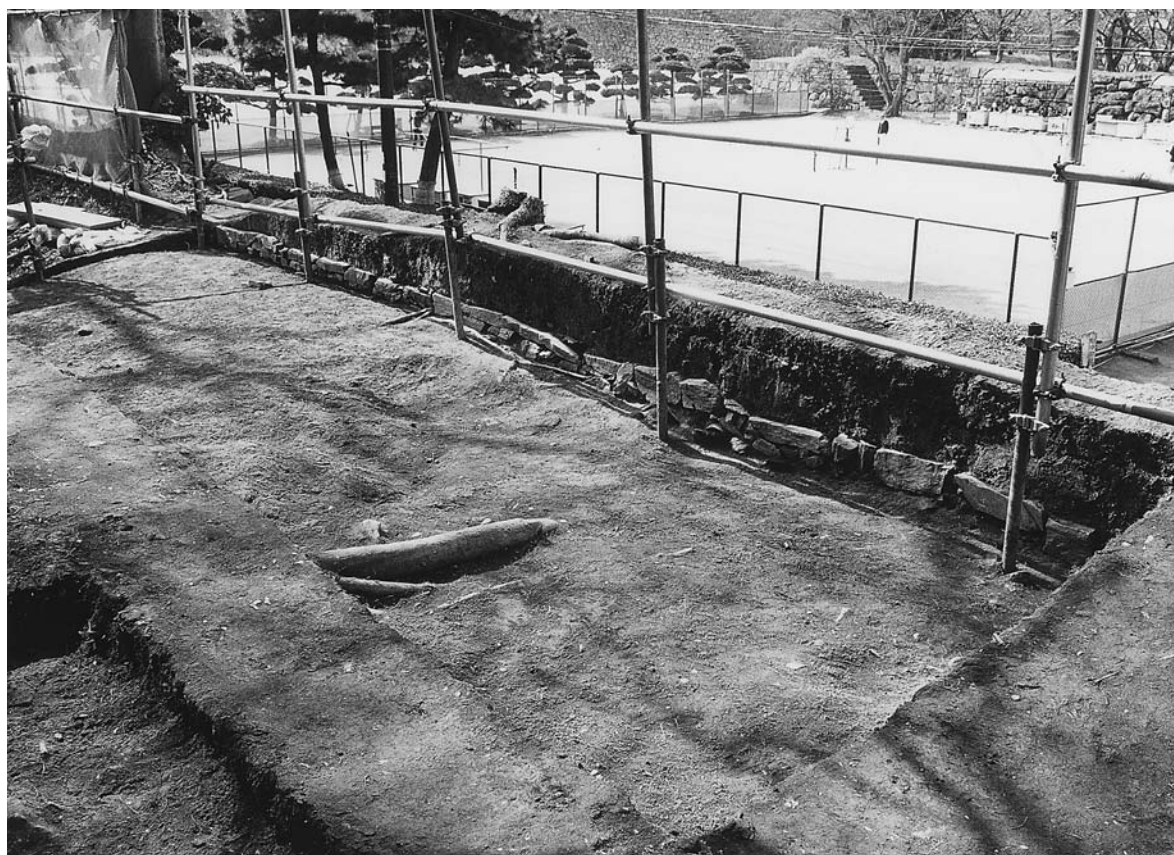
2-2区 第2面全景（南から）



2-2区 第2面SV-1裏込検出状況（北から）



2-3区 第1面全景（北から）



2-3区 SA-3（北東から）



2-3区 第2面全景（北から）



2-3区 第2面サブトレンチ掘削状況（東から）



3-1区 全景（西から）



3-1区 SV-1 基底部の状況（西から）



3-2区 全景 (右が北)



3-2区 全景 (西から)



3 - 2 区 石組溜枡（北東から）



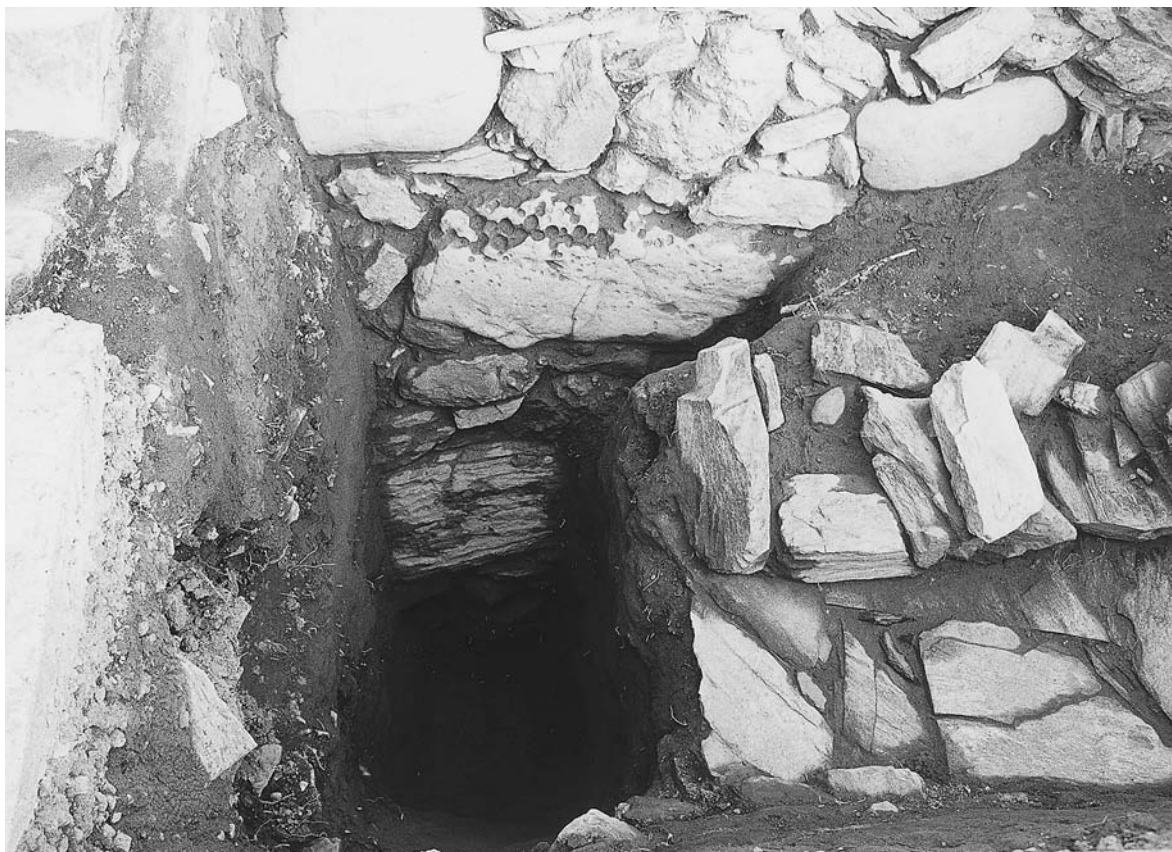
3 - 2 区 南壁土層堆積状況（北から）



3-3区 全景（西から）



3-3区 全景（北から）



3 - 3 区 SV-1 石垣基底部の状況（西から）



3 - 3 区 南壁土層堆積状況（北から）



1-1区 調査前の状況（北から）



1-1区 全景（北から）



1-1区 堀石垣（北から）



1-1区 サブトレンチ（北から）



1 - 2 区 調査前の状況（南から）



1 - 2 区 全景（南から）



1 - 2 区 堀石垣（北東から）



1 - 2 区 堀石垣裏込状況（東から）



1 - 3 区 調査前の状況 (南から)



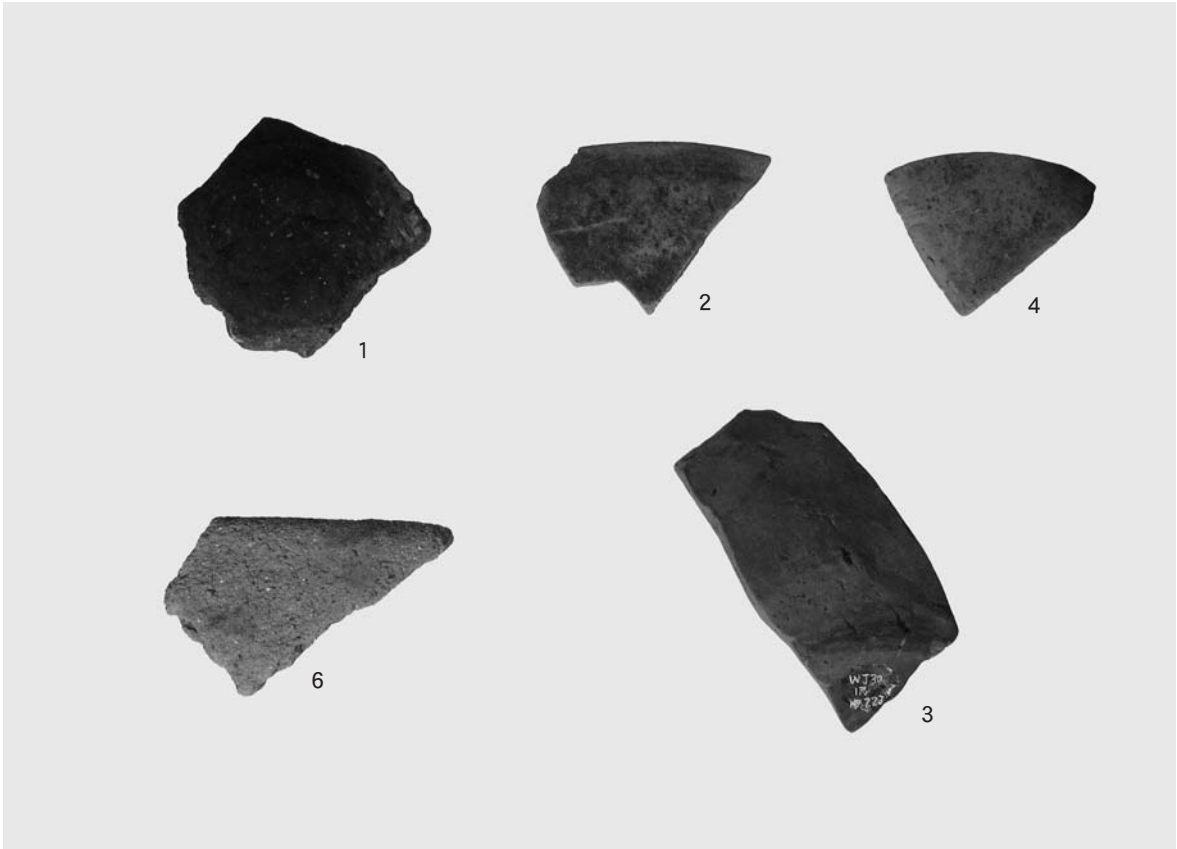
1 - 3 区 全景 (南から)



1－3区 砂岩仕切石（北から）



1－3区 サブトレンチ（東から）



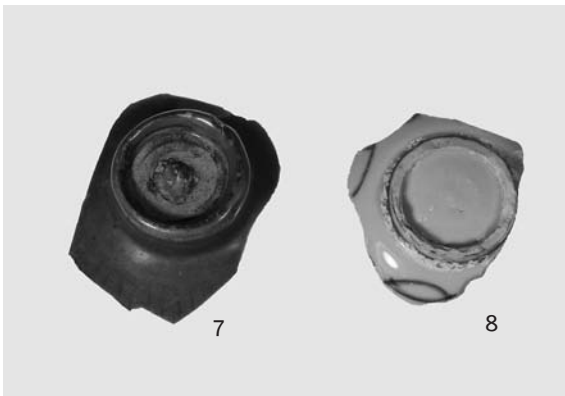
土師器 1 壺、4 皿、6 塼、瓦器 2・3 碗



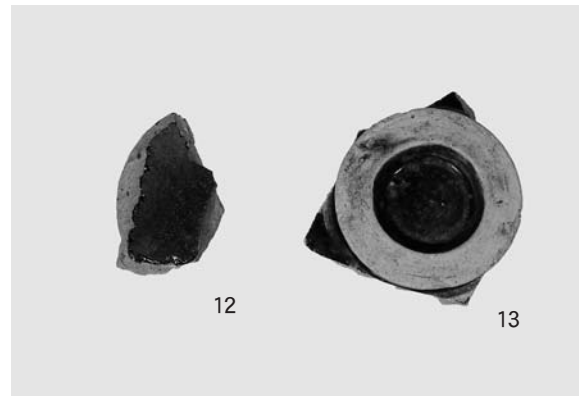
中国製青磁 7 碗、中国製染付 8 碗



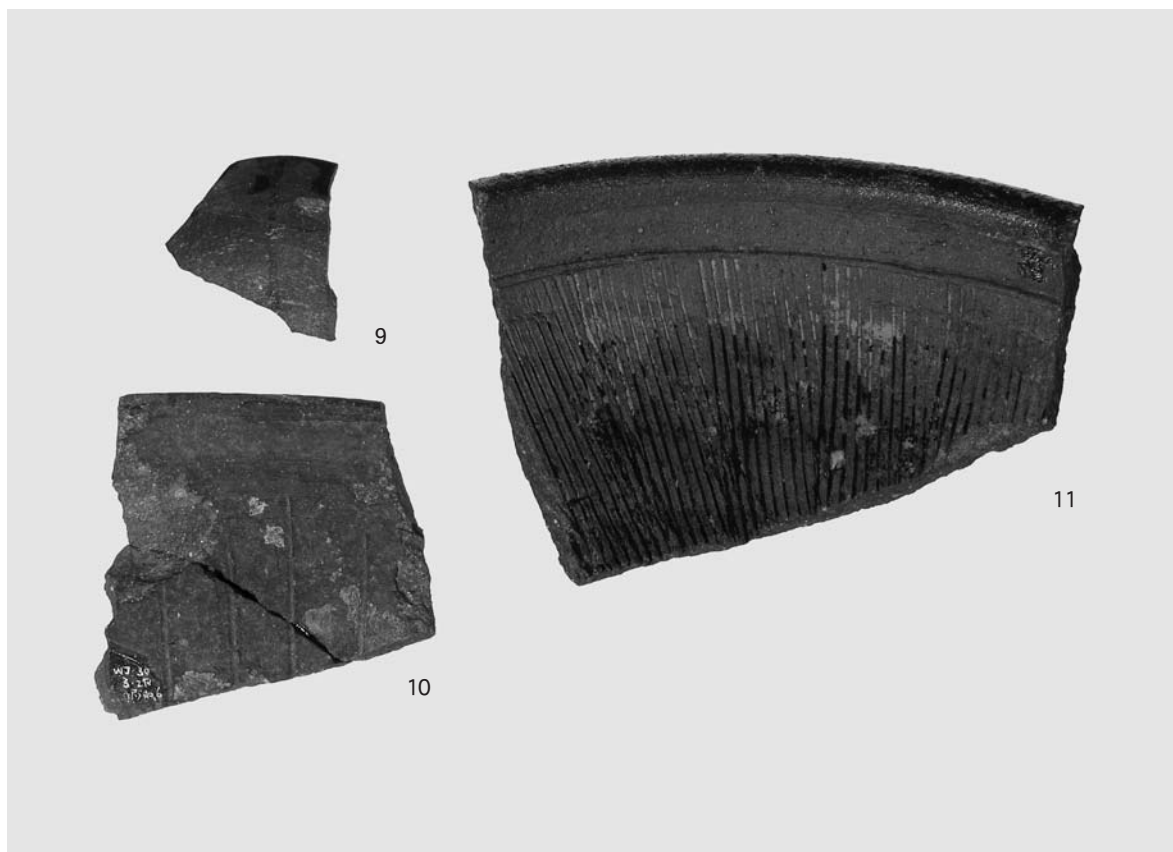
土師器 5 皿



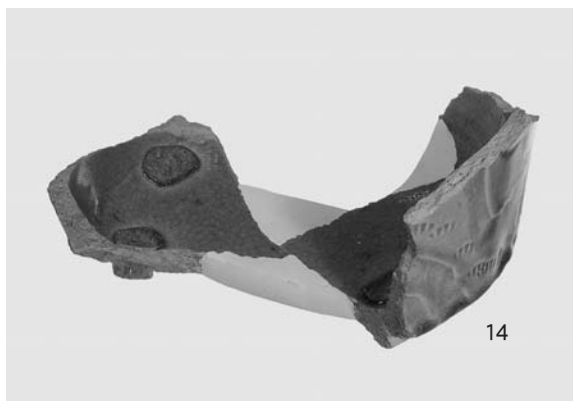
同上裏面



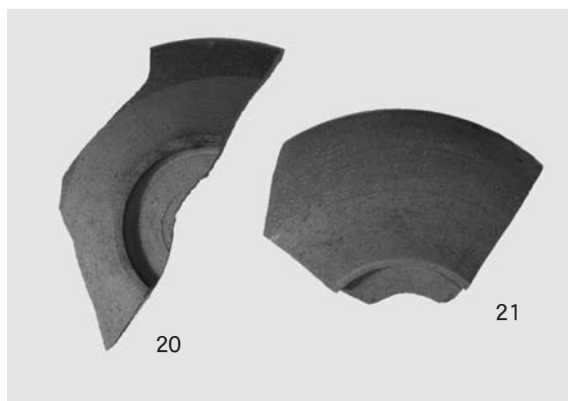
瀬戸・美濃系陶器 12 天目茶碗、13 黒褐釉碗



備前焼 9 灯明皿、丹波焼 10 播鉢、堺焼 11 播鉢



瀬戸・美濃系陶器 14 大鉢



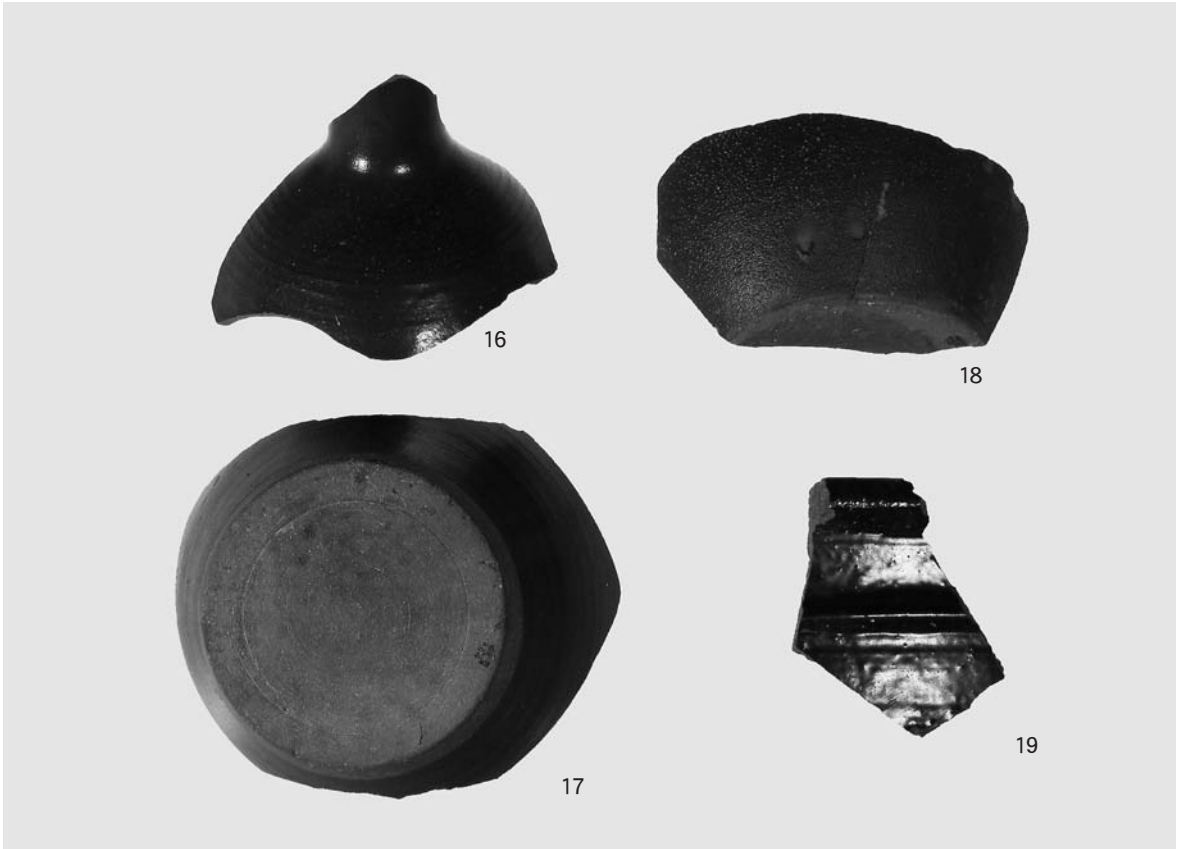
産地不明陶器 20・21 皿



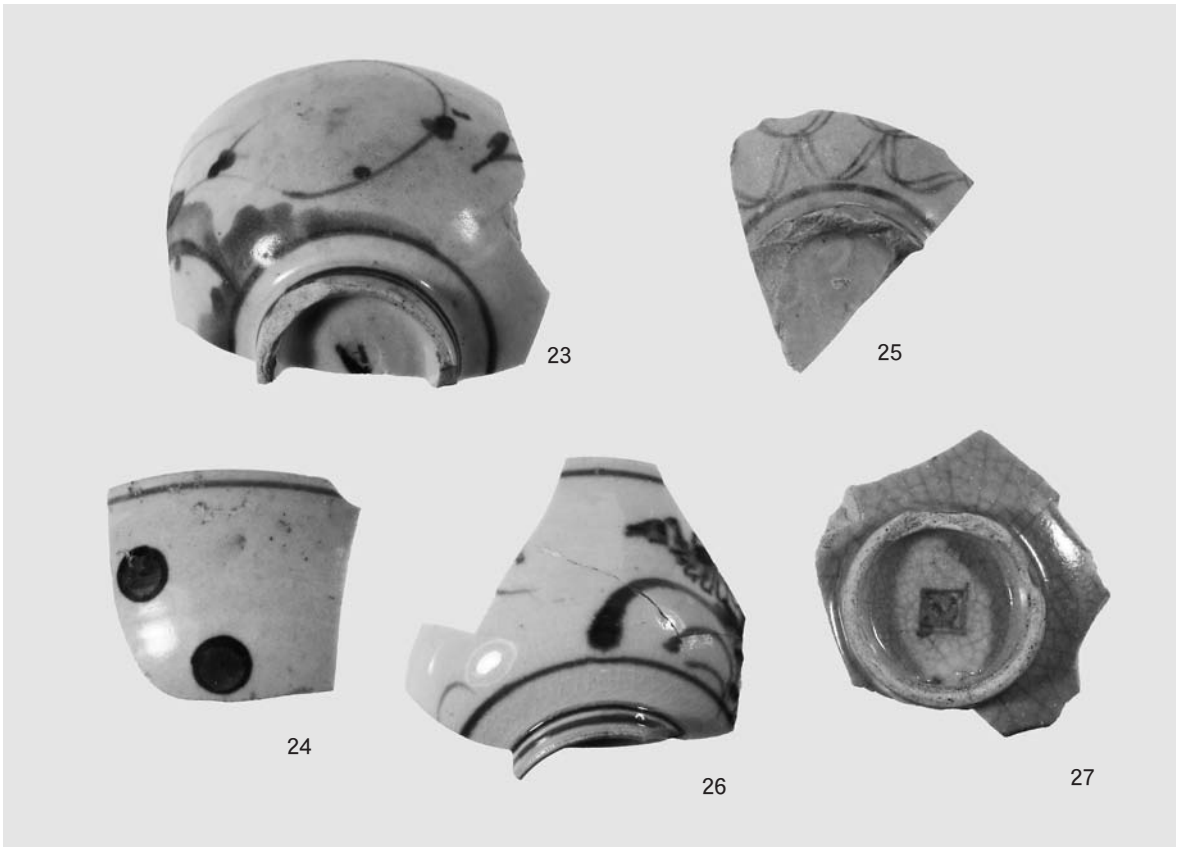
京・信楽系陶器 15 半筒形碗



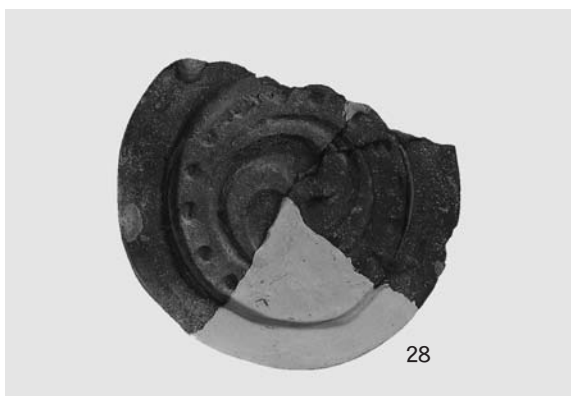
肥前系磁器染付 22 筒形碗



大谷焼 16~18德利、19甕



肥前系磁器 23~25染付丸椀、26染付端反椀、27青磁染付椀



28軒丸瓦



29軒丸瓦



30軒丸瓦



31軒丸瓦



32軒丸瓦



33軒丸瓦



34軒丸瓦



35軒丸瓦



36

36軒丸瓦



37

37軒丸瓦



38

38軒丸瓦



39

39軒丸瓦)



40

40軒丸瓦



41

41軒丸瓦



42

42軒丸瓦



43

43軒丸瓦



44

44軒平瓦



47

47軒平瓦



50

50軒平瓦



51

51軒平瓦



53

53滴水瓦



54

54滴水瓦



55

55滴水瓦



56

56滴水瓦



57

57滴水瓦



58

58滴水瓦



59

59滴水瓦



60

60軒棧瓦



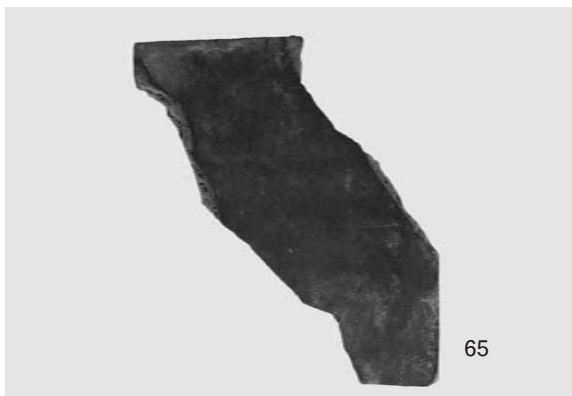
62

62丸瓦



63

63丸瓦



65平瓦



66平瓦



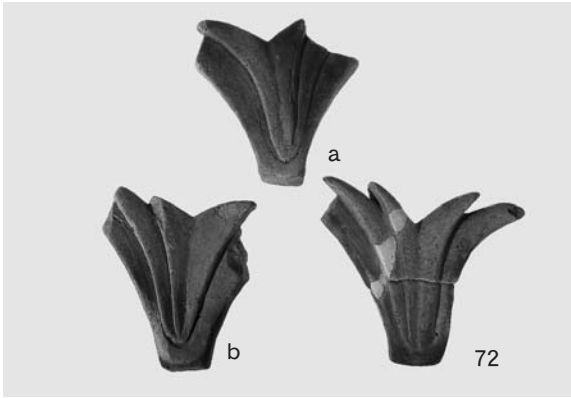
68平瓦



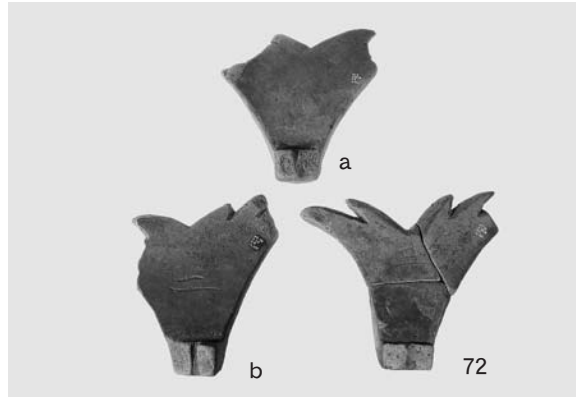
鯢瓦 70顔部 71棘状突起



69鯢瓦



鯨瓦 72・a・b 鰭



同左裏面



73鬼瓦



74鬼瓦



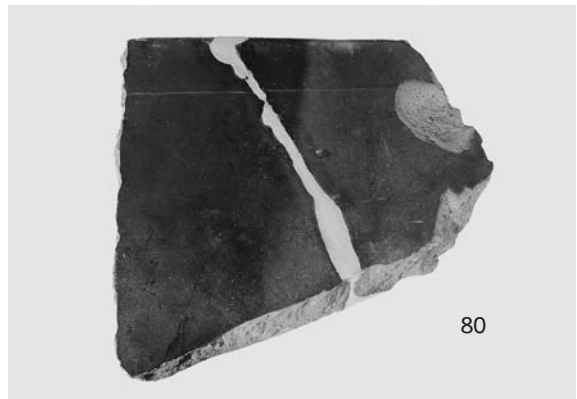
75鬼瓦



77鳥伏間瓦



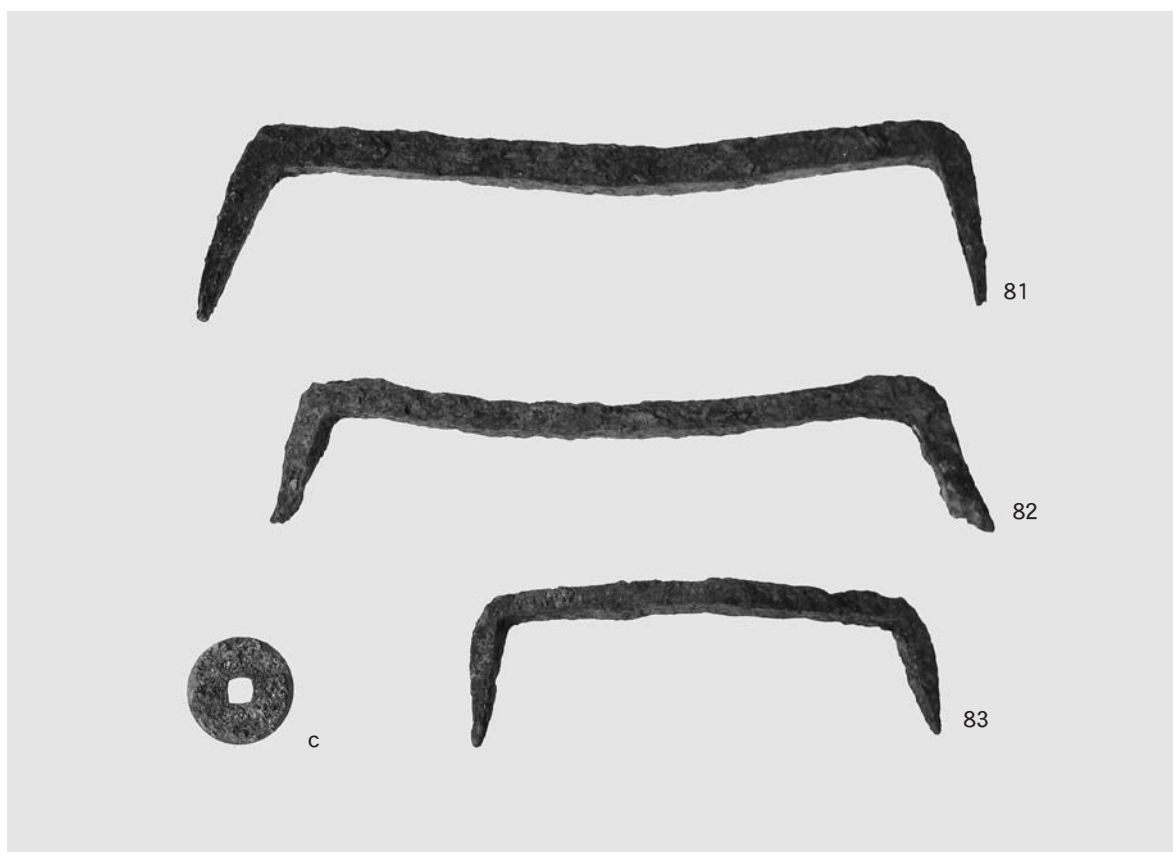
78・79棟込瓦 (輪違い)



80塼瓦



76留蓋瓦



金属製品 81・82・83鋸 錢貨 c寛永通寶

平成24(2012)年 3 月16日発行

史跡和歌山城第30・31次発掘調査報告書

－吹上口保存整備事業に伴う発掘調査－

編 集 和歌山城管理事務所
(財)和歌山市都市整備公社

発 行 和歌山城管理事務所

印 刷 株式会社ウイング

©和歌山市和歌山城管理事務所